

世界最後の謎を解き明かす

ムー大陸探検事典

アトランティスとムーの戦いはいまだやまず……

ヒトラーの最終指令「失われたラ・ムーの空艇と地下都市を発見せよ！」

探検仮説

- 1) 伝説のアトランティスとは歴史上のアッシリア、ムーとはカーリア(カラ族=原日本人)のことである。
- 2) C14年代の1万2000年前は、文献・碑文から明らかになった歴史年代の紀元前687年に相当する。
- 3) 太古の高度な文明は“バーラタ=トロイ核戦争”で滅んだ。4) この戦争にともなう地軸の変動で太古の宇宙文明が滅んだことが、当時の地下都市に残された碑文などによって確かめられる。5) ムー文明は太古日本の宇宙文明であった。6) ムー王国は夏・殷・周の名で知られている古代日本の世界王国だった。7) 世界各地の文明は、日本人の祖先カラ族が建設した。8) 日本は地球最初の国家ティルムン(東大国)の継承国家であった。9) 太古日本の王は世界を治めた—そのことは世界各地に残された日本の神代文字碑文の解読結果から証明できる。10) 太古日本のムー文明が今や21世紀によみがえろうとしている。

世界最後の謎を解き明かす

ムー大陸探検事典

監修：高橋良典

編著：日本探検協会

ISBN4-331-00624-7C0~40P880E

〈監修者プロフィール〉

高橋良典(たかはしよしのり)

日本探検協会会長/地球文化研究所所長/ジュンキリクラブ代表幹事。東京都出身。仙台第一高等学校を卒業後、東京大学教養学部^学部に入学。東京大学経済学部に進学し、西洋経済史を専攻したあと、世界各地の神話・伝説・叙事詩の比較研究を進め、バーラタ核戦争と古代クル族の謎に取り組む。現在は、世界各地の地下都市とクル族碑文の調査を進めながら、神話考古学の新しい分野を開拓中。1992年11月より、上野の東京国立博物館大講堂で地球探検・公開シンポジウム「古代日本人の大航海時代」「日本人のルーツを探る」を隔月開催し、プログラム「特別報告」の中で、国内・海外の未解読文字を紹介し、その解読結果を発表している。

主な著訳書『アポカリプス 666』『諸世紀の秘密』

『日本とユダヤ謎の三千年史』『世紀末の黙示録』『ロックフェラー帝国の陰謀 Part I』

『ロックフェラー帝国の陰謀 Part II』(以上、自由国民社)『大予言事典 悪魔の黙示 666』『人類は核戦争で一度滅んだ』(以上、学研ムー・ブックス)『謎の新撰姓氏録』『太古 日本の王は世界を治めた』『謎の地底王国アガルタ』『漢字を発明したのは日本人だった!』『縄文日本の宇宙文字』(以上、徳間書店)『縄文宇宙文明の謎』『日本が造った超古代世界王朝の謎』(以上、日本文芸社)『ノストラダムスの遺言』『地球文明は太古日本の地下都市から生まれた』『古代日本 カラ族の黄金都市を発見せよ!』(以上、飛鳥新社)『ムー大陸探検事典』(廣済堂出版)『太古日本 驚異の秘宝』(講談社)他

〈編著者プロフィール〉

幸沙代子(ゆきさよこ)

日本探検協会事務局長/大分県生まれ。西南学院大学卒。フリーランスとして翻訳・執筆・編集に従事。文化人類学・民俗学のテーマに取り組み、世界各地の神話・伝説・口承文芸の比較研究を進める。古代アジア文明と古代アメリカ文明のつながりを調査するため、メキシコ、インド地域を訪問・調査。日本探検協会主催・日本ジュンキリクラブ共催の地球探検シンポジウム(東京国立博物館)に各分野の専門家・学者を招聘し、「日本人のルーツ」を明らかにする研究作業を続けている。

はじめに

日本探検協会 幸沙代子

本書は、この分野の刊行物としては、海外に類を見ない“世界初”の探検事典である。ここでは、後述するとおり、日本探検協会の高橋良典の仮説とその実証が主な内容となっている。

高橋率いる日本探検協会は、過去二十数年、国内と海外の現地調査を進め、各地の神話・伝説・古文書・遺跡を研究して、新発見のデータを数多く収集してきた。

高橋(地球文化研究所所長)野古代文字研究の成果によって、ムー大陸とアトランティスの伝説にまつわる秘密のベールがはがされ、過去に実在した文明の真相が徐々に明らかになり始めている。そういった意味でも、本書を“世界初”とあえて述べたのである。

18世紀のポンペイ遺跡の発掘以来、考古学のメスは次々と神話を事実にくみかえ、過去の高度な文明の存在とその大異変による滅亡は、最先端の研究者・専門家の間ですでに周知の事実となっている。

地球上の地理的な発見は基本的に終わり、時代はいよいよ“歴史上の大発見時代”を迎えようとしている。

C14年代(放射性炭素年代)で1万2000年前とされたアトランティス大陸・ムー文明の滅亡年代も、

最近の文献・遺跡・古代碑文の調査から、紀元前 687 年ころであることが明らかになっている。

今やムー文明とアトランティスにまつわる物語は伝説ではなく、歴史的事実となりつつある。そうした時代の流れの中であって、日本探検協会では、ムー文明をかつてチャーチワードが唱えた伝説的・幻想的な文明としてとらえるのではなく、太古日本の宇宙文明の総称としてとらえ直していこうとしている。事実、「ムー」とは古代の「飛行物体」を意味するシュメール語なのである。

本書では、ムー大陸とアトランティスの伝説に魅せられた多くの探検家たちのエピソードを紹介すると同時に、紀元前の高度な文明をめぐる仮説とその検証・調査の成果をふんだんに盛り込んだ。その主な内容を要約すると、次のとおりである。

- ①伝説のアトランティスとは歴史上のアッシリア、ムーとはカーリア(カラ族=原日本人)のことである。
- ②C14 年代の 1 万 2000 年前は、文献・碑文から明らかになった歴史年代の紀元前 687 年に相当する。
- ③太古の高度な文明は“パーラタ=トロイ核戦争”で滅んだ。
- ④この戦争にともなう地軸の変動で太古の宇宙文明が滅んだことが、当時の地下都市に残された碑文などによって確かめられる。
- ⑤ムー文明は太古日本の宇宙文明であった。
- ⑥ムー王国は夏・殷・周の名で知られている古代日本の世界王国だった。
- ⑦世界各地の文明は、日本人の祖先カラ族が建設した。
- ⑧日本は地球最初の国家ティルムン(東大国)の継承国家であった。
- ⑨太古日本の王は世界を治めた一そのことは世界各地に残された日本の神代文字碑文の解読結果から証明できる。
- ⑩太古日本のムー文明が今や 21 世紀によみがえろうとしている。

以上のようなテーマについて書かれた本書は、初心者にも専門家にも同時に親しんでいただける内容となるよう心がけたつもりである。

読者の理解を容易にするため、この種の書物としては異例といえる二百数十点の図版を用いるなど、編集上の工夫を試みた。

本書は、今日までの日本探検協会の研究調査の成果を要約して収めたものである。

ここに示された太古ムー文明の実体は、21 世紀の宇宙時代を迎えようとしている今、必ずや読者に新しい文明創造の手がかりを与えてくれるに違いない。

われわれは今や、太古日本の宇宙文明を解明するため、新たなる地球探検・宇宙探検に旅立とうとしている。

本書がきっかけとなって、読者とわれわれがともに未知の世界の探検を目ざすことができれば幸いである。

《目次》

はじめに

第1章 ムー大陸とアトランティス

チャーチワードの仮説

伝説Ⅰ はるかなるムー大陸

伝説Ⅱ 滅び去ったアトランティス

●アトランティス大陸●アマゾン海の黄金都市●イースター島●インダス文字●巨石文化●ストーンヘンジ●大ピラミッド●太陽のピラミッド●ティアワナコ●テーベ●テオティワカン●パールベック●ベルリッツ●マウンド・ビルダー●マヤ文字●ムー王国●モアイ

第2章 失われた神々の遺産を求めて

地下都市探検の物語

エピソードⅠ 20世紀最後の秘密/アーネンエルベ/地下都市を発見せよ/円盤の謎を解明せよ

エピソードⅡ 古代カラ族の地下都市文明●アーネンエルベ●アメリカの地下回廊●インカ帝国●宇宙考古学●エルドラード文字●エル・フェルテ●クスコ●航空考古学●サクサワマンの要塞●ナスカ象形文字●ブラジルの地下都市●ホピの迷宮●マチュピチュ●マヤの地底王国●南アメリカの要塞●ラスト・バタリオン

第3章 異変で滅び去った高度な文明

ムー文明の痕跡をさぐる

エピソードⅠ 歴史時代の異変を物語る遺跡

エピソードⅡ 紀元前の高度な医学/古代エジプトの医学/古代ヨーロッパの医学/ミイラの謎/古代アソンの医学●アカンパロの土偶●ヴェリコフスキー●エリオット・スミス●オーパーツ●オヤンタイタンポの要塞●ガアンチ文字●クィクィルコの円錐ピラミッド●グローゼル文字●コスタリカの石球●コロンビアのジェット機●古代のコンピュータ●古代の電池●サッカラの航空機●サハラの宇宙人●錆びない鉄柱●水晶頭蓋骨●セテ・シダデス文字●タルテッソス文字●ナスカの地上絵●パハマ海底遺跡●ビミニ海底遺跡●ピリ・レイス地図●ロシュベルチエ文字●倭人が残した未解読文字

第4章 古代核戦争と謎の地下都市

高橋良典の仮説 I

証拠 I 秘境にひろがる荒れ狂った大地/数十万人が住める巨大地下都市があった/戦争に備えた地下都市の疑問/核戦争が地下都市を襲った

証拠 II 数百万度の熱でできたガラス層/高熱破壊の遺跡は何を語るのか/伝説の兵器は現代の核ミサイルか？

●アルタミラ●ヴァル・カモニカ●エジプトの地下都市●王家の谷●オデッサ回廊●カイマクル●カッパドキア●クーガ王国●クレタの迷宮●古墳シェルター説●サハラ砂漠の謎●C14年代測定法●シルダリア地下回廊●テクタイト●トロイ●パイトンの落下●バベルの塔●ヒッタイト●放射能の後遺症●ポリシヨイ・キテジ●マハーバーラタ●ムー王国の地下都市●ムスタング●ラーマヤナ

第5章 ムー文明の継承者・東大国と日本

高橋良典の仮説 II

証拠 I 大いなる『契丹古伝』/抹殺された神代の記憶

証拠 II よみがえる高天原の神々/今なお戦いはやまず

●アヒルクサ文字●汗美須銚●契丹古伝●西征頌疏●シャンカ文字●辰殷大記●ティルムン●秘府録●費彌国氏洲鑑●八咫鏡文字●耶摩駘記●ヨセフ

第6章 謎のムー碑文が語り始めた

探検協会の調査 I

レポート I インダス文明の建設者は日本人だった/クルの文明はアジア全土に栄えた

レポート II デカン高原は神代文字の宝庫だった

●インドの神代文字碑文ーアマラーヴァティ碑文●パージャ石窟碑文 A●パージャ石窟碑文 B●ポージプル碑文●サーンチー仏塔碑文●カピラ城のコイン●キャサニア碑文●呉城文字●古代琉球文字●高砂文字●高瀬鰐口●斐太石器●宮下文献●吉見百穴古字

第7章 古代の地球を治めた日本の王

探検協会の調査 II

リポートⅠ 古代カラ族の未解読文字分布

リポートⅡ 『竹内文献』と古代文字

●アイの胸飾り●アシカビキミヌシ●アメノコトチ●アメノヤソヨロズタマ●アンデスの黄金板碑文●イザナギ●イジュンハン碑文●イースター島文字●エトルリア文字●オオトノチ●オモタルヒコ●岐山文字●キンバレー文字●クニトコトチ●クレタ象形文字●クレタ線文字 A●タカミムスビ●竹内文献●テーベ王朝●トヨクモノネ●ペドラ・ピンタダ文字

第8章 今よみがえる太古日本のムー文明

ふたたび美しい星に帰る日をめざして

地球探検Ⅰ 古代宇宙文明の大いなる遺産

地球探検Ⅱ 地球から銀河へ旅立った神々/ユーカラの宇宙船

●宇宙服土偶●エトルリアの宇宙船●エトルリアのロケット●古代中国の宇宙飛行士●サンダーバード●山海経●空飛ぶ蛇●フリ鳥●フリ・ハヨクペ●ユーカラの宇宙船

参考文献

第1章 ムー大陸とアトランティス

チャーチワードの仮説



ドレスデン文書に描かれたマヤの女性

第1章

ムー大陸とアトランティス

チャーチワードの仮説

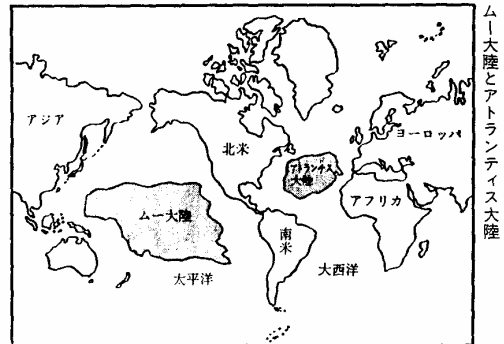


ドレスデン文書に描かれたマヤの女性

今から一万二〇〇〇年前、太平洋と大西洋にあった二つの大陸が恐るべき異変のために消え去ったという。

遠い昔、ギリシアの大哲学者プラトンが唱え、20世紀にチャーチワードが世に広めた沈没大陸と失われた

王国の伝説は、はたしてほんとうだったのだろうか。世界の各地には、今なお秘密のベールにつつまれた遺跡や未解読文字がたくさん残されている。が、それらはアトランティス大陸とムー王国の謎を解き明かす鍵をわれわれに与えてくれるのだろうか。



ムー大陸とアトランティス大陸

伝説 I

はるかなるムー大陸

その日、ムー大陸はいつものように静かな朝を迎えた。

一点の雲もない青い空。深く澄みきった海。そして緑の熱帯樹にふちどられた内海と大河に沿って並ぶ石造りの都市や町。それらの町は、色とりどりのかぐわしい花に包まれ、その影をおだやかな水面に映していた。

ムー大陸のはてしない沃野には、まばゆいばかりの太陽の光がさんさんと降り注ぎ、すっかりうれきったかだもの香りがあたり一面に漂っていた。なだらかな丘の間を縫うように流れる運河には、穀物や果実、樹液、香料などの産物をいっぱい載せた船

が、ゆっくりと走っていた。水辺のハスの花は、ムー帝国の限りない繁栄を約束するかのように、この日も、清らかな白い花卉を咲かせていた。

その日は、前日と少しも変わりなかった。いつもと違うところといえば、日が昇るにつれて聞こえてくるはずのセミの鳴き声が、なぜかとだえがちならいだった。けれども、いつもなら枝から枝へとめまぐるしく飛びかうハチスズメの羽音はなかった。ムー帝国の住民の中には、10日ほど前から、遠雷にも似た異様なとどろきを耳にした者もい

た。しかし、その音は、気のせいかと思えるほど微かな響きで、百年以上も前に大陸の南部で起きた天災のことを改めて思い出させるほどではなかった。

一部の神官や学者は、以前からこの日が来ることを警告し続けてきた。

が、わずかにその徴候を感じとった人々も、これが不吉な予言に結びつくとは思わなかった。

その日の朝、東の海から昇った太陽が、再びムー大陸の上に輝くことはない、と、だれが想像できただろうか。

ムー帝国の皇帝であり最高の神官でもあったラ・ムーは、この日、透明の神殿と呼ばれた首都の宮殿にひ

ざまづいて、いつものように朝の祈りを天帝に捧げた。

「おお、天帝よ、わが帝国と国民の上に、末ながい平安をもたらしたまえ」

首都の神殿には屋根がなく、天帝の象徴たる太陽から放たれた光は、さんさんと神殿にさしこんで、皇帝の純白の法衣に照り輝いていた。ラ・ムーが長い祈りのあと天を仰いで見ると、雲ひとつない青空に、異変を予想させるものは何もなかった。が、そのあまりにも澄みきった空の青さは、かえって皇帝に不吉な予感を覚えさせた。

賢者の誉れ高い皇帝ラ・ムーは、それまで何度かこうした不安に襲われたことがあった。その不安は、彼のように醒めた者が、繁栄の頂点にある国民を見てふと感じる、理由のない不安であるのがこれまでの通例だった。皇帝は、このような時、神の存在を忘れて贅沢に振る舞い、華美に流れがちな国民に向かって、こう警告した。

「神の恵みに慣れ、神の存在をないがしろにすれば、どんな恐ろしいことが起こるか、忘れるでないぞ」おりにふれて、こう警告してきたラ・ムーではあった。が、その彼自身、帝国と国民の上に襲いかか

る異変が、わずか数時間後に迫っているとは夢にも思わなかった。

異変の最初の徴候は、森からやって来た。都市の背後に横たわる原始の面影をとどめた巨大な森のはずれから、マストドンや野ネズミをはじめとする大小の動物が、狂った群れをなして次々に飛び出し、あたりかまわず右往左往しはじめた。

それとともに、予想もしなかった恐ろしい衝撃が走った。大地は突然無気味な地鳴りとともに躍りはね、いたるところで大きな口をあけたかと思うと、そこかしこの裂け目からは、天地をゆるがす大音響を伴って巨大な火柱が噴き出した。

そして、この火柱が噴煙もろとも天高く昇るにつれ、その熱気によって激しい雷鳴がとどろき渡っただけでなく、見る見るうちに大空は暗くなり始め、黒い雨が降り出した。

地の裂け目から噴き出した赤い溶岩は、氾濫する水のように大地を浸し、都市や町々に流れこんだ。逃げまどう住民の頭上には、赤熱の溶岩が闇を照らしながら、大小無数に降り注いだ。その結果、無数の人々が硫黄ガスで窒息し、溶岩に打たれ、熱流にのみこまれて亡くなった。船で海に逃がれた住民たちの運命も同様だった。海は湯気を立てて煮えくりかえり、恐ろしい悪臭を放った。降り注ぐ溶岩に打たれた船は粉々に砕け、熱い海にのみこまれて消え去った。かろうじて難を逃がれた人々は、次々に首都の宮殿へと向かい、口々に叫んでこう言った。

「ラ・ムーよ、どうか私たちを助けてください」

しかし、彼らは相変わらず贅沢な衣裳を身にまとい、きらびやかな宝石と装飾品を捨て切れな

いだった。なかば崩れた神殿の階段の上に立ったラ・ムーは、群衆に向かって言った。

「もはや終わりじゃ、かねてから私が警告したと

おり、最期の時が来たのだ」

赤、白、黒、そしてまだらの色石を組み合わせで造られた美しい宮殿は、いたるところでひび割れ、崩壊寸前だった。その日の朝、のどかな太陽の光を浴びた宮殿の尖塔や門、橋や大理石の壁は、今や暗黒の空に立ち昇る地獄の猛火を反映して、血のように赤々と輝いていた。

そして……この時、さきの地鳴りとも違う異様な音が人々の耳に入った。おびえる群衆がその音の方向に一斉に目を転じて見ると、そこにはとても信じられない恐るべき光景が待ちかまえていたのだ。

はじめのうち、それはまるで轟音とともに接近する黒い山脈のように見えた。が、やがて上空を不気味に染める噴火の余光で、最初に山々と見えたものが、近くにある大石柱や

尖塔よりはるかに高い壁をつくって迫る大きな波頭の連なりであることを知ったとき、人々はハッキリと

自分たちの運命を悟った。ムー帝国の住民をことごとく滅ぼしたのは、想像を絶する巨大な津波だった。

このわずか一日の間に、ムー大陸は消滅した。帝国の大地はこなごなに砕け、太平洋の水面下に没した。異変のあと何日か経つと、恐るべき暗黒のとばりを切り裂くかのように、雲間から太陽の光がうっすらと射しはじめた。

しかし、その光を受けとるべき大地は、もはやそこにはなかった。広範囲にわたって泥の海と化した太平洋は、腐臭を発する生物の無数の死体を浮かべてゆったりとうねるばかりで、死者を弔うものは、風に吹かれて漂う火山灰だけだった。

異変が起こったのは、今から約一万二〇〇〇年前のことである。

さしもの繁栄を謳歌したムー大陸は、こうして六千四百万の住民とともに太平洋の海面下に没し去った。けれども、地上最初の文明を築いたムー帝

国の栄光は、異変によってすべて消え去ったわけではない。というのも、帝国の住民が、この異変に先立って、繁栄の絶頂期にあったムー文明を地球上のすべての土地に伝え、その後の文明再建に役立つ輝かしい足跡を世界各地に残したからである。

今となっては歴史の彼方に忘れ去られた太古の地球は、決して暗黒の原始世界ではなかった。そこには、現代の文明に勝るとも劣らない文明があり、また、ムー帝国を「母なる国」として継承した知られざる国々の興亡の歴史があったのである。

伝説Ⅱ

滅び去ったアトランティス

異変前の太平洋から大西洋に目を向けると、そこにはもう一つの大陸があった。

その大陸は、ムー大陸やアメリカ大陸、アフリカ大陸には及ばなかったが、周囲を海に囲まれた広大な大陸であることに変わりはなかった。

アトランティスの国民は、ムー文明を独自に発展させた高度な文明をもち、特に世界最強の軍隊をもっていることを誇りとした。

その都には、天帝をまつる太陽神殿のほかに、帝国の開祖ポセイドンをまつる神殿と王宮があった。

ポセイドン神殿は、象牙を張りつめた天井の下に金・銀の壁をめぐらしたもので、壁の一部には、オリハルコンという不思議な金属が使われていた。オリハルコンの放つ虹色の光は、遠く離れた海上の船からも見る事ができた。

王宮は首都をとり巻く環状の運河の中心に位置し、王は船を使って運河沿いに海へ出ること

も、海から王

宮へ向かうこともできた。宮殿は、門も塔も壁も、すべて赤と黒、白と斑色の石で美しく飾られ、王宮に通じる運河のそこかしこには跳ね橋がかかっている、いざというときは、王の島全体が強力な城塞になるよう設計されていた。

王宮と神殿の庭は、色とりどりの美しい花とそれらが放つかぐわしい香りによって満たされ、庭を巡回する衛兵たちの黄金の甲冑が、花の間からキラッと光って見えた。

王宮地区を囲む運河の外側には、アトランティスの神官や貴族、将軍たちの家と、修道院、兵舎、図書館や学校などがあつた。そして、この地区をとり巻く別の環状運河の外側には、上下水道の完備した市民の家々が建ち並び、立派な競技場や競馬場があつた。

これらの地区の一番外側にある運河は海に面して口をあけ、その開口部には、次々に往来する船が立ち寄る港があつた。その波止場は商人たちのかけ声や鳴りものなどの音で活気があり、交易市場は、世界の各地からやって来た白人、黒人、褐色の肌の人などでにぎわっていた。

市場をのぞいてみると、そこには鳥や獣、魚の肉から野菜、柑橘類、バナナ、ナツメヤシ、香料のたぐい

まで山と積まれて買手を待ち受け、金、銀、銅、琥珀その他の装飾品や象牙、貝殻、織物、毛皮、香油といった商品が所狭しと並んでいた。これらの商品の中で特に目をひくのは、燃えるような光を放つオリハルコンだつた。その原鉱石はアトランティス大陸の特産で、世界の王侯貴族は、宮殿や邸宅を飾るにあたって、何よりもオリハルコンを珍重した。ともあれ、首都の港には、アトランティスの豊かな産物を求めて、交換物資を山ほど積んだ船が、はるばるムー帝国やマヤ帝国などから続々とつめかけるのだった。

アトランティスの青々とした森や起伏のゆるやかな丘、湖や川のほとり、そしてどこまでも果てしない平原では、放牧された家畜がのんびりと草を食べていた。この地に生息する獣たちはその種類も多く、象の群れがゆっくと平原を横切つて行く姿を見るのもまれではなかつた。

この豊かな土地では、大麦、小麦をはじめ、サトウキビ、綿、トウモロコシなどが、年に二回もとれた。

畑のここかしこには白い湯気がのどかに立ちこめ、農夫たちは、近くの露天風呂に浸つて一日の疲れをいやした。

アトランティスの神官は、夜になると、神殿の柱の上にかがり火をともした。その明りは、オリハルコンの壁に反射して赤々と光り、壁に沿って立ち並ぶ黄金の神像をくつきりと浮かびあがらせた。夜の波止場でも、銅の円柱高くともされた瀝青のかがり火は、港をめざす船の目印となつた。

アトランティスの各地は、こうして夜になると、町や村の中心にある円柱の上にもとされた光で輝いた。

そして人々は、ポセイドンの教えが刻まれた円柱に向かい、アトランティスの神に祈りを捧げたあと、踊りや舞台劇、音楽などを楽しんだ。

当時、アトランティスは、戦車一万台と二頭立て馬車三万台のほかに、何万という騎兵、重装兵、軽装兵、弓兵、槍兵などからなる軍団をいくつも擁した世界に冠たる軍事大国だつた。その軍隊は、この国の開祖が海神ポセイドンだといわれるだけあつて特に海軍力に秀いで、非常に強力な千二百隻の軍艦をもっていた。

しかもこの国は、帝国の繁栄のさなかに、その強大な軍事力をもって周囲の国々を圧迫し、やがて「ヘラクレスの柱」と呼ばれたジブラルタル海峡を越えて地中海に侵入した。

アトランティスの巨大な軍団は無敵だつた。彼ら

は誰にも行方を阻まれることなく、遂に内海の奥地へとなだれこんだ。が、その時である。

ここで彼らは意外な敵に遭遇した。

突如として現れた敵の数はそれほど多くなかったが、一人一人が驚くほど勇敢で、一致団結して戦いを挑んできた。その戦いぶりは実に見事で、侵入者の船団は内海に出没する軽快な船のため大いに悩まされた。

この戦いは、アトランティス人にとって不利だった。大海に囲まれて育った彼らの大船隊は、狭く入り組んだ内海の戦いに向かなかつた。彼らの無敵艦隊は敵の奇襲を受け、初めて無惨な敗北を喫した。

この戦いの結果、アトランティスの支配下にあった他の国々でも、次々に反撃の火の手があがった。敗れた船団は「ヘラクレスの柱」から外へ脱出しようともがいたが、敵の追撃を受けてあえない最期を遂げた。

アトランティスの国運はこうして傾き始めた。かつてあれほど栄えた国の首都には、他国の軍隊が駐留するようになった。そして、この国の滅亡をうながすかのように、最後の恐るべき異変が起こったのである。

第1章 キーワード

[アトランティス大陸]

古代ギリシアの哲学者プラトンが『ティマイオス』と『クリティアス』の中で1日と1夜のうちに海底に沈んだ」と記している伝説的な大陸。

近いうち再び大西洋の海底から姿を現すと予想されている。

アメリカの予言者エドガー・ケイシーは、輝かしい文明を誇ったアトランティスが、5万年前、3万年前、そして1万2000年前の3次にわたる地殻変動により滅び去ったと語っている。



大陸の各地、アマキ、アツケイ、ポセイディアなどにつくられた美しい巨石神殿都市は、太陽宮に置かれた

クリスタルの放つ宇宙エネルギーで輝き、そこに住む人々はかつてない高度の霊的生活を営んでいた。アメリカの東海岸沖に位置するポセイディアは、それらのうちでも最も栄え、また最後までアトランティスの輝きをとどめた島であったという。ケイシーは予言する。ポセイディアが、かつて沈んだアトランティス大陸の最初に隆起する地域となろう。1968年から1969年にかけて注目されよ。それは遠い将来のことではない。

(1940年6月28日)

そして1968年、フロリダ東部のビミニ島やアンドロス島の沖から、従来知られていなかった海底遺跡が続々と見つかりはじめた。

これらの遺跡は、はたしてポセイディアのものか。アトランティスの一部はすでに隆起しはじめたのだろうか。

地球上にはこれまで、われわれ人類より前に何回かの高度な文明をもった人々の時代があったが、地球の大異変によってそれらはことごとく滅んでしまったという説がある。もし、アトランティスが現れるならば、この説を裏づけることになり、われわれの文明も滅んでしまう可能性がある。しかし、一方ではアトランティスの浮上によって明らかになる高度な文明が、精神的な、あるいは科学的な恩恵をもたらし、人類は飛躍的な発展をとげるだろう、という説もあり、アトランティスについての秘密の解明が待たれている。

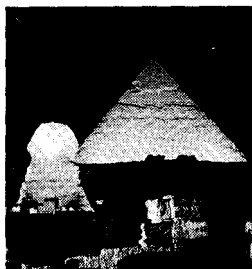
エドガー・ケイシーは、この秘密についてのリーディングも行っており、それはエジプトのスフィンクスがカギを握っている、と次のように予言している。

太陽がナイル河の水面から昇る時、ひとつの光(影)がスフィンクスの前足の間に投げかけら

れるだろう …時至れば、汝らはスフィンクスの右足につらなる部屋を通じて、記録の間に達することができよう…

アメリカの予言者アン・フィッシャーは、アトランティスの歴史や滅亡の記録が発見される場所を大ピラミッドとスフィンクスの間とし、その時期を2000年ごろと予言している。そして同じ時期に大ピラミッド建設の目的と理由もわかり、大ピラミッドの冠石(クフ王のピラミッドの頂上部分。現在失われている)が発見されるだろうと言っている。

いずれにしても、ケイシーの“アトランティス浮上”の予言は、単に物理的なものではなく、霊的にもアトランティス時代がよみがえる、という暗示を含んでいると考えられる。



スフィンクスの足元にはアトランティスの記録が眠っている

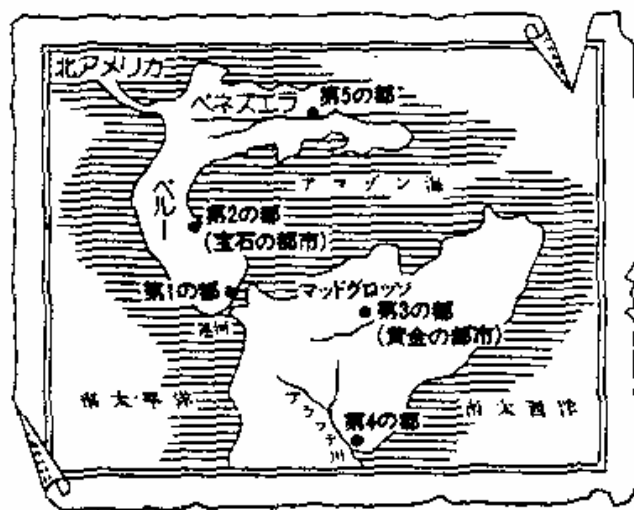
[アマゾン海の 黄金都市]

アマゾン海は美しい海だった。太平洋の荒波を乗り越えてやってきた船乗りたちにとって、波静かなこの内海はまるで楽園のようだった ……緑の熱帯樹にふちどられた岸边には、壮麗な石造りの都市が色さまざまな石で築かれた神殿や宮殿の影を水に映し、それは旅人たちに遠く離れた母なる国ムーを懐しく思い起こさせた。 ……太平洋を越えてきた船が、広々とした幅のある水路に入ると、やがて右手、つまり北の方に立派な都市が見えてくる。それが何と呼ばれたか、今では知るすべもないが、チベットの古地図によれば、その位置は現在のティアワナコの遺跡の位置とぴったり符合する。チャーチワード『ムー大陸の子孫たち』チャーチワードがチベットの奥地で手に入れ

た古地図には、そのほかにも四つの都市が記されていた。そのひとつは、アマゾン海の南西岸にあって、“宝石の都市”の名がつけられている。

南岸のちょうど半ばあたりからちょっと内陸に入ったところ、アマゾン海に注ぐ川に沿って、もうひとつの都市があり、“黄金の都市”と名づけられている。疑いもなく、伝説に伝わる黄金都市マノアである。さらにこの南岸からずっと南へ下って、大西洋岸に出ようとするあたり、大西洋に注ぐ河に沿って一つの都市がある。現在のアルゼンチン、ラプラタ河のあたりである。

もうひとつはずっと北にあって、カリブ海の東端、現在のベネズエラ、オリノコ河の河口から少し入ったあたりである。これらの五つの都市が、アマゾン海周辺に栄えたカラ族によって建設されたことは明らかである。



アマゾン海を示す古地図

[イースター島]

南太平洋の東の果てに横たわる神秘の島。パスクワ島の別名。1722年のイースターの日(復活祭の日)に発見され、現在の名称で知られるようになった。パスクワの島民がテピトオテヘヌア「世界のヘソ」と呼ぶ二つの火山島には約

1000 体の巨人石像モアイが立ち並び、鳥人の絵が岩壁のいたるところに描かれている。また、イースター島の祭壇アフソックリの石組みはアンデスや太平洋の各地で発見されており、古代エジプトと同じ太陽神ラーを祭るこの島の住民が至高者チチカカの子孫ウルを自称していることなど、謎が多い。一説によれば、われわれの祖先である倭人がはるか昔、空飛ぶ人々を目撃したのはこの島だったともいわれる。

島民がラパ・ヌイ(大きな島)と称するこの島は、チャーチワードによれば、ムー大陸の名残りだという。



[インダス文字]

シュメール、エジプト、殷・周の文明とともに世界四大文明のひとつといわれているインダス文明の文字。

これまで多くの学者が解読を試みたが成功していない。その理由は、インダス文字の刻まれた印章がモヘンジョ・ダロやハラッパーなどから数多く出土しているにもかかわらず、すでにわかっている他の文字と並んで記された例がひとつもないこと、エジプトやシュメール、ヒッタイトの文字を解読したときのように、比較する手がかりがないことなどによる。



[巨石文化]

巨石造りの神殿やピラミッド、道路、巨石都市などを生みだした先史時代の未知の文化。

代表的な遺跡としては、エジプトの大ピラミッド、レバノンのバールベック、マルタの巨石神殿、フランスのカルナック、イギリスのストーンヘンジ、アメリカのミステリー・ヒル、ピミニ・ロード、メキシコのラ・ヴェンタ、ペルーのサ

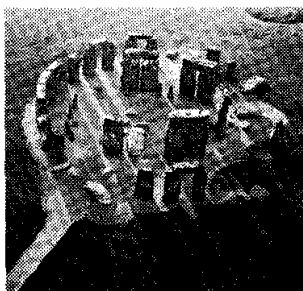
クサワマン、オヤンタイタンボ、マチュピチュ、ボリビアのティアワナコ、イースター島のモアイなどがあり、日本にも沖縄や長崎、佐賀、鹿児島、高知、広島、兵庫、滋賀、岐阜、三重、山梨、茨城、福島、秋田、岩手などに巨石遺構がある。

これらの巨石建造物は天文学上の方位や他の遺跡、周囲の山々との位置関係、地磁気や地下水の流れなどをよく考えて、自然と人間の調和がもたらされるように設計された形跡があり、巨石加工と運搬の高度な技術ばかりでなく、都市設計の原理そのものが大きな謎とされている。

[ストーンヘンジ]

イギリスのソールズベリー郊外にある巨石遺跡。直径約 20 メートル。中央に祭壇石があり、トリトンとよばれる高さ 6~7 メートルの鳥居形の石組を配し、30 個の珪質砂岩の環状列石がぐるりと一周している。一番外側には、オーブリー・ホールといわれる五六個の穴と標石のような立石がいくつか見られる。

1961年6月、ボストン大学の天文学教授ジェラルド・ホーキンスは、コンピュータを使って石の配列のしくみを分析した結果、驚くべきことに、多くの石が太陽と月の重要な出没方向をさし示していたことから、日食を予報する天文時計であるとの説を発表した。

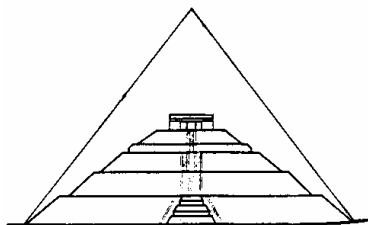


[大ピラミッド]

エジプトのケオプス(クフ)のピラミッド。他の円錐ピラミッドと違って四角錐。

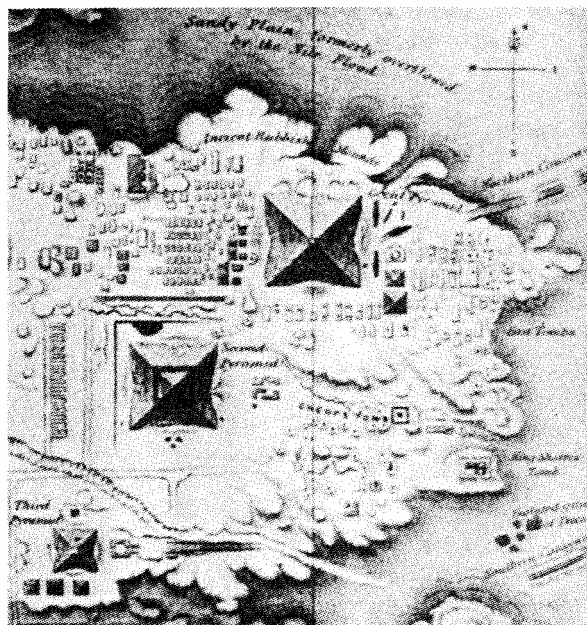
この形がケオプス効果とよばれる謎のパワーを発生することから、近年、その秘密が本格的に解明され始め

たところである。このピラミッドの各辺は、正確に東西南北をさし、一辺約 220 メートル、高さ約 140 メートル、4 辺の和を高さの 2 倍で割ると π パイの近似値が得られるほか、黄金分割やピタゴラスの定理、円の 7 分割法など、ストーンヘンジその他の巨石遺跡でも確認された高等幾何学や天文学の知識を応用した可能性がある。地下回廊の存在も数多い謎のひとつである。



ギザのピラミッドとテオティワカンの太陽のピラミッドの規模比較図

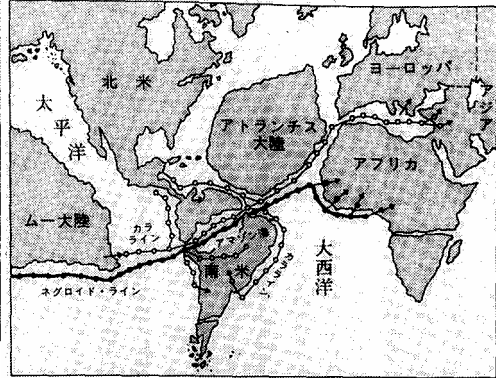
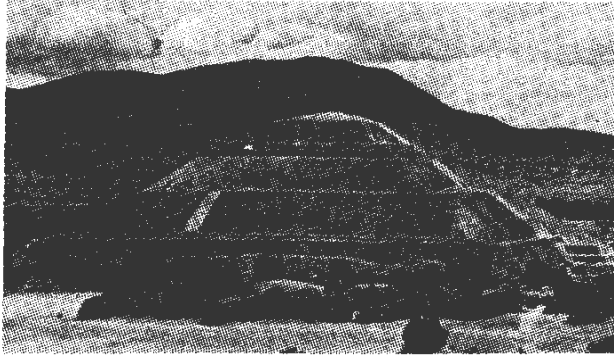
(絶対零度の発見者 K・メンデルスゾーン博士作図)



エジプトの 3 大ピラミッドは紀元前 7 世紀に日本の初代天皇カムヤマトイハレヒコの 3 兄弟がつくったといわれている

[太陽のピラミッド]

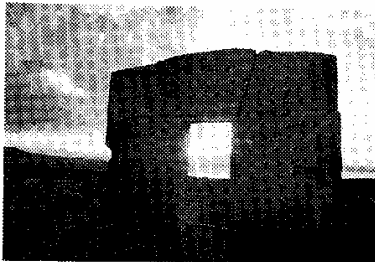
メキシコの古代遺跡テオティワカンの中心にある階段状ピラミッド。月の神殿と並んで、太陽の神殿と呼ばれる。底辺約 220 メートル、高さ約 70 メートル(異説あり)のこのピラミッドは、奇妙なことにエジプトの大ピラミッドの半分の高さで同じ底面積をもつことから、大ピラミッド以前のモデル、ピラミッド・パワー効果との関連で注目を集めている。



[ティアワナコ]

ペルー国境近く、ボリビアのチチカカ湖に面した海拔 4000 メートルの高地に眠る前インカ時代の謎の巨石都市。

ドイツの考古学者 A・ポズナンスキーの発掘以来、現在までに 1000×450 メートルの遺跡群が調査され、太陽の門で有名なカラササーヤ神殿やアカパナ砦がよく知られているが、いつ、何者によって造られたか不明。世界最古の地理書『山海経』に“天帝の秘密の都”と記されたティアワナコ。その太陽の門に刻まれた鳥人や四本指の神、イースター島の石像とよく似た人物などの由来は謎にまつまれている。



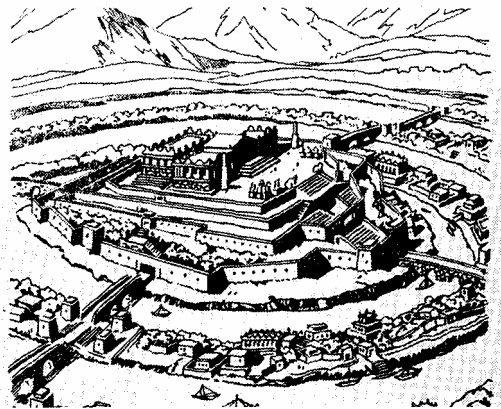
カラ族の植民線

[テーベ]

ナイル河を 600 キロ余り遡ったところにある古代エジプト第 18 王朝の都。黄金のマスクを残したツタンカーメンやアマルナ芸術の創始者アクナトン(アメンホテプ 4 世)、絶世の美女ネフェルティティ王妃などが生きたこのテーベは、今から 3000 年ほど前、すでに“百の門をもつ都”として知られ、世界最大級の国際都市だった。市内カルナックのアトン太陽神殿は、R・W・スミス の復元調査によれば、25 万個の巨石を組み合わせた長さ 1600 メートルの規模をもつ巨大な神殿で、かの大ピラミッドをも圧倒するほどであったという。この壮麗な都テーベを舞台とする戦争と陰謀の歴史はのちに数々の伝説を生み、ヴェリコフスキーによれば、ギリシア悲劇のオイディプス伝説はテーベを舞台とするアクナトンの歴史を反映したものといわれる。テーベにはこの他ルクソールのアモン神殿や王家の谷、ハトシェプスト女王の神殿などがあり、学者も驚く本格的なミステリーが数多くある。



テーベのカルナック神殿



アトランティスの都

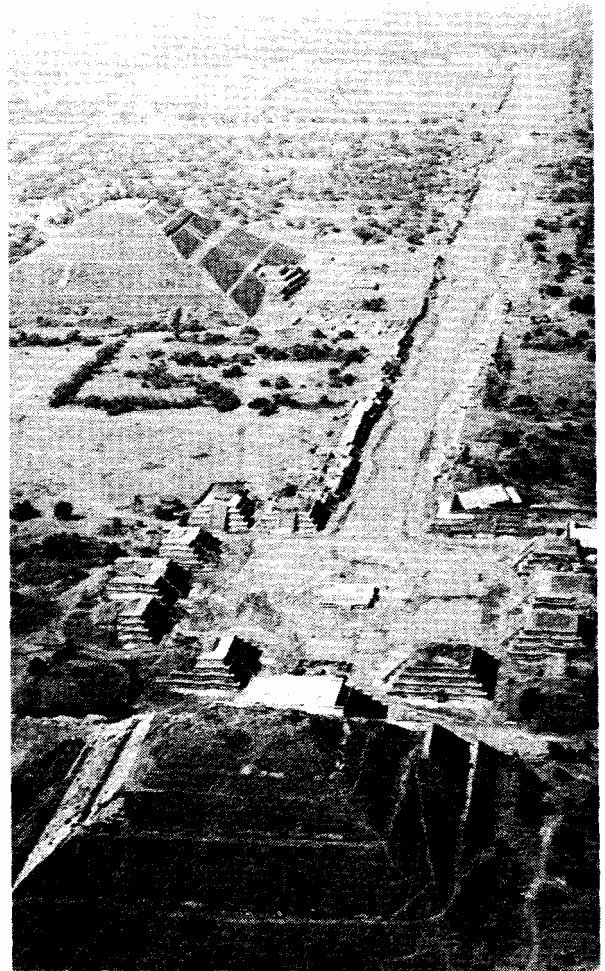
[テオティワカン]

メキシコ・シティの北東約 45 キロ、今は荒涼たる盆地にある“神々の都”テオティワカン。二千数百年前に栄えた都市で、全地区完全舗装。しかも上下水道を完備した碁盤目状の整然たる街路に 2600 以上の建物と住宅を配した今日でもまれにみる美しい神殿都市だった。

市内でひととき高くそびえる太陽と月の二つのピラミッドの地下には半径 5km 四方に道路が延び、ところどころホールも設けられている。

地上と地下をひとつに結んだこの立体都市にかつ

て住んだ 20 万余りの人々は何者だったのか。彼らの突然の出現と消滅は、考古学上の謎とされている。

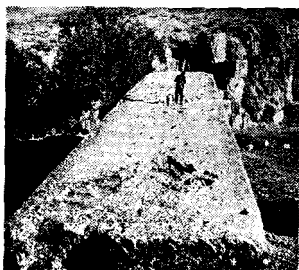


テオティワカンの太陽の都

[パールベック]

レバノンの首都バイルートの東 70km の地にある古代世界有数の神殿都市。太陽神パールと月の女神アシュタルテを祭った巨石神殿がある。近くの石切り場にある縦横 4m、長さ 20m の巨

石は推定重量 2000 トンという途方もないもので、現代の技術でも運搬不可能という。また、トリトンと呼ばれる鳥居型の遺構には、1 個の重さ 750 トンの巨石が用いられており、古代人の高度な技術は驚異である。伝説によれば、パールベックを最初に建てたのは聖書に登場するニムロデ王に仕えた巨人族だったという。



[ベルリッツ(チャールズ)]

世界的ベストセラー『謎のパミュダ海域』の著者。

1914 年、ニューヨーク生まれ。

ベルリッツ言語学院の創設者の孫に当たる彼は、31 か国語をこなす博物学者であると同時に、スキューバ・ダイバーとして海底遺跡の探検・調査に従事。UFO 問題の世界的権威であり、アトランティス学の第 1 人者でもある。

『謎の古代文明』(紀伊国屋書店刊)で紹介された数多くの事実は、古代世界の水準に関する再評価の動きを着実に作りだし、先史アトランティス文明が、大異変によって滅びたことを強く印象づけるものとなった。



[マウンド・ビルダー]

アメリカの中部平原に土のピラミッドや動物の形をした高塚を造った謎の人々。

ミシシッピー川やオハイオ川の流域には、上空から見ると蛇の形をした塚やトカゲの形をした塚などが無数にあり、イリノイ州セントルイスの東にある“僧侶の塚”はエジプトの大ピラミッドをはるかにしのぐ 6.5 ヘクタールの面積をもっている。

このマウンド・ビルダーとナスカに大地上絵を描いた人たちとの関係も謎である。

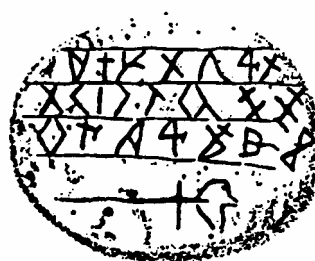


ウエスト・バージニア州グレイブ・クリークのマウンド



ウエスト・クリークのマウンド

マウンドで見つかった石板の碑文



バージニア州グレイブ・クリーク・マウンドで見つかった石板の碑文

[マヤ文字]

中米ユカタン半島に伝わる未解読文字。

マヤ文字の研究はフランスの神父ブラッスール・ド・ブールブールに始まる。

彼は 1848 年から 1868 年まで新大陸に滞在したが、マヤ人が残した「アルファベット」や「二十の日」(マヤ文明が二十進法だったことはのちにわかる)を表す象形文字を図示した資料や、マヤ語の方言の覚書を手

し、マヤ文明研究に大きな貢献をした。これによって、「太古時代歴」と「太古代歴」がわかるようになり、刻文に見られる「〇年〇月〇日」という年代表記が解読できるようになった。

その後、S・G・モーレイの『マヤ象形文字研究序説』(1915 年)や言語学者 B・L・ウォーフ、クノロゾフに代表されるロシアの言語学者らによるマヤ語写本解読の試みなどがみられるが、現在にいたってもその全体像は依然として大きな謎に包まれている。



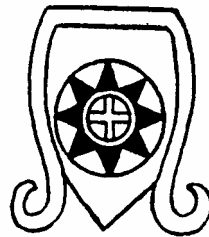
パレンケのマヤ文字碑文

[ムー王国]

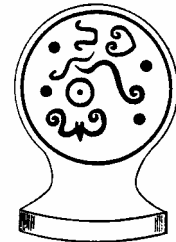
紀元前 1 万年ころ太平洋上に存在したとされるムー大陸に栄えた謎の王国。人口約 6400 万。東はハワイ諸島、西はマリアナ諸島、そして南はフィジーからトンガ、イースター島に至る、東西 8000 キロ、南北 5000 キロにおよぶ広大な面積を有し、海峡によって3つの陸部に分かれていた。

南国の太陽がふりそそぐ常夏の緑豊かな大地には、帝王ラ・ムーの支配のもとに、7つの都市が栄えていたという。ムー王国の繁栄ぶりは、首都ヒラニプラに代表される都市文化もさることながら、その抜群の航海術によって海への旅に乗り出し、巨大な植民団を組織して、当時大西洋にあったアトランティス大陸をも手中におさめたといわれる。だが今から1万2000年前、突如襲った大異変は、わずか一夜のうちにこの大陸を海底に沈めてしまったとい

う。古代史研究家チャーチワードが、インド・中南米の伝説と遺跡をもとに唱えた夢幻の王国である。



ムー王国の紋章



ムー王国の紋章

[モアイ]

イースター島にある謎の巨人石像。現在まで確認されている約 1000 体の石像のうち最大のもは、高さ 20m 以上、重さは最高 90 トン。このモアイを、島の中央にある唯一の石切り場ラノ・ララク火口から海岸までどのように運んだかは今もって謎とされる。

長い鼻とくぼんだ眼、角ばったあごとひきつった口元、そして長い耳をもつこの石像は、伝説によれば高度の

石造技術をもった長耳族ハナウ・イエペによって造られたが、のちに短耳族ハナウ・モモコの反乱によって破壊された。超能力を放つと恐れられたモアイの赤い眼がくりぬかれたのもこの時代だったといわれる。その時期がいつであったか定説はない。



イカの石に描かれたムー大陸地図

おお、ラーマ、神の武器を受け取られよ
ここにあるは大なる宇宙の円盤ダндаの
兵器、ダルマ・カーラの武器なり
英雄よ、ヴィシュヌの円盤とインドラの兵
器を受け取られよ…:
あまたの民の中にありて最良の者よ
わしはそなたにガンダルヴァお気に入りの
催眠兵器モハナを授ける
さらにブルシャパナの兵器、ブルシャパナ、
サムナの兵器の数々をも…
『ラーマヤナ』

第2章 失われた神々の遺 産を求めて

地下都市探検の物語



メキシコのモンテ・アルバン遺跡

から出土した地下都市の王ミクトランテクトリ

二〇世紀の世界史に巨大な足跡を残したドイツの総統ヒトラー。彼は失われたアトランティス・ムー文明の遺産が今も地球のどこかにあると考え、秘密のうちに世界各地の洞窟を調査した。『九二〇年代にアメリカやイギリス、ロシア、ドイツが先を争って捜し求めた太古の遺産とは何か。それはイギリスの探検家フォーセットがめざした黄金都市エルドラードに眠るアトランティスの秘宝か。それともムー王国の地下都市に隠された古代カラ族の空艇ヴィマナか。伝説のクルの宝をめぐる水面下の戦いは今なお続いている。

エピソード1 第2章失われた神々の遺産を求めて/地下都市探検の物語

二〇世紀最後の秘密

「ジー、いま聞いた話を他の人にしゃべっちゃだめだよ。私たち以外の世界があるということだね。」ジーは立ち上がると父親の額に口づけし、笑いながら答えた。「舌は気まぐれだけど、お父様がそうおっしゃるなら、絶対誰にも言わないわ。私の口から何か洩れて、私たちの社会が危険にさらされると心配しておられるなら、いま聞いた話の記憶をブリルの力で頭の中から消してしまったら?」（『来るべき民族』）神秘主義に関する本の中で、一番捜し出すのが難しいものの一つに、『来るべき民族』という奇妙な本がある。イギリスの作家ブルワー・リットンが一八七一年に出版したこの本の内容は、ひとことでいえば、地下の別世界に住む高度な民族の物語だ。そこに描かれた地底人ブリルヤたちはすべて超能力をもち、地上の人類よりはるかに進んだ超科学を駆使するだけでなく、やがて地下から現れて地上全体を支配するよう運命づけられている。今から百二十年ほど前に、すでにレーザー光線やロボット、飛行機械の登場を予知し、現在のわれわれが直面している文明の危機をいち早く見通していたリットンの書は、二十世紀に入ってまもなく、ヒトラーの世界観に大きな影響を与え、ナチの超人思想と超科学、そして第三帝国の誕生をもたらすきっかけとなった。若きヒトラーに多大の感化を及ぼしたドイツの将軍カール・ハウスホッフアーの考えによれば、この本にブリルヤとして描かれたユダヤ人はアトランティスの異変とともに地下に隠さ

れた太古の遺産を世界支配のために用いているが、この遺産こそはアトランティス直系の子孫であるアーリヤ人、すなわちゲルマン民族のものである。ドイツ人は今こそこの遺産をすみやかに手に入れてユダヤ人の世界支配をくつがえし、アーリヤの栄光ある千年王国を実現しなければならない、というのが彼の持論だった。リットンの死後およそ四十年を経て勃発した第一次大戦はロシア革命とドイツ革命を生み出し、敗戦後のワイマール体制のもとでかつてない敗北感と経済的な苦しみを味わったドイツ人は、ワイマール共和国を指導する少数のユダヤ人に対して不満を抱き始めていた。当時ドイツ共和国の間に根強く広まっていた噂によれば、相次ぐ革命と社会不安の元凶はユダヤ人にほかならず、彼らがフリーメイソン結社員と共産主義者の両方を背後から操って世界支配をもくろんでいるという流言は、またたくまにナチの台頭をうながした。この時代に反共・反ユダヤのスローガンを掲げて慧星のごとく現れたヒトラーは、ドイツの大衆から国民をどん底の苦しみより救い出す英雄として迎えられた。そのヒトラーが、一九二三年のミュンヘン一揆に失敗してランズベルクの獄中にいる時、失意の彼にリットンの書を読むことを勧めたのは、ほかならぬカール・ハウスホッフアーだった。

アーネンエルベ

ヒトラーは、一九二五年に自由の身になると、さっそく『我が闘争』を出版し、ドイツ革命によって倒された第二帝国にかわる不滅の第三帝国の実現に向かって、

ナチの活動を本格的に開始した。この時期に彼がつくったブリル結社啓明支部(バラ十字会ドイツ支部)は、のちにアーネンエルベとして知られるようになったナチのオカルト局、すなわち SS の秘密部隊の前身となった。彼が最初に手がけたことは、ナチの内部に確固たるゲルマン精神を身につけた親衛隊を組織し、極秘のうちにユダヤ人とブリルヤの秘密をつかむことだった。ユダヤ人の恐るべき才能は、思想、芸術、科学、経済、政治のいたるところで明白に認められた。共産主義の創始者マルクス、精神分析学の開祖フロイト、相対性理論の提唱者アインシュタインはユダヤ人だった。ロシア革命の指導者レーン【ンやトロツキー、ワイマール共和国のエーベルト大統領、アメリカ合衆国のルーズベルト大統領もユダヤ人だった。ピカソやシャガール、チャップリンなどの天才、名優を生み出したユダヤ人は、一方でロスチャイルドやロックフェラー、モルガン、ワールブルクといった世界的な財閥をも輩出している。近代科学の主な発明と発見の歴史に登場するのは、ほとんどユダヤ人だ。ユダヤ人がこのように優秀で、かつてなく豊かになったのはなぜだろうか。彼らは、何かわれわれの知らない秘密をつかんでいるのではなかろうかーヒトラーとナチの幹部たちがそう考えたのも当然だった。アメリカは一九二四年にレーリッヒ探検隊を出し、イギリスは一九二五年にフォーセット探検隊を出しているが、それらのスポンサーとなったユダヤ人があれほどまで熱心にヒマラヤとアマゾンの奥地に興味を示したのはなぜか。それはこの地域に未発見の地下都市があり、そこにアトランティスの太古の遺産が隠されて

いるからではないか。そもそも地下都市がこの地球上にあることはほとんど知られていないが、それはユダヤ人がブリルヤの秘密を独占しようとしてきたからではないのか。ヒトラーとナチの幹部は、ユダヤ人が他の民族よりも優秀なのは地底世界の秘密を知っているからだと考えた。もしかしたら彼らは、地下に眠るゲルマンの太古の遺産をいち早く手に入れたかもしれない。

地下都市を発見せよ

ハウスホフナーとヒトラーはただちに地下都市探検隊を組織し、各地に伝わる地底伝説を集めた。ナチの地理学者や考古学者、地質学者たちはブリルヤへ到る地下道の入口をすみやかに発見せよと命じられた。ドイツとオーストリア、チェコ、イタリアなどの各地にある洞窟と鉱山はひとつ残らず地図上にマークされ、地下都市へとつながる可能性をチェックされた。一二世紀のドイツの騎士タンホイザーが住みついたヴィーナス山中の洞窟はどこか?一二世紀にアルプス山中をくぐりぬけ、六回もイタリアに遠征したドイツ国王バルバロッサの利用したトンネルはどこにあるのか?トイトブルクの森にあるエクステルンシュタインの巨岩の下に秘密の通路はないか?デンマークのクローネンブルタの洞窟はどこまで続いているのか?彼らがボヘミアやズデーテン、トランシルバニア、カルパチアの山中にある巨大な洞窟群に注目していたことはもちろんである。さらに、ギリシ

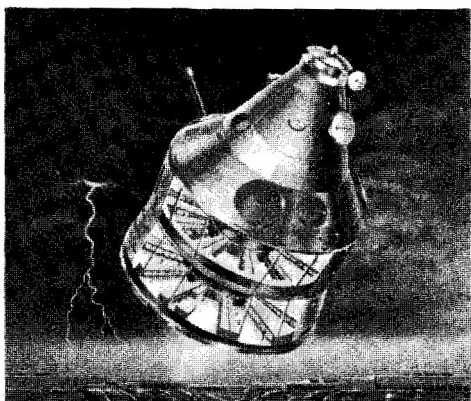
アやトルコ、ウクライナ方面の洞窟情報についても、重大な関心を払っていたことはまちがいない。また彼らは、イギリスのフォーセット探検隊やアメリカのレーリッヒ探検隊に関する情報を注意深く分析し、アメリカや中央アジア、アフリカ、インドの洞窟について書かれた報告書を次々と検討していった。一九二六年に始まるナチのブリルヤ探検隊は、一九三六年になると、毎年のように定期的に世界の各地に派遣された。ヒトラーの指導のもと、親衛隊長ヒムラーの責任において派遣されたアーネンエルの科学者たちは、イタリアやスペイン、トルコばかりでなく、チベットやブラジルの彼方まで調査に出かけた。それらの探検隊のうち、ブラジルに派遣されたグループは、北東マツグロソのロンカドル山地で無数の地下道からなる迷宮を調査した。また、この地からパラグアイ、ボリビア、アルゼンチンへと向かった分遣隊は、チリで別のトンネル網を発見した。このときの調査に加わった V・M という隊員は、ペルーからエクアドルへ向かい、クエンカの近くでインディオが入口を守る巨大な地下都市を発見している。こうして世界の各地から続々ともたらされ始めた情報と資料は、ナチの記録保管所に集められ、別の科学者たちによって分析されていった。その結果、ヒトラーとナチの幹部が手にしたものは、まさにアトランティスの驚異としか言いようのないものだった!

円盤の謎を解明せよ

「ビシュバカルマとチャーヤーパルシャ、マヌとマヤ、ならびにその他の建造者を見習うこと。これは各種の航空機の製造を可

能にするであろう。」・「バーヤバーパラカラナに示したごとく、ヤーサー、ビヤサー、プラヤーサの力を大気圏の第八層で用いよ。これは太陽光線の闇の部分で機体にひきよせ、敵の視界からヴィマナを隠すために使うことができる。」・「シャクティータントラに従えば、ロイネー光線を投射することにより、ヴィマナの前方にある物体を目に見えるものとすることができる。」・「ダンダバクトラをはじめとする大気の他の七つの力をひきつけ、太陽光を照射した上でヴィマナの中心に送り、断続器を作動させよ。これによりヴィマナは蛇のごとくジグザグ飛行するであろう。」・「ソーダミネーカーラの章もしくは電磁学の説明どおり、ヴィマナの集音装置を用いよ。これによれば飛行中の敵機内の会話と音を聞くことができる。」・「ヴィマナの撮影装置は、敵機の内部を画面に映し出すことができる。」・「ヴィマナの前部にあるつまみを回せば、ディシャーンプティ装置が敵機の接近方向と位置を示してくれる。」・「有毒のアプスマーラをヴィマナ上部の管内に注入し、スタンバナ装置で放出すれば、敵機の搭乗員は意識を失うであろう。」はたしてこれらの記述は何を意味しているのだろうか?ヴィマナとは何なのか?もともとこの資料はどこにあったのか?ここに記されたものは、明らかにこれまでのナチの科学者が全く知らない新型の航空機だった。この文書は、ヴィマナと呼ばれる未知の航空機の性能と操作法を記したものらしかった。チベットのラマ教寺院から発見されたこの文書は、古いサンスクリット文字で書かれていた。ヒトラーは、この

報告を受けるとただちにナチの科学者を招集し、全力をあげてヴィマナの秘密を解明するよう指示した。この文書の不明な語句を解読できそうなラマ教の高僧が、次々と首都ベルリンに招かれた。そして、博学なラマ僧とドイツ最高の言語学者、物理学者、航空技術者が何度も極秘のうちに会合を重ね、不明な語句の意味をひとつずつ明らかにしていく過程ではっきりしてきたことは一このヴィマナが未知のエネルギーを用いて大気圏の内外を自由に飛行できる超高速の航空機であるということだった。それはまるでリットンの書に登場するブリルヤの乗り物——ブリルの力によって地底空間を高速で移動する乗り物を思わせた。ナチの科学者が手にしたものは、チベットの僧院に古くから伝わるアーリヤ民族の古い写本で、インドの叙事詩『マハーバーラタ』にも記された大異変によって滅び去った、紀元前の高度な文明の遺産だった。が、この秘密資料に記されているアストラ(ミサイル)やアラタシャ(ロケット)、ククラ(核兵器)、モハナ(催眠兵器)の数々は、何と恐るべき兵器だろうか。一九三九年までに多くの秘密資料を手に入れたナチのアーネン



ヴィマナの復元図(ダヴェンポート作成)

が、その後ヒトラーの作戦計画に合わせてヴィマナの建造に取り組んだことはいうまでもない。彼らの得たサンスタリット文献には、ヴィマナの建造法が具体的に記されていた。その基本構造は、車輪(回転ギヤ)のついた床の中心に空洞軸(磁極)と機械室をすえ、上部を丸天井で覆った円盤であった。ナチの科学者たちは、新兵器を造るに先立って、ロケットやミサイルの実験をしなければならなかった。また、ユダヤ人が極秘に進めているマンハッタン計画に対抗して、原水爆の開発を急ぐ必要があった。しかし、これらすべての開発計画の中でも、新型航空機ヴィマナの建造は、極秘中の極秘計画だった。

エピソードⅡ

古代カラ族の地下都市文明

「もし、われわれのために捜索隊を出すつもりなら、後生だ、やめてくれ!われわれは最初からそのつもりだったのだ。」一九二五年、イギリスの探検家フォーセット大佐と長男のジャック、そして友人のラレー・リンメルの三人は、ブラジルのマットグロッソ州こつぜん地域のジャングルで忽然と姿を消した。そして、不思議なことに彼らが失踪したあとには、冒頭のような走り書きのメモが残されていた。彼らはロンカドルの山中でアトランティスの大いなる遺産と失われた部族、滅亡した都市を探し求めている、といわれる。大佐の妻ニナ・フォーセットは、時がたつにつれ、夫はジャングルで野蛮

な裸族に殺されたのではなく、重要な秘密を発見したために現地にとどまっているのだ、と確信するようになった。また世間ではこんな奇妙な噂も広がっていた。「彼らは失われた古代都市の跡を発見し、太古に超文明をつくった人々の子孫とともに、地下都市の中で生き続けているのだ」と。フォーセットとほぼ同時代、古代カラ族の遺跡を世界各地に求めていた探検家のチャーチワードが、チベットの奥地で謎に包まれた古地図を発見した。その地図には、南米のアマゾン河がかつてアマゾン海と呼ばれる美しい内海を形づくっていた頃、この巨大なアマゾン海の周囲に、インドのデカン高原でも活躍していた日本人の祖先カラ族(すなわちインドの『マハーバーラタ』で有名なクル族)が「七つの都市」を築いていたことが記されていた(エクアドルやペルーでは、その昔、カラ族の王ステルニが大船団を率いて西の海を越えてやって来たという伝説が今も信じられている)。ただし、「七つの都市」の中で、チャーチワードの地図に場所が明確に載っている都は五つしかない。そのため、「七」という数字は象徴的な意味合いしかもたず、実際には五つの都をさしたものとみなされてきた。しかし、ヨーロッパの秘密結社に伝わっていたもう一つの古地図には、何と、アマゾン海のほとりにある「宝石の都」が第二の都として記されているのだ。これで六つ。さらに、いずれの古地図にも記載されていなかったが、ちょうどアマゾン海の東北海岸にあたるブラジル東部ピアウイ州のセテ・シダデス遺跡を第七の都市として加えれば、古代南アメリカには七つの都市が実在したことになる。しかも、南米には、これらの都がはず

れも巨大な地下トンネルで結ばれていた、という伝説もあるのだ。われわれは、これまで報告された事実や資料をもとに、南米の失われた七つの都と古代カラ族の地下都市の位置を割り出すことに成功した。つまりわれわれ日本人の祖先がかつて南アメリカに築いたとみられるカラ帝国の七つの都は、次のような地域にまちがいなく存在する、と言えるようになった。・第一の都……ボリビアのティアワナコ遺跡・第二の都……ペルーとエクアドルの国境にあるアカヒム遺跡(宝石の都)・第三の都……ブラジル・マットグロッソ州南部にある未確認遺跡(黄金の都)・第四の都……ブラジルのサンタカタリーナ州とパラナ州の境界にある未確認遺跡・第五の都……ブラジルとベネズエラの国境地帯にある未確認遺跡・第六の都……ボリビアのラパス東方、第一の都と第三の都のほぼ中間にある未確認遺跡・第七の都……ブラジルのピアウイ州にあるセテ・シダデス遺跡。このうち、第二の都市アカヒムはエクアドルのコトパタシ山南方にあり、われわれはすでにこの地下都市の入口を発見している。また、南米にはこれら七つの都以外にも十八の地下都市遺跡があるが、そのうちの一つはエクアドル第二の都市グアヤキルの近くにある。そしてこの地下都市から出土したといわれる黄金板には、伊勢神宮の奉納文に使われた日本の古代文字で、「ここに我がタルの宝集めしめ、のちの世に伝へて、いしすえたらしめむ」(地球文化研究所・高橋解読)と読める銘文が確かに刻まれているのである。中国に伝わる『山海経せんがいきょう』には、われわれ

の祖先が世界各地に残した地下都市が「神々の地下の館」として正確に記されている。



UFO は地底王国から飛来する?

われわれがこれらの地下都市を発見し、失われた日本の太古の歴史を回復する日はいよいよ間近に迫っている。

【アーネンエルベ】

【九三三年、正式にはドイチェス・アーネン・エルベ「ドイツの古代遺産」と呼ばれるドイツに創立された民間の文化団体で、二年後には SS(ナチ親衛隊)長官ハインリッヒ・ヒムラーによってナチス・ドイツの公式機関となり、一九三九年の初め、SS に吸収された。表向きは祖先の遺産及び遺伝問題を研究する団体ということになっていたが、オカルト的色彩の濃い部局で、五〇もの研究部門を持っていた。そこでは、純粋に科学的なものから捕虜の生体解剖、秘密結社研究、オカルト実践などが行なわれ、さらにオカルト的特殊情報部までがあった。

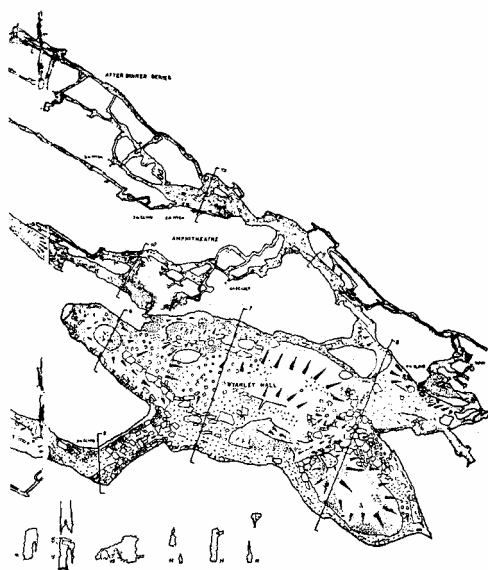


ヒトラー

【アメリカの地下回廊】

古代世界最古の文明発祥地とみられるアメリカ大陸には、アジアに比べてより多くの地下都市に関する証拠がある。たとえば、古代インカ帝国の首都クスコにあるサント・ドミンゴ寺院の祭壇(かつてインカの太陽神殿があつたところ)の下には、クスコ市街からサクサワマン要塞へと通じる地下回廊が延びており、この回廊はボリビアの国境にあるティアワナコの神殿カラササーヤの下からクスコを経て、エクアドルのクエンカ回廊、グアテマラ、メキシコのプエブロ回廊、さらにはテオティワカンのピラミッドの下にまで延びていたと考えられる。エクアドルのクエンカ回廊の入口はいくつかあるが、そのひとつはかつてドイツの情報部に務めていたファン・モーリスが発見したロス・タヨス(太陽鳥洞窟)であり、この一帯には未知の巨大な地下都市がある。また、プエブロ回廊の入口は一七世紀にグアテマラを調査したスペインの司祭グスマンによって発見されたもので、プチュタのプエブロからテクパンのプエブロまで長さ五〇キロのトンネルがあったといわれる。このプエブロ回廊の別の入口はグア

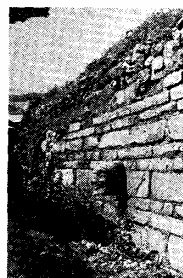
テマラ西部のサンタ・クルス・デル・キチェの近くにもあり、ここからさらにメキシコへと延びる回廊の先、ハリスコ州カボ・デ・コリエンテスの東一二〇キロ地点やメキシコ・シティの北西一六〇キロ地点には、別の地下都市があるとみられる。このほか、チャビン・デ・ワントルやテオティワカンの地下、ロンカドルやサンタ・カタリナの山中には、未知のトンネル網と地下都市があるといわれているが、今なお十分な調査はなされていない。



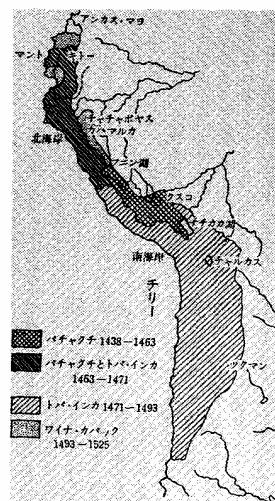
エクアドルのロスタヨス地下都市

[インカ帝国]一二世紀から一六世紀まで南米アンデスの高地に栄えた謎の帝国。最盛時の領土はコロンビアからチリにまたがり、南北の都市は五〇〇〇キ

ロを"越える""王の道""によって"ひとつに結びつけられていた。首都はクスコ。一五三三年、スペインのピサロによって征服されるまで、""太陽""の皇帝""と称した歴代のインカ女王はクスコに住み、""太陽の神殿""に仕える最高"の神官として、インカ神権政治を指導した。帝国のおもな住民はケチュア族。日本人によく似た顔をしていゑる前インカの数々の遺産を受けついでインカ帝国の領土内にはティワナコやナスカ、チャビン、クスコ、マチュピチュ、チャンチャンなどの遺跡が豊富にあり、インカ帝国の成り立ちを研究することによって古代世界の謎が次々に解明されると期待されている。



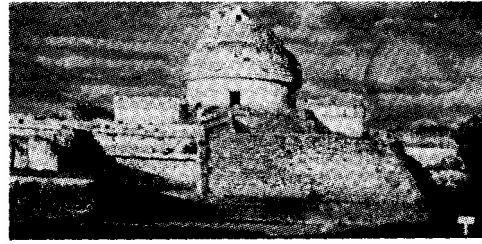
チャビン・デワントルの要塞



インカ帝国拡張図(泉靖一作成)

宇宙考古学

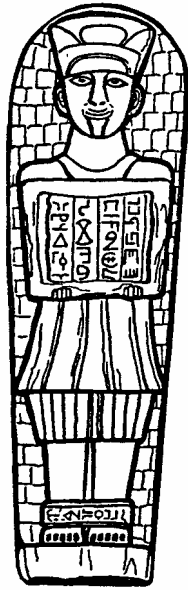
一九五七年、ソ連の人工衛星スプートニクの打上げ成功によって幕明けした宇宙時代の考古学。アトランティスやムーに関する従来の研究は、以後、宇宙の広がりの中でとらえなおされ、太古宇宙飛行士説として新たな展開をみせると同時に、保守的な考古学界にも古代科学の予想以上に高い水準を見直そうという動きが具体化した。一九六六年までの第『期』に活躍したルイ・ポーウェル、ジャック・ベルジェ、P・コロジーモ、A・トーマス、A・ゴルボスキーらは、従来知られなかった古代文明の高度な遺産を紹介し、現在の文明を唯【最高のものとする見方をくつがえした。一九六七年に始まる第二期になると、失われた文明の存在を示す証拠がふえるとともに、この文明の担い手と滅亡原因をめぐって新説が続出。世界中に古代ロマンをふりまいたデニケンが異星人来訪説を唱える一方では、何人かの研究者が太古核戦争説の可能性を示唆し、注目された。【九七七年に始まる第三期の特徴は日本においても本格的な宇宙考古学の機運が生まれたことで、二の年以後、『トワイライトゾーン』(旧称 UFO と宇宙)や『ムー』、『たま』、『歴史読本』『歴史 Eye』など、いくつかの雑誌に興味深いレポートが寄せられるようになった。一九八七年以降の第四期は、従来の成果を踏まえてさらに実証的・総合的な研究が進められているところに特徴がある。ムー文明を太古 a 本の宇宙文明として捉え直す見方が最有力。



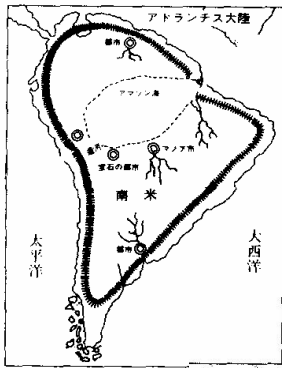
チチェン・イツァーの天文台カラコル

【エルドラド文字】

二十世紀初頭、『ソロモンの秘宝』の著者として世界的に有名になったイギリスの作家ライダー・ハガードが、南米のインディオから入手したといわれる彫像の文字。【九二五年にアマゾンの黄金都市エルドラドを目ざして行方不明になったイギリスの探検家フォーセット大佐は、友人のライダー・ハガードからこの彫像を譲り受け、その胸に刻まれた碑文を解読しようとしてつとめた。そして大英博物館の研究者に依頼した結果、その文字は東洋系の文字であろうとみなされたが解読には至らなかった。地球文化研究所では、この文字を日本に伝わるアイヌ文字とトヨクニ文字の混合文として読み、次のような結果を得ている。るり瑠璃富むカムイの宝は-----を越えた----- (所在地)の中にありけりフォーセットのマスコット人形として知られるこの彫像の銘文には、南米の失われた黄金都市、エルドラドのありかと、そこに秘められた宝の位置が記されているものとみられる。



フォーセット大佐のマスクット人形



南アメリカ大陸の7つの都市

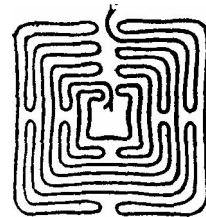
ボリビアのエルフエルトとティアワナコ、ペルーのナスカ、ピスコ湾のアンデスの燭台は一直線に並ぶ



ートルに近い奇怪な構造をもち、南北の両斜面にきれいに刻みこまれた数段の岩棚、東南斜面に劇場の座席にも似た区画のある不規則な階段がある。岩山の中央部、なだらかな斜面の中ほどから頂上に向かって約三〇メートルの区域には、幅三〇センチ、深さ一センチの溝が二本、およそ一メートル間隔で平行に並び、しかも二本の溝の左右および中間には長さ三三センチの菱形の刻みが一〇〇個ばかり頂上へ向かってくさり鎖状に伸びている。これらの溝と刻み目は、ミサイルのようなものを打ち上げる発射台のように見える。

クスコ

ペルーの首都リマの東方六〇〇キロ、アンデス山中標高三三〇〇メートルの高地にある旧インカ帝国の首都で、市内には前インカ時代からひきつがれた巨石遺構や地下回廊がある。"かつてインカの""太陽の"神殿"があったサント・ドミンゴ寺院の祭壇の下から市内の地下に抜けるトンネル網は郊外のサクサマン要塞に通じるといわれ、コロンビアからチリに至るアンデス山脈の地下に造られた大地下回廊の主要な出入り口のひとつであったという。空から見たクスコの形プレが前インカ人の好んだジャガーに似せて設計されているのも興味深い。



[エル・フェルテ]

ボリビアのサンタクルス市西方約九〇キロ、標高一六〇〇メートルの地にあるプレ前インカ時代の要塞。その名もスペイン語で「砦」を意味するこのエル・フェルテは、全体の長さ約六五〇メートル、幅三〇〇メ

航空考古学

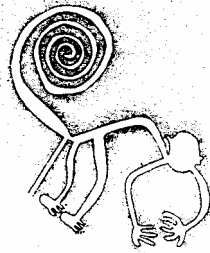
二十世紀に入り航空機のめざましい発達にともなって生まれた考古学の新分野。上空から写した航空写真の解析によって神殿や墓、道路の運河など地下に埋もれた遺跡の存在があらかじめわかり、今日の考古学的調査に不可欠の手段を提供している。この分野の発達によってナスカの地上絵やプレ・インカの大運河網、アメリカ中西部の大墳墓群などの存在が次々と明らかにされ、古代史は大きく書き換えられようとしている。特に最近の人工衛星写真は、未知の遺跡を発見する有力な手がかりとなっており、一部では月や火星にすら人工物の跡を認め



ようとする動きもある。

[サクサワマンの要塞]

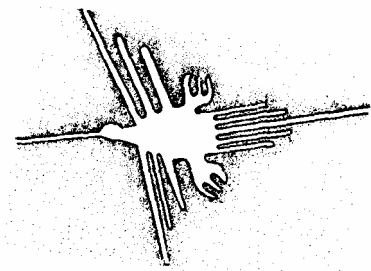
インカ帝国の首都クスコ郊外、オヤンタイタンボに向かう途中の海拔三七〇〇メートルの高地に築かれたプレ前インカ時代の要塞で、その下にクスコ市街へ通じる、地下道が掘られている。一辺約四〇〇メートルの敷地・に張りめぐらされた高さ約二〇メートルに及ぶ三重の複雑な城壁、そこに使われた大小数トンから数百トンまでの多面体の巨石、それらの巨石をすきまなく組み合わせた技術、そしてこの巨石群を高い山頂まで運び上げた能力は、まさに驚異そのものである。また、周囲の岩山に残る高熱で溶けた跡も謎である。



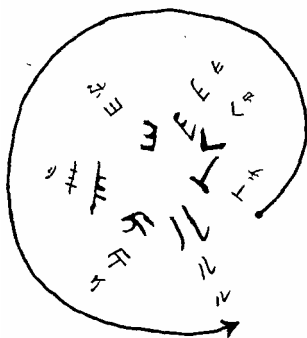
クスコのサント・ドミンゴ寺院につながる地下トンネルがあるといわれているサクサワマンの巨石要塞

[ナスカ象形文字]

ペルーの南部、ナスカ川支流のインヘニオ川地域一帯の砂漠に描かれた有名な地上絵。これは一種の絵文字とみなして解読することができる。図は現地で「シャチ」を描いたものとみなされている。しかし、この図形を分析してみると、ここには日本に伝わるアイヌ文字で、チカラ、ホリケル(地下を掘りける)と記されていることになる。はたして、このシャチの図形の心臓部に地下への秘密の入口があるのだろうか。



ナスカ平原に描かれたシャチの絵

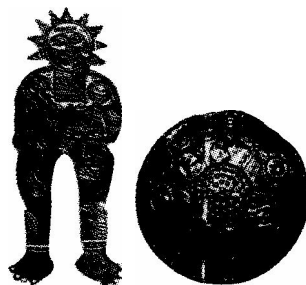


日本のアイヌ文字で「地下を掘りける」と読める

[ブラジルの地下都市]

今は亡きホピの長老ホワイトベアはこう語った。「かつてワシ族が最も強力な武器でヘビ族の町を攻撃した。そのとき彼らが用いたのは、電磁力を応用したもので、雷のような破壊力をもっていた。ヘビ族は彼らの攻撃に備えて人々を地下に避難させ、その砦を厚いシールドでおおうとともに、これを電磁兵器で守った。彼らの攻撃が午後になって止んだ時、ヘビ族は敵の攻撃から身を守ることに成功した。そしてヘビ族はワシ族の要塞の下までトンネルを掘り進めたのである……これらのことはすべてクリス

タル・ディスクに記録されている。第三世界の誕生の記録は、今も、南米のどこかにある地下都市の中に眠っているのだ。」南米インディオの一部族、モグララ族の長老タチュニカ・ナラも、彼らの神は南米の地下に巨大なトンネル網を造ったと述べており、アカコルやアカニス、アカヒムと呼ばれた地下都市はクスコやマチュピチュの洞窟とつながっていると証言している。タチュニカによれば、これらの古代都市のうちアカヒムと呼ばれた地下都市は、北西ブラジルのジャングルを見おろす「三つの峰」の「ふもと」にあるとのことで、デニケンにエクアドルの地下都市の存在を教えたファン・モーリスも、一九六七年にタチュニカからその話を聞いてロス・タヨスの洞窟を「発見」したのだという。



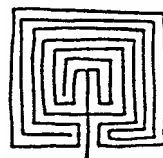
エクアドルの地下都市から出土したといわれる黄金の人形と円盤

ホピの迷宮

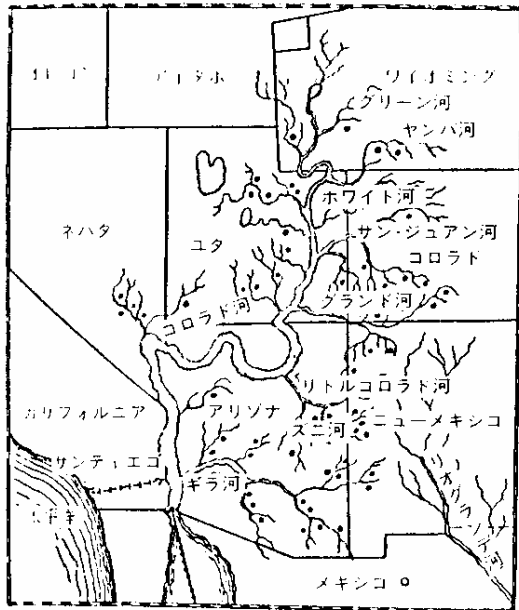
ラピルスアメリカのアリゾナ・ユタ・コロラド・ニューメキシコ州を中心に、プエブロ・インディアンと呼ばれる人々がいる。プエブロと称される特徴的な家に住むこれらの人々の中でも、ホピ族は昔ながらの儀式や習慣をよくとどめ、古い時代の記憶を今に伝えている。このホピ族が、プエブロ地区の岩壁に描かれた壁

画や太古の洞窟画の意味を知っているとみられるのは、特に注目すべきことだ。ホピの伝承によれば、赤い岩絵は「予言の書」であり、その意味を解するホピの仲間たちは、きたるべき第三の地球の滅亡の日にも、これらの絵から正確な情報を得て生きのびることができるという。そしてホピの長老は、ある種の岩絵を見ると、そこにはどんなトンネルがあり、どこへ通じているかがわかるともいう。はたして彼らは、太古の時代に造られた地下都市と地下回廊の秘密を知っているのだろうか。そもそもプエブロ・インディアンは、他のインディアンと異なり、どこから現在の居住地にやってきたか謎である。彼らが南米のアンデス山中にあるクスコやマチュピチュのことをよく知っているのは信じがたい話であるが、フランク・ウォーターズの『ホピの書』やデニケンのホワイトベア会見記などによれば、彼らは南方の「赤い都市」をめぐる戦いを「逃がれてこの地へやってきたという。」「その「赤い都市」とは南アメリカの「七つの都市」のひとつであったのだろうか。ホピの記憶によれば、彼らがその昔二の都にいた頃、突然包囲されて集中攻撃を浴びた。その時ホピの守護者であるカチナはすばやくトンネルを掘り、彼らを敵の背後の安全地帯に導いた。ホピはカチナの造った南米の地下トンネルを通過して北アメリカにやってきたという。それは全くありえないことではない。カチナは、ホピによれば、人間や地球の他の生物と異なった存在で、ロボットのようなものと考えられる。ホピの岩絵に描かれたカチナは、チリ北部のタラパカル砂漠やペルー南部のモレンデ郊外で発見されたロボットの岩絵とそっくりで

ある。これらは、ホピ族が彼らの守護者を記念して地下回廊の入口に残したものではないだろうか。もしかしたら、ホピ族の祖先がかつて築きあげた巨大な地下都市とトンネル網の秘密は、ラビリンスの伝説とともに古くから伝わる謎の迷宮紋様のうちに隠されているかもしれないのだ。エクアドルの地下都市の入口(太陽鳥洞窟)に近いクエンカのあたりで使われている迷宮図や、アルゼンチンのサンタクルス、ネウゲン地方に残された迷路文様は、いずれもホピの伝統的な迷宮紋様とよく似ている。これらの迷宮文様は地下都市とそこへ到る複雑なトンネル網に関する情報を与えてくれるのではないかと予想される。もし読者が世界各地の洞窟とその周囲に残された迷宮紋様との関係を組織的に調査すれば、これまで全く知らなかった太古の世界の歴史を明らかにできるのではないだろうか。



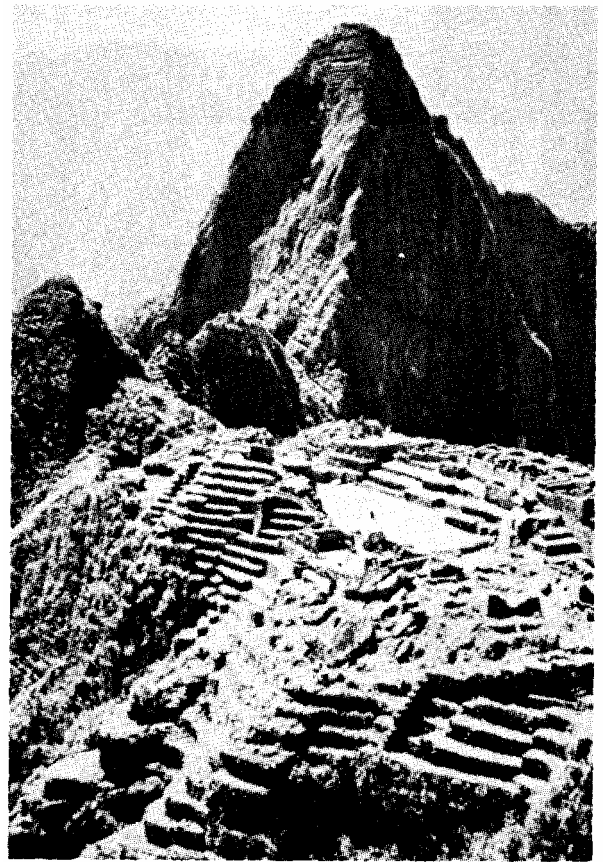
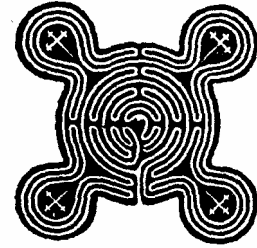
ホピの迷宮



アメリカ合衆国のアリゾナ・ユタ。ニューメキシコ・コロラド・ワイオミング州にある迷宮の入口

マチュピチュ

インカ帝国の首都クスコに近いアンデスの山頂三〇〇〇メートルの高地に築かれた謎の神殿都市。月の宮殿からワイナ・ピチュの頂きに向かうと左手に太陽の神殿、その先に日時計と呼ばれる巨石遺構および中央広場がある。推定収容人口二万人の居住施設をもつこの都市の随所には今も不可能な巨石加工の跡があり、また都市全体が霊鳥コンドルの形になぞられて設計された可能性がある。一九二二年ハイラム・ビンガムが調査を開始して以来知られるようになったこの山頂都市は、巨石運搬技術の謎など今なお多くの秘密に包まれている。



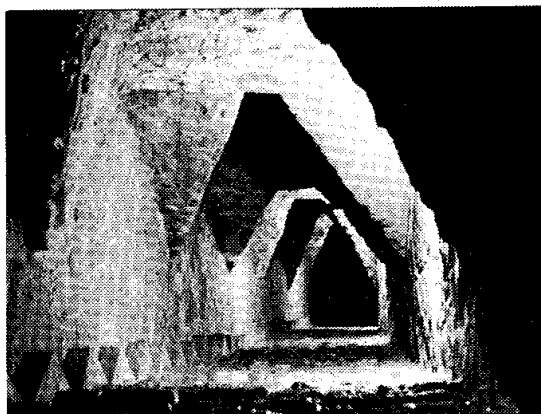
アンデスの 4000m の高地にある

謎の空中都市マチュピチュ

[マヤの地底王国]

キチエ族の聖典『ポポル・ヴフ』によれば、メキシコおよびユカタン半島には、オルメカ・マヤ時代に“シバルバー”とよばれる地“下帝国があったという。シバルバーは険しい段々道を下った谷底の低地の奥深い地下にあり、そこには“闇の

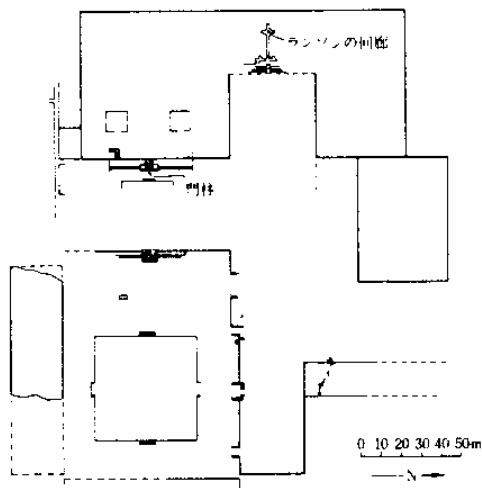
館や寒風の館、ジヤガーの館やコウモリの館、剣の館、炎の館などがあつたといわれる。シバルバーの人々は、キチエ族からドゥクール(みみずくH悪漢)または悪魔と恐れられ、実際にアルタ・ベラパス州の州都コバンの近くにあるイツァ族の地、カルチャフの谷の地下に住んでいたと考えられている。チチェン・イツァーにカラコル(天文台)を築いたオルメカ・マヤ系のイツァ族は、『チラム・バラムの書』などによれば、七つの洞窟のある七つの谷(地下の穴)の町トゥランにいたと伝えられている。この伝説は、カルチャフの谷にイツァ族の地下都市トゥラン・スイヴァ(シバルバー)があつたことを意味しているかも知れない



[南アメリカの要塞]

南米にはチャビン・デ・ワンタルのカステイヨをはじめとする未知の要塞がいくつもある。ピーター・コロジーモが宇宙船の機密構造をもつと指摘したチャビンの要塞は、七五×七ニメートルの広さをもつ石造の大建築物で、内部にある三つの部屋に新鮮な空気を送りこむための特別な換気装置がついているほか、別の要塞へ通じるとみ

られる秘密の地下道を備えている。東大教授の泉靖一(故人)は、一九五八年にこの遺跡を訪れた時、一番奥の石室の下に未知のトンネルがあることを確認し、入口の床石をはずして中に入ったが、「二〇分ほどかかっても出口らしいものに到達できなかった」ため、調査をあきらめてしまった。はたしてこの地下道の奥に何があるか、それはどこへ通じているのか?



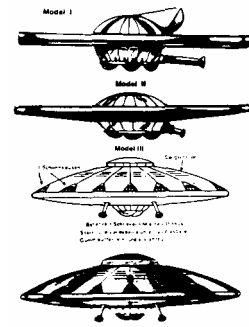
チャビン・デ・ワンタル遺跡の平面図(ルンブレラス作図)



チャビン・デ・ワンタルの地下回廊

[ラスト・バタリオン]

南米チリのエスタンジアや南極の秘密基地を拠点として、いま、第四の地球帝国づくりをめざしていると"いわれるナチス・ドイツ""第三帝国の生き残り部隊。ヒトラー最後の地球制圧部隊で、第三次大戦の結果消耗した米露両国を同時におさえ、これまでだれも果たさなかった世界帝国を一挙に樹立する任務をもった""見えざる軍隊"のこと。"一九四五年の二月二五日、ベルリン陥落の約二ヵ月前にラジオを通じて流されたヒトラーの演説にも登場する。「いつの日か東(ロシア)と西(アメリカ)がぶつかり合う日が必ずやってくる。その時、戦いの結果を左右する決定的役割を演ずるのは我々ドイツの""ラスト・バタリオン"である。」ここにヒトラーが予言"した""ラスト・バタリオン""とは、最終戦争を勝利に導く最後の決戦部隊という意味をもち、SS(親衛隊)の関係者の中でも特にすぐれた素質をもつ人たち二五万人で構成されたといわれる。このラスト・バタリオンがどのように連合軍のきびしい包囲網を突破して南米に到着したか、その後四五年間、なぜユダヤの世界的情報網にもかかわらず存在できたかは大きな謎だ。しかもドイツのラスト・バタリオンは、いま、米露の秘密兵器ではないかと噂されている UFO(未確認飛行物体)、つまり円盤型航空機を五十年以上前から開発し、実用化することに成功しているという。



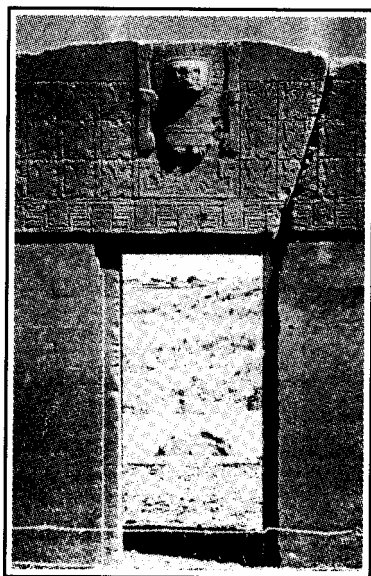
ヒトラーの開発した円盤

おお、天と地の父よ…汝(太陽)はその経路をいずこに変えたるやなにゆえオリンポスの真昼をにわかには夜となせるや…昼どきの農夫はいまだ疲れざるに夕げのとき至れるを驚き牛を連れて立ち去りぬセネカ(『テュエステース』)

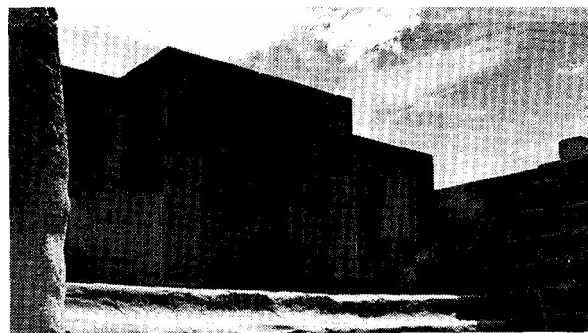
第3章

異変で滅び去った 高度な文明

ムー文明の痕跡をさぐる



天帝の秘密の都ティアワナコにそびえる太陽の門



アイヌ語で「カラ族の浜辺」という意味をもつカラサ
サーヤの神殿

これまで教わった歴史によれば、われわれは過去一万二〇〇〇年間に一度も大きな異変を経験しなかったことになっている。が、アンデス山中の遺跡は、人間が都市文明を築きあげたつい最近の数千年間に、何度も巨大な異変に遭遇したことを物語っている。三〇〇〇年前のエジプト文化がどれほど高度な水準に達していたか、われわれは最近になってようやく気づき始めたところだ。紀元前七～八世紀の大異変以前に地球規模の広がりをもって栄えたムー文明の痕跡は、見方を変えれば、誰でも世界各地で発見できるのだ。

エピソード1

歴史時代の異変を 物語る遺跡

世界最古の地理書『山海経』^{せんがいきよう}の中で、「天帝の秘密の都」と記されたティアワナコ。インカ帝国の都タスコの南東およそ五〇〇キロメートル。ペルー～ボリビア国境のチチカカ湖のほとりにあるティアワナコは、日本の富士山(三七七六メートル)より高い三八〇〇メートル

の高地にある巨石造りの神殿都市である。ボリビアの首都ラパスから西に向かってキムサ・チャタとアチュタの山あいを越え、今は不毛の地となった荒涼たる原野を横切ってチチカカ湖をめざすと、そこには有名な「太陽の門」をはじめとするいくつかの、巨石遺構、アカパナと呼ばれるピラミッド状の遺跡や、カラササーヤの神殿、巨大なプマプンクの廃墟がある。そしてこの周辺のチチカカ湖の底にも、また海拔六〇〇〇メートルを越える万年雪をいただいたイリヤンプの山々の斜面にも、いたるところに大小無数の遺跡があつて、ここがインカ以前に、アンデス一帯に栄えた壮大な文明の中心地であつたことは疑いようがない。十六世紀のフランシスコ・ピサロ以来、この地を訪れた多くの人々は、つい百年前まで昔の原型をとどめていたティアワナコについて、次のように書いている。湖の町チュキユト(ティアワナコの別名)の建物の中心部には、長さ二四メートル四方の正方形の広場がある……。ここには今でも多くの男女の像があり、まるで生きているようだ。それらは飲み物を飲んでいる人や川を渡るうとしている人、あるいは赤ん坊に乳をあたえている女性の姿を表している。一デイエゴ・デ・ラ・コバカここには世界で八番目の不思議な宮殿がある。その宮殿は長さ三七フィート(一一、一メートル)もの巨石で造られており、一つひとつの継ぎ目がわからないほど完全にぴったりと組み合わされ、はめこまれている。一ヒメネス・デ・ラ・エスパルダ巨大な宮殿の中には、長さ四五フィート(一三、五メートル)、幅二ニフィート(六、六メートル)の部屋があり、その屋根はクスコの太陽神殿の屋根と同じ形をして

いる……。大広間にはたくさんの柱が並び、湖水が大広間に続く階段を濡らしている。ティアワナコの村人によれば、この宮殿は、世界の創造主ビラコチャを祭るために造られた神殿だという……。

一シエサ・デ・レオン

ティアワナコは大洪水のあと、その名も不明の巨人族が一夜で建設したという。巨人族は、太陽の神がやってくるという予言を軽んじたため、神の光で滅ぼされた…。

一インディオの話十六世紀の年代記作者シエサ・デ・レオン(一五一八?—一五六〇)がこの地を訪問したとき、カラササーヤの神殿の壁と壁龕がんには、金や銀、銅をはりつけた像がいくつもあり、その足もとには高価な腕輪や金の釘があつた。今では個人のコレクションでしかその内容をうかがえなくなつてしまつたが、昔のティアワナコには、現在知られている品々を上回る重さ三キロの純金の杯、皿、茶碗、匙さじなどはかり知れない富があつたとみられる。ティアワナコをだれよりも愛したドイツの考古学者アルトゥール・ポズナンスキーは、海拔四〇〇〇メートルの高地にあるこの遺跡が、かつて海辺の港町であつたと考えた。チチカカ湖一帯を調査した彼は、湖の底に破壊された道路や神殿の跡があること、湖の湖岸線や山の洞窟の壁が異変によって大きく傾いた跡を示していること、山の斜面にある農業用の段丘(棚田)が、今ではどんな作物も育たない万年雪の雪線(五〇〇〇メートル前後)まで続いていることなどから、ティアワナコがつくられたのはアンデス山脈が隆起する前の時代であると考えた。「現在のア

ンデス高原は荒れ地で、ほとんど何も育たない。今の気候のもとでは、どの時期を考えてみても、「先史時代に『世界のへそ』といわれ」たティアワナコで大勢の人々が暮らしていたとは思われない。」(ポズナンスキー)ティアワナコの一帯がかつて太平洋の沿岸部にあったことは、チチカカ湖の動物群が海洋性起源を示していることや、チチカカ湖の水が海水とほとんど同じ成分であること、アンデス山脈のいたるところにサンゴの化石や貝殻が散乱し、昔の海岸線が隆起した跡をとどめていることによつてすでに証明されている。『種の起源』を著したチャールズ・ダーウインは、ビーグル号でチリのバルパライソを訪問したとき、海拔四〇〇メートルのアンデス山中にある海岸線の跡で、貝殻がまだ腐っていないことに大きなショックを受けた(貝殻が腐っていないのは、その場所がつい最近、四〇〇メートルも隆起したことを物語っている!)。また彼は、太平洋の海岸部から一〇〇〇キロ以上も奥にある標高二〇〇〇メートルのウスパラータ山地で、古代の海岸にはえていた巨木の群落がいったん海底に沈み、その後二〇〇〇メートル以上も持ち上げられた明白な証拠を目撃している。このような証拠にもとづけば、アンデス山脈が隆起したのは、何百万年も何十万年も前のことではなく、文明をもった人間が地上に都市をつくりはじめた何千年前か、何万年前であったことははっきりしている。チチカカ湖の一帯は、ここにティアワナコの町がつくられた頃、太平洋の水位とほとんど変わらないところにあったが、その後の異変で湖の位置が引きあげられ、アンデス山脈全体が何回か上昇を続けて、今の高さになった

ことはまちがいないのである。今世紀の初めに、イギリスの王立地理学会の会長をしていたレオナード・ダーウインは、アンデス山脈が隆起したのはティアワナコの都市がつくられたあとではないかと述べた。ポズナンスキーによれば、ティアワナコが建設されたのは一万六〇〇〇年前のことであり、その他の考古学者によれば、最古の遺跡が造られたのは四〇〇〇年くらい前のことである。が、アンデスが隆起し、ティアワナコの町が崩壊したのであれば、それはいったいいつ頃のことだったのだろうか。この点について、世界各地の地質学者や地理学者、考古学者、歴史学者はいろいろな見方をしている。今のところ、最終的な結論は出ていないが、多くの研究者が注目している異変の年代は、一万二〇〇〇年前、三五〇〇年前、あるいは、二七〇〇年前のどれかである。ロシアの指導的な地質学者の何人か(ジロフ、オブルチェフ、ハグメイステルら)は、この異変が起きたのは、C14年代で今から一万年〜一万二〇〇〇年前だとみている。C14法(放射性炭素年代測定法)を開発してノーベル賞をとったアメリカの化学者ウィラード・F・リビーも、今から約一万四〇〇年前(C14年代)に、地上の各地で人間の痕跡が突然消え失せ、大きな断絶が起こったことはまちがいないと述べている。これに対して、ヨーロッパと北アメリカの氷河時代を研究してきた欧米の実証的な地質学者(アップハム、ド・ラパラン、ライトら)や、気候変化の歴史を調べてきた北欧の学者(A・ブリット、アンデルソン、セルナンデルら)は、地球規模の異変があった時期

を三～四〇〇〇年前のこととみており、ロシアの学者が一万年前に終わったとみなし



セント・ペテルブルク寺院にある大洪水の絵

ている氷河時代は、C14法で調べた結果、三五〇〇年前より古いものではないというデータを得ている。世界各地の海岸線が歴史時代に入ってから隆起している事実を発見したアメリカの地質学者R・A・デーリによれば、その時期はおよそ三五〇〇年前のことだという。しかし、これらの見方とは別に、異変が発生したのは今から二七〇〇年一二八〇〇年前のことだと考えられる有力な証拠もある。そのひとつは、一九一九年にアメリカのカーネギー財団が発表した太陽活動のグラフだ。このグラフをつくるためにセコイアの年輪を調べていたA・E・ダグラスは、紀元前八世紀の終わりと紀元前七世紀の初めに、セコイアの成長が急激に止まったことを発見している。これは、その時期に激しい気候の変化があったことを意味している。また、太陽活動と密接なかわりをもつ地磁気の変化を調べた何人かの学者(フォルヘレーター、マーカントンら)は、古代の青銅器や陶器に含まれる磁気を分析した結果、地球の磁場は紀元前八世

紀に逆転していることを突きとめた。一般に磁場の逆転は、地軸の変化と結びついているので、この時期の地軸変化によってアンデスが隆起し、激しい気候の変化が生じたことは十分に考えられる。 Санктペテルブルクのエルミタージュ博物館にある紀元前のスキタイの黄金のバックルに、氷河時代の末期に死滅した剣歯虎けんしこの姿が描かれていることや、メキシコで石器とともに発見された氷河時代のマンモスのC14年代が、権威ある『ラジオ・カーボン』誌二巻で二六四〇年前となっていることは、氷河時代末期の異変が紀元前七〇〇年頃に発生したという見方にとっては有利な材料である。現地のインディオによって、遠い昔、世界の中心に位置する都として輝いたと伝えられるティアワナコが、地軸をゆるがす大異変によって滅び去ったのはいつの時代か!われわれ日本探検協会では、近い将来、本格的な学術調査を進めたいと考えている。

エピソードII

紀元前の高度な医学

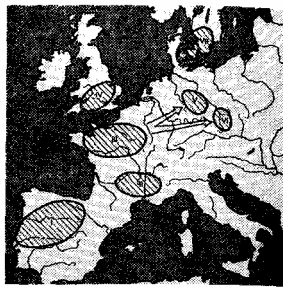
一九六八年にソ連の学者コリン・メグルーチアン博士らは、アルメニア共和国の首都エレバンの南にあるアララト山のふもとで、前二〇〇〇年頃に湖るとみられる大規模な冶金工場の跡を見つけた。欧米の考古学者によって世界最古の本格的な工場跡とみなされたこのメドザモール遺跡には二〇〇個以上の炉の跡があり、ここではマスクと手袋をつけた職人たちが金や銅、鉄、鉛、亜鉛、錫、マンガン

などを精錬加工して各種の金属製品をつくり、メタリッタ・ペイントやセラミックス、ガラス製品まで生産していたことがわかった。メドザモール遺跡から出土した製品は、いずれもみごとに出来ばえで、十四種類にのぼる金属製品の中には、今日の外科医が使っているピンセットと同じものさえあった。鋼鉄でできたこのピンセットを定量分析したロシアの科学者たちは、古代の製品が現代のものにまさるとも劣らない高い純度をもっていることを知って驚いた。驚くべきことは他にもあった。アルメニア共和国にはメドザモール遺跡の他にいくつも重要な遺跡がある。エレバンの東方およそ百キロ地点のセバン湖のほとりにあるイチクネー遺跡もそのひとつであるが、この遺跡からは現代でも困難な脳外科手術にみごとに成功した跡をとどめる人間の頭蓋骨が見ついている。エレバン医学研究所の脳外科部長アンドレニエタ・ヤガリアン教授が、三十五歳前後で死亡したとみられる女性の頭蓋骨を調べたところ、この女性は若いころ頭をケガして脳が露出するほど致命的な状態にあったにもかかわらず、動物の骨でできた栓をうまくあてがわれて命びろいしたことがわかった。四十歳前後で、死亡したもう一人の女性の頭部には、これより大がかりな開頭手術に成功して十五年ほど長生きした跡があった。これらの脳外手術の成功例を詳細に調べた後で、ヤガリアン教授は、先史アルメニアの外科医が「今日の外科医より技術的に優秀だったにちがいない」と述べている。イチクネー遺跡はさきのメドザモールと同じ前二千年期の遺跡である。おそらく当時のイチクネーの外科医は、メドザモールでつくられたすばらし

い冶金技術の産物である鋼鉄製のピンセットを使って現代より進んだ脳外科手術を行なったとみられる。古代エジプトの医学一九六九年から七〇年にかけてエジプトを調査したジェームズ・ハリス博士を団長とするアメリカ調査団は、カイロ博物館に安置されたファラオのミイラをX線分析した結果、いくつかの遺体の内部に今日の外科医学で使用されるものとよく似た治療器具が埋めこまれているのを発見した。エジプト第十八王朝のトトメス三世(前九〇〇年頃の王)の右前腕には「黄金のブローチ」があり、十九王朝のセティ一世(前八〇〇年頃の女王)の左前腕には「聖なる眼」がはめこまれていた。ラムセス二世の王妃ノジメート(前七〇〇年頃の女王)の胸には卵形の器具と四つの彫像があった。これらの器具が心臓病などの治療を目的とした器械であったのかどうか報告書の中では触れられていない。しかし、アメリカの高名なエジプト学者J・H・ブレストッドが内科学の権威E・B・ラックハートの協力を得て翻訳したエドウィン・スミス・パピルスに、脳手術や心臓手術に関するきわめて科学的な指示をふくんだ古代エジプトの高度な医学知識が記されていたことや、「王家の谷」から発掘された数多くのミイラに現代の歯科医が作ったものと何ら変わらないブリッジや義歯が認められたことなどを考えあわせると、今から二七〇〇年以上前のエジプトのファラオたちが、現在の最先端の医学より進んだ延命処置を施された可能性は大いにあり得る。

古代ヨーロッパの 医学

これよりさき一九五〇年代からヨーロッパ各地の開頭手術骨を調査してきたドイツのウルリッヒ博士とヴァイタマン博士は、一九六五年に、先史ヨーロッパの外科医学が驚くほど高度なものであったことを裏づける研究成果を発表していた。二人が調べたおよそ四〇〇体の手術例によれば、紀元前二〇〇〇年期から一〇〇〇年期（ヨーロッパの新石器時代から青銅器時代）にかけて行なわれた脳外科手術は現代よりもはるかに高い成功率を示し、ドイツでは八八パーセントの患者が手術後も生き続けたことを示していた。彼らがワイマール先史博物館の協力で一九五八年に発掘したノルトハウゼンの先史の遺体安置所からは、現代の外科医すら圧倒される最大長一六五ミリ、最大幅一三二ミリの手術例が見つかり、ゴータ付近の遺跡から出土した頭骨は、



ヨーロッパにおける脳外科手術骨の分布



古代ヨーロッパの脳外科手術が成功したことを示す頭蓋骨

患者が脳腫瘍の除去のため二回にわたって手術を受け、これに成功して長生きした跡をはっきりととどめている。スペインやフランス、イギリス、ドイツ、デンマーク、ノルウェーなどの各地から出土したこれらの開頭手術骨は、これまで漠然と石器時代や青銅器時代の魔術的な儀式に関係づけられてきたが、今から三〇〇〇年前のエジプトに高度な医学知識と外科技術が存在したことを示す実例が見つかった以上は、ヨーロッパの外科医もファラオの医師団と同様の知識をもち、同じ時代（紀元前一五〇〇年頃～紀元前七〇〇年頃）にこれらの手術にあたったと考えてよい。

ミイラの謎

かつてエジプトのミイラを詳細に研究したイギリスの解剖学者エリオット・スミス博士は、パプア・ニューギニアのミイラがエジプトのミイラとほとんど同じ高度な外科的処置を施されていることを確認して以来、世界各地の人工ミイラは、エジプト第二王朝時代に完成したミイラの製造法が、巨石文化や太陽崇拜、頭蓋変形の習慣などとともにエジプトから世界に広がったと考えた。一九一五年に出版された『初期文化の移動』の中で、スミス博士は十項目から成る特異なエジプト文化複合が紀元前八〇〇年頃から世界各地に伝播したことを、多くの貴重な実例に基づいて論じている。しかしその後、文明の独立発生を重んじる学問的傾向が強まる中で、彼が指摘したエジプト

文化の世界的な広がりを見失われ、前一〇〇〇年期の南アメリカでもエジプトと同じ頭蓋変形やミイラの製造が行なわれたことや、ヨーロッパ、コーカサス、中央アジアにおける外科手術骨が彼の唱えるエジプト文化複合の伝播地域から出土していることに注意を払う学者がいなくなった。けれども、彼が作成した「特異文化の移動図」をさきに掲げた地図(ヨーロッパにおける頭骨手術の中心地)と見比べてみると、両者の地域はほとんど重なり合っている。また、南アメリカの開頭手術骨は、スミスの地図に示されたアンデスのエジプト文化複合伝播地域から出土している。エジプトの高度な外科医学がヨーロッパの海岸部と内陸河川沿いに、またアンデス地帯に伝えられたことは、スミスが指摘する頭蓋変形やミイラの製造技術などの一致から間接的に証明されるだけでなく、これまでエジプトのファラオにしか認められなかった血液中の特異な Rh 因子がヨーロッパ先史文化の担い手の子孫とみられるイベリア半島のバスター人や、アンデスのミイラからも検出されていることによって直接的に証明"されている。ファラオのミイラに""インカ骨""と呼ばれる特異な縫合線(前頭骨と頭頂骨の間に三角形を描いて出現する非常に稀な縫合線)が、古代アンデス人と同じ高い割合(現代ヨーロッパ人の一パーセントに対して四～五パーセントの割合)で認められることや、バスク人の言葉が古代アンデス語を受け継ぐケチュア語にきわめて近いことは、前一〇〇〇年期にこれらの地域で脳外科手術を行なった人々が同一の人種(クロマニヨン系、もしくは地中海系の人種)に属していたことさえ示しているのである。"注""インカ

骨""と並んでアンデスの"古人骨に高い割合で認められる".前頭縫合""は、縄文時代の日本人"と古代イスラエル人(アムッド人)の頭骨においても高い頻度で現れていることが確認されている。

古代アンデスの医学

古代のアンデス地域で盛んに脳外科手術が行なわれていたことを最初に学問的に明らかにしたのは、十九世紀のフランスの解剖学者ポール・ブロカ(一八二四～一八八〇)だった。彼は、一八六三年にペルーのクスコでアメリカの外交官 E・G・スクワイヤーが発見した奇妙な頭蓋骨を調べた結果、頭蓋の一部が四角に切り取られたこの頭骨の内部に六本の細い金属線が埋まっているのを見つけた。クスコの頭蓋骨は、彼の所見によれば、明らかに脳障害の患者にみられる病理学的な特徴を備えていた。そこで"ブルカの中核"として知られる大脳の言語中枢を発見したこの有名な学者は、前一〇〇〇年期のアンデスで、患者が生存中に脳外科手術を受けたことはほぼまちがいないと結論づけた。しかし彼の結論は当時としてはあまりにも進みす

ペルーのイカ遺跡から出土した石の表面に描かれている古代アンデスの心臓外科手術図



ペルーのイカ遺跡から出土した石の表面に描かれている古代アンデスの心臓外科手術図

ぎていたため、古代アンデスに高度な外科医学があったことは、一九二〇年代にペルーの考古学者フリーオ・テーヨ博士がパラカス・カベルナスを調査するまで確かな事実とみなされなかった。このときペルー南部のパラカス半島にあるセロ・コロラドのカベルナス(紀元前七五〇年頃から営まれた地下式墳墓)を発掘したテーヨは、ここで頭蓋変形を施された多数のミイラを発見し、埋葬骨の四〇パーセントに脳外科手術の跡があることを確認した。その後、同じような外科手術を受けた頭蓋骨はナスカ(ペルー)やティアワナコ(ボリビア)、タルカ(チリ)などでも相次いで発見され、今では紀元前一〇〇〇年期のアンデスの外科医が、エジプトやヨーロッパの外科医と同じ高度な医学的処置を患者に施したことは疑えない事実となっている。アンデス地帯の数多くの頭蓋骨を長年にわたって調査してきたペルーの神経外科医フェルナンド・キャピサス博士が一九七五年に明らかにしたデータによれば、チリのタルカにおける開頭手術は実に八五パーセントという高い成功率を示しているとのことだが、これはウルリッヒ博士が示したドイツの成功率とほとんど変

わりない。前一〇〇〇年期のヨーロッパでこのような技術を駆使したバスク人の祖先が、アンデスの原住民ケチュア人と密接なつながりをもっていたことはさきにも述べたが、言語学者によってバスク人と同じ系統に属し、人類学者からクロマニヨン人と同系の人種とみなされているカナリア諸島の原住民グアンチ人の間で、かつてエジプトやプレ・インカと同じミイラが作られ、開頭手術が行なわれていたことは、以上に示されたエジプト文化の広がりをもさらに補強してくれる。グアンチのミイラの頭蓋骨こま、ヨーロッパやアンデスの頭蓋骨と同じように丸のこぎりを使った跡があり、手術後に金や銀の板をかぶせて患部の回復をはかる技術がペルーにもあったことは、大西洋の両側で同じ時代に同じ技術があったことを示すものだ。以上の諸点から、われわれは三〇〇〇年前のエジプトに今よりもっと高度な外科医学があり、前八〇〇年以降、いくつかの退化の徴候を示しながら地中海地域から全世界に広がっていったこと(あるいは、かつて世界的な広がりをもっていたエジプト文化が前八〇〇年以後、相互のつながりを失って次第に退化していったこと)を事実として受け入れなければならないのではないかと思われる。

[アカンバロの土偶]

メキシコ・シティの北西約一六〇キロ地点にあるアカンバロから大量に出土した謎の土器群。一九四五年来、地元の「雄

牛山」と呼ばれる高台のふもとから続々と発見された土器は、人類がまだ存在しなかった七〇〇〇万年以前の恐竜や翼竜などを形どった土偶をふくみ、本物か偽もの物かで大論争を引き起こしている。本物とすれば、人類は何千万年も前に恐竜とともに生きていたか、恐竜は比較的最近まで絶滅をまぬがれたかどちらかである。土器とともに出土した動物の歯を古生物学の世界的権威ジョージ・シンプソン博士が鑑定した結果では、その歯が氷河時代に絶滅した古代馬のものと判明。地質学者チャールズ・ハプグッド教授も、偽造説は成り立たないと結論づけている。本格的な調査と慎重な議論が望まれる遺物。

[ヴェリコフスキー]



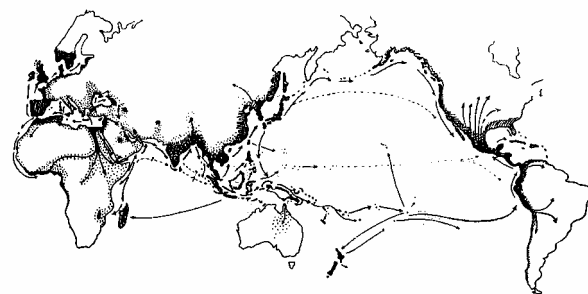
一九五〇年『衝突する宇宙』を発表して世界的反響をまき起こしたアメリカの高名な学者。コペルニクス、ダーウィン以来の天才とも称えられた彼の理論は、われわれの太陽系秩序が歴史時代になって再編成されたという革命的内容をもち、地球はこれまで二度にわたり金星や火星の接近によって大異変を経験したと説いている。晩年のアインシュタインも評価したといわれる彼の研究は、古代世界の天文、地質、生物、考古、歴史の全般にわたる再編成を企てる本格的なもの。東大名誉教授竹内均が翻訳し

たヴェリコフスキーの『古代地球大異変』はアトランティス滅亡の真相に迫る画期的著作とみられている。

[エリオット・スミス]

英国マンチェスター大学とロンドン大学の解剖学・人類学の教授で、その当時世界的に名を知られた権威であった。スミスは、専門の解剖学的立場からミイラの研究に取り組んで世界各地にその痕跡を求める調査を続けるうちに、巨石文化の伝播の問題に入ってしまった。そして、エジプトとまったく同じようなミイラ製造法が、はるか離れたパプア・ニューギニアのトーレス海峡の島で行なわれていることを発見し、そのような事実は、二つの地域間に文化の伝播があったと考えなければ説明がつかないと考えて、図のような「特異文化の分布図」を作成した。巨石文化、ミイラ作り、太陽崇拜、スワスチカ(鍵十字の文様)、ヘビ信仰、頭骨変形、耳の穴あけ、天地創造、大洪水などの特殊な伝説、入れ墨、擬婉ぎべんなどの風習はいずれも古代エジプト第二十一王朝に行なわれていた風習である。それらの風習がワンセットで世界各地の沿岸地方や島々に集中していることに注目した彼はこれらは、これらをエジプトから伝播していったものではないかと推測した。古代エジプトの高文明が、世界各地に広がったとする雄大な伝播理論の第二の前提として、彼は「文化複合」という考えを導入している。つまり、ピラミッドやミ

イラなどの分布を個々に調べても、伝播の大きな流れを捉えることはできない。ある風習によっては、ある地点まで伝播して消滅したり、ある地点から急に飛び地したりするものである。が、これらを総合すれば「特異文化」全体の伝播状態が再現されるだろうというわけである。スミスは「文化複合」の伝播をマイラの製造年代から推測して、紀元前八〇〇年頃からと結論している。日本では縄文時代後期に当たる。近年注目されはじめた「紀元前の大航海時代」が、従来の考古学・民族学・歴史学などの常識をはるかに越えて、実際に行なわれていたことを、スミスはいまから八十年前に、豊富な体験と綿密な調査で、すでに立証しているのである。

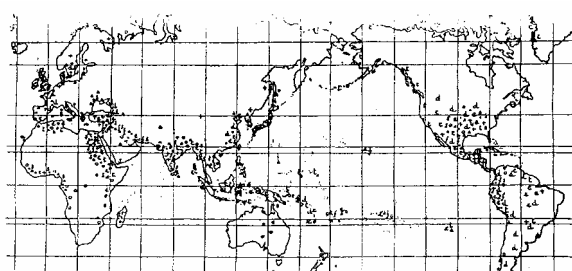


有史以前の移住者群はエジプト文化を各地へと伝播させていった。

オーパーツ

文明が存在しなかったはずの地層から出土する謎の加工品。Out of place Artifact(場違いな人工物)の略。オーストリアの数千万年前の第三紀石炭層から発見された「ザルツブルク立方体」や、六〇〇〇万年前のイギリスの岩から出てきた金の糸と釘、アメリカのコロラド州ロッキー・ポイント鉱山の銀の鉱脈から見つかった人間の骨と銅の矢じり、カリフォルニア州コソ山脈の五〇万年以前の岩の中にあつた点火プラグらしき機械装置、マサチューセッツの数百万年前の地層から出土した金属製の壺、同時期のゴビ砂漠で確認された金属靴の跡、コロンビアの黄金ジェット機など多数ある。

ガスマスクをつけた古代人(ヴズペク共和国)



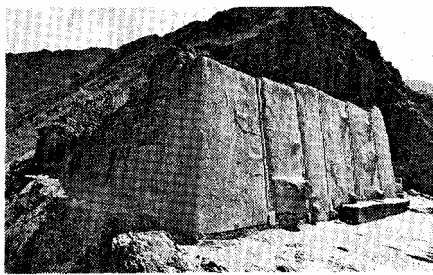
特異文化(巨石文化など)は特定の地域に集中的に分布している。



[オヤンタイタンボの要塞]

ペルーの旧都クスコの北西七〇キロ聖なる谷ウルバンバ河を見おろす高地に

築かれた前インカ時代の巨石要塞。"今日""太陽神殿""の一部"と考えられている高さ約四メートル、幅約一五メートル、厚さ二メートル前後の"屏風岩""は、五〇一六〇トンにおよぶ六個の花崗岩をすきまなく結合したもので、巨石要塞の中でもひととき注目される。

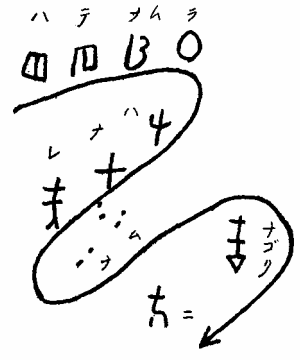
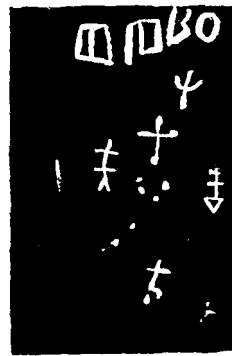


[グアンチ文字]

アフリカ大陸の西方カナリア諸島のいくつかの島に、これらの島の原住民グアンチ族が残した文字。グアンチ族はクロマニヨン系の頭蓋骨を持ち、ヨーロッパではアトランティス人の末裔とみなされている。しかし彼らの残した文字のいくつかは日本に伝わる古代文字と似ているところから、地球文化研究所では次のように解読している。・アラタナルホアゲニツクル(新たなる帆上げ荷造る)・ハテナムラハナレナムナゴリニ(果てな村離れなむ名残りに)右の解読結果によれば、グアンチ族はアトランティス人の末裔というよりは、むしろ原日本人、カラ族の一員とみなすことができる。ヨーロッパの研究者はこのグアンチ族をイベリア半島のバスク人に非常に近い人種であったとみなしている。テネリフェ島のグアンチ文字とその解読結果

○ ○ ⊕ || E' ⇒ UC 三
 ア ラ タナルホアゲ ニツクル
 カナリア諸島のグアンチ文字

テネリフェ島のグアンチ文字とその解読結果



日本の古代文字で読み解ける

日本の古代文字で読み解ける

[クイクイルコの円錐ピラミッド]

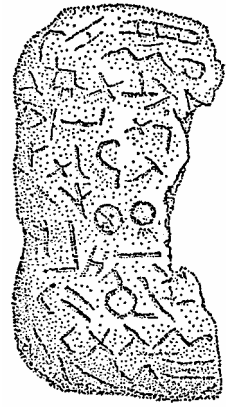
メキシコの首都メキシコ・シティの南方郊外にある厚さ七メートルの堆積層に埋もれていた遺跡。紀元前四～五世紀に建造された中米最古のピラミッドとされるが、考古学者バイロン・カミングスの出した推定建造年代は、三五〇〇年前で、エジプトのピラミッドをはるかに上回るものである。底部の直径約一五〇メートル、高さ二五メートル、頂上の円形平面部の直径約八〇メートル。内部は土を盛りあげ、側面や上面を溶岩と泥で固め、昇降用の斜路をつけたうえ、全表面を石灰などで白く化粧した基壇の中央に建っ



ていたらしい。

[グローゼル文字]

フランスの旧石器時代遺跡グローゼルより出土した石板に刻まれた文字。この遺跡はC国年代測定によれば、今から一万二〇〇〇年以前に溯るものとみなされている。したがって、そのような古い時代に、はたしてこのグローゼル文字が残されたか否か、大きな関心と疑惑を呼んでいる。多くの先史学の権威はこの出土物はまちがいになくグローゼル遺跡の下層部より出土したことを認めている。けれども旧石器時代の文字の存在を認めることができない人々は、これは明らかきようぎつに後世の來雜物、混ざり物とみなしている。しかし、従来の論争を離れて、これらの記号を周囲の文字群と比較検討してみるならば、グローゼル文字は明らかに古代のサバラ地域で使われていたティフィナグ文字の系統に属することがわかる。この文字板をティフィナグ文字で解読した結果によると、次のような文が記されている(高橋解読)。栄え賜はめ神をば祭らむ大いなる見せしめありわれらは虐げられたりカラの神をば祈らむば右の解読結果によれば、このグローゼル文字板は、紀元前八世紀にアッシリヤに虐げられた古代イスラエルの民、カラ族の記録とみなすことができる。おそらくこの文字板は、BC六八七年の異変の頃、イベリア半島地域からフランスにかけて生き残ったカラ族の司祭が



残したものであろう。

グローゼルから出土した石板

コスタリカの石球

スタリカのディキス川からコト川に到る地方で発見された謎の石球。最大のもは直径二・五メートル以上、重さも二〇トンを超える。石球の大半は花岡岩でできておりこの堅い石材を完全な球体に仕上げた目的や技術は不明。「宇宙船の模型」説(デニケン)の他、昼間貯えた熱を夜間光に変える装置で、ムー文明の結晶体科学の産物とする説(高橋良典)もある。



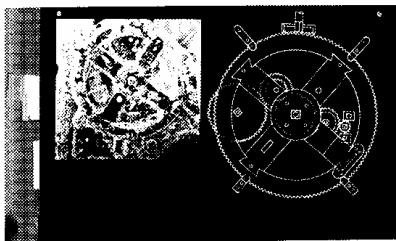
コスタリカの石球はタキオン照明装置の一部か

コロンビアのジェット機]

コロンビア北部のシヌー地方で発見された謎の黄金製品。I・サンダーソンやウルリッヒら専門家が三角翼と垂直尾翼の特徴から現代の超音速ジェット機にも似た古代のジェット機模型であると結論。さらにAホイアーは海空両用の潜水飛行機であった可能性、A・ヤングは母船と地上を"往復する""スペース・シャトル"のような着陸船であった可能性を指摘している。

古代のコンピュータ

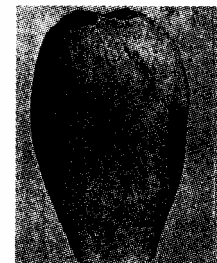
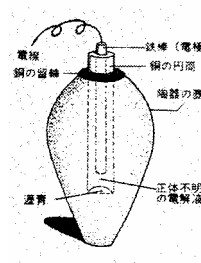
一九〇〇年、クレタ島に近いアンディキシム島沖の海底で見つかったギリシア時代のコンピュータイギリスのプライス博士の研究によって、四〇の歯車と目盛りをもつこの器械は、太陽や月惑星の位置を計算するために用いられたコンピュータと判明。古代科学の水準が意外に高かったことを証明する事例である。



エトルリア時代に沈んだ船から引き上げられた古代のコンピュータ

古代の電池

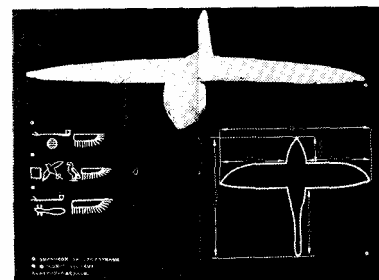
ドイツの考古学者 W・ケーニッヒによってイラクのバグダードで発見された数千年前の電池。銅の筒と鉄の棒をさしこんだ陶製のつぼの中に硫酸銅を注ぐと電気が発生することをアメリカの技師 W・グレイが実験的に証明。近代になって発明されたといわれる電池が、二〇〇〇年以上前から古代人によって電気メッキや照明に応用されていた可能性がにわかに現実的となった。



近代の電池の原型となった古代イラクの電池

サッカーの航空機

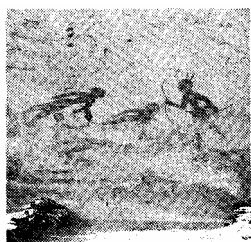
一八九九年エジプトのサッカー郊外で発見された古代の航空機の模型。直線状の翼と垂直の尾をもつこの奇妙な木製品は、当初「鳥」を形どったものと考えられたがのちにカレル・メシバ博士らの研究によってグライダーの模型であることが判明。古代のエジプト人が、「パリエイアモン(光の神の贈り物)」と名づけたこのような航空機を駆使していた可能性が注目されている。



エジプトの砂漠から発見された太古のグライダー模型

[サハラの宇宙人]

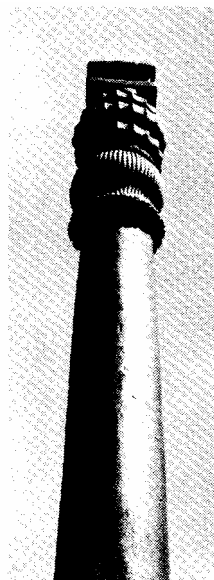
サハラ砂漠の中央、アハガル山中のタッシリにある謎の岩絵群。宇宙服を着た人物を思わせる絵は考古学者アンリ・ロートにより「タッシリの火星人」と名づけられた。他にもアンテナつきヘルメットを被かぶったようなジャバレンの「小悪魔」やティヌタザリフトの「泳ぐ人」などがある。アンリ・ロートは、これらの岩絵を今から数千年前に描かれたものとみなしたが、地球文化研究所の高橋によれば、それらは紀元前七〇〇年頃のもので、エチオピア出身のエジプトのファラオ、タルハカがサハラ全域で活躍した時代に流行した円頭人の様式に属する



宇宙遊泳するタッシリの少女

[錆びない鉄柱]

インドのデリー市郊外クトゥブ・ミナール寺院の入口にある謎の鉄柱。「アショカ王の柱」と呼ばれる高さ約十メートルのこの鉄柱は、すでに一六〇〇年以上も風雨にさらされていることが確かめられているが、不思議なことに今も錆ひとつない。このような古代製鉄技術の高さを示す例は西ドイツのコッテンフォレストにやきんもあり、現代の冶金学者たちを驚かせている。



水晶頭蓋骨

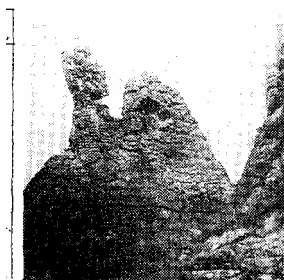
一九二七年、ミッチェヘッジスによりホンジュラスのルバアンタン遺跡で発見された謎の水晶製品。人間の頭蓋骨そっくりに仕上げられ、しかも正面から光をあてると眼が輝くもので、現代の技術では製作不可能とみられる。問題の水晶製品は他にもいくつかありメキシコのモンテアルバン遺跡ではみごとな水晶の杯が発見されている。



[セテ・シダデス文字]

ブラジル北東部、ピアウイ州の州都テレジナの近くにあるセテ・シダデス(七つの

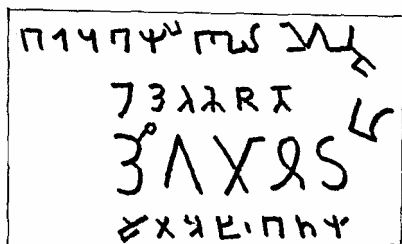
都市)と呼ばれている遺跡から見つかった文字群。古代南アメリカに栄えた伝説のカラ帝国の七つの都のひとつ、セテ・シダデスには、その数、数万とみられる碑文が眠っている。地球文化研究所では、それらの碑文のひとつを次のように解読した。我がシヴァ国けむに焦がされないえ(地震)溶けて深く波に覆われ隠るイギリスのフォーセット大佐は、カラ帝国の七つの都市のひとつがエルドラードであると考え、その行方を探し求めた。この碑文によれば、フォーセットの求めた太古のカラ帝国とその黄金都市は、巨大な異変と津波によって滅亡したことがうかがわれる。



セテ・シダデスの廃墟



セテ・シダデス遺跡平面図



廃墟から見つかった謎の碑文

[タルテッソス文字]

イベリア半島西部のガダルキビル川河口近くにあるタルテッソス遺跡から出土した古代の指輪に刻まれた文字。ガダルキビル川河口一帯は、古代イスラエルのソロモン王の植民地があったタルシシの地として知られているため、指輪はタルシシ人が残したものとみなされている。このタルテッソス・リングに刻まれた記号ないし文字は、グローゼル文字やロシュベルチェ文字と非常に近いため、一万二〇〇〇年以前に栄えたといわれているアトランティス王国時代の遺産とも考えられた。しかし、地球文化研究所でこれを解読した結果は次の通りである。牛飼うヒブルをイサクが治め末永くイサクが守れ以上の解読結果を前提とすれば、文中にイサクという名前が登場するところから、この指輪は紀元前七二二年にアッシリアに滅ぼされたイスラエル王国最後の王ホセア、すなわちイサクの時代のものとみなすことができる。イスラエルの失われた十部族にまつわる伝説によれば、ホセアはアッシリヤの地メディア(現在のイラン)に移されたとみられている。しかし、別の可能性として考えられることは、ホセアがその当時、同盟関係にあったエチオピアに亡命し、エチオピア王タルハカの庇護のもとにイベリア半島へ移住して、この地の王となったことが考えられる。

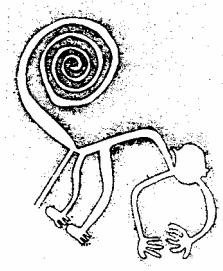
タルテッソス・リングに刻まれた文字の解読結果

ハ	メ	ウ	ウ
ク	ス	シ	シ
ハ	エ	カ	カ
レ	ナ	ウ	ウ
ハ	ガ	ク	ク
レ	ク	ハ	ハ
レ	イ	ル	ル
レ	ク	ヨ	ヨ
レ	ク	イ	イ
レ	ガ	ク	ク
レ	マ	ハ	ハ
レ	ム	ハ	ハ
レ	レ	ハ	ハ
		オ	オ
		サ	サ

タルテッソス・リングに刻まれた文字の解読結果。

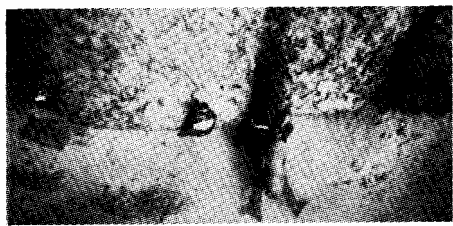
[ナスカの地上絵]

一九三九年以来、ポール・コソックやマリ
ア・ライへらによって次々と発見されたペ
ルー南部ナスカ高原一帯の地上大図形。万
を越える直線や円、ラセンなどの幾何図形、
鳥や猿、クモを描いた八〇〇近い動物模様は
いずれも航空考古学の調査によって空から
確かめられたもの。中には全長"約五〇キロ
に及ぶ"矢じる""し""図形もある。これらの
"図形がいつ、何のために描かれたかは今も
大きな謎であるが、有力な仮説としては古
代の宇宙基地説や航空標識説がある。ただ
しこの仮説は、古代人の宇宙文明を仮定す
る立場と異星人の地球訪問を仮定する立場
に分かれる。



バハマ海底遺跡

一九六八年バハマ諸島のアンドロス島沖
で発見され"た謎の海底遺跡。""神殿の"
跡とみられるこの遺跡は、縦三〇、横一
一〇メートルの石壇で、島の北部、水深
二メートルの浅瀬に横たわっている。こ
の土台は、ユカタン半島のマヤ遺跡ウシ
ュ"マルにある""亀の神殿""の"礎石によ
く似ているというアンドロス島付近では
このような海底遺跡がすでに十数個見つ
かっているが、その全貌はまだ明らかにな
っていな



ビミニ海底遺跡

一九六八年以来フロリダ沖のビミニ島周
辺で発見され問題になっている海底遺"
跡。その代表的な遺跡は""ビミニ・ロード"
""と呼ばれる"巨石群で、北ビミニのパラ
ダイス・ポイントから『キロほどの海底
に長さ数百メートルの壁面をなして横た
わっている。直方体や多面体の石塊を敷
きつめたこの""巨石舗道""の近くには U
字"形の遺跡や円柱、矢じり形の配石や人
工的に掘られた溝なども確認された。



ピリ・レイス地図

一六世紀、トルコの海軍提督ピリ・レイスの残した謎の古地図。この地図には氷に覆われる以前の南極大陸の海岸線や山が正確に描かれており、また南米の海岸線は八〇〇〇キロ上空から撮った衛星写真と同じ歪みをもっている。原図の製作者や作られた時期、作図法は謎である。



[ロシュベルチエ文字]

ヨーロッパ旧石器時代のマグダレニアン文化期(マドレーヌ期)に属するといわれるロシュベルチエ洞窟の文字。グローゼル遺跡

出土の文字と並んで注目されている。フランスのロシュベルチエ洞窟で見つかった図のような記号は単なる絵か、表意文字かそれともアルファベットか、いろいろとこれまで憶測を呼んできた。が、これらをティフィナグ文字として読むならば、エシヲバシテカカシム(絵師をばして描かしむ)となる(高橋解読)。おそらくこのロシュベルチエ洞窟の年代は、C14年代で一万五〇〇〇年前、歴史年代では一七〇〇年前とみられ、これらの記号は氷河時代の文字とみなすことができる。旧石器時代の洞窟に描かれた壁画のそばに刻まれた文字記号としては、このほかにラスコーの壁画の馬の横に記された、マ(馬)の記号など、注目すべき事例がいくつかある。



ラスコーの壁画



ロシュベルチエ洞窟から発見された文字

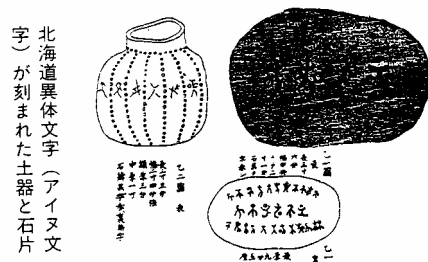
ロシュベルチエ洞窟から発見された文字

[倭人が残した未解読文字]

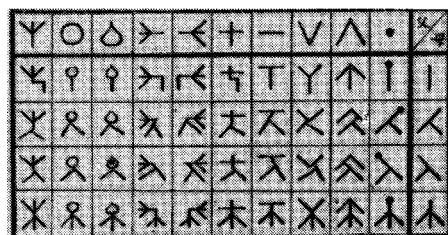
太平洋の各地には、イースター島の文字とよく似た文字がいくつも残されている。イースター島の文字板に刻まれたロンゴ・ロンゴ文字がインダス文字や中国の

甲骨文字のいくつかと似ていることは、ハンガリーの言語学者ヘヴェシやオーストリアの考古学者ハイネ・ゲルデルンの研究によって広く知れわたっているし、揚子江やインダス河の流域以外にも、これとよく似た文字がたくさんあることは比較的よく知られている。今世紀の初めに太平洋各地の言語を精力的に調べた J・F・スティムソンは、早くからイースター島の文字と同じものがタヒチの南のオーストラル諸島(ライヴアヴアエ島、ツプアイ島、ラパ・イティ島)にあると報告しているが、ドイツの言語学者トマス・バルテルも、このような文字がタヒチ諸島(ラパテア島)とその北東のマルケサス諸島にあることを確認している。また、イギリスの民族学者マクミラン・ブラウンは、太平洋のカロリン諸島(ウォレアイ島)でイースター島文字とよく似た文字を発見し、フランスの民族学者アルフレッド・メトローも太平洋東部のパナマ地域に住むクナ・インディアンが文字がロンゴ・ロンゴ文字やインダス文字にきわめて近いことを発見している。ロシアの言語学者クノロゾフやイタリアの考古学者ガブリエル・マンデルは、ロンゴ・ロンゴ文字とシベリア、蒙古地方のクーク・ツルキー文字がインダス文字を介してつながりをもっていることに注目している。ハワイ諸島に行けば、イースター島の文字とよく似た文字を確かめることができるし、アメリカ大陸の西海岸や太平洋のその他の島を調べれば、まだまだ報告されていない文字を発見するチャンスはたくさん残されている。これまで日本では漢字以前に文字はなかったとか、アイヌは文字をもたなかった、縄文時代に文字はなかったなどと、よくよく調べもし

ないで権威をふりかざす門外漢が幅をきかせていたため、この方面の研究は確かに外国に比べて遅れている。けれども、図 1 を見ていただければわかる通り、古代日本のアイヌ文字はイースター島のロンゴ・ロンゴ文字やインダス文字とよく似ている。この文字は明治初年に東京大学の坪井正五郎博士が『北海道異体文字』として東京人類学会誌第十八に紹介したもので、当時の逓通大臣・榎本武揚も千年以上前のものと鑑定した古い獣皮に金字で記されている。いっしょに出土した石片が六角柱であったところから判断すると、同じような六角柱をアッシリアが使っていた紀元前七〇〇年ころまでさかのぼる貴重な資料である。このようなアイヌ文字資料は、北海道だけでなく、北陸や九州でも見つかっており、戦国時代の中国各地の貨幣にも使われている。一九七五年ころ中国江西省青江県の呉城遺跡から出土した土器の文字や、漢字の発明者・蒼額の書と伝えられる西安郊外の碑文にもア

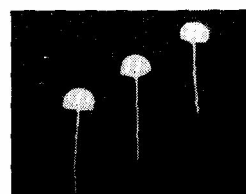
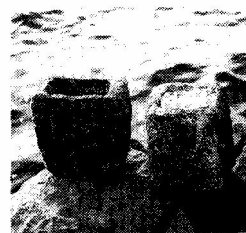


北海道異体文字(アイヌ文字)が刻まれた土器と石片



北海道異体文字 50 音図

いまだ解読されていないイヌ文字が使われている。もしもアイヌ文字の読み方がわかるなら、日本人がロンゴ・ロンゴ文字やインダス文字を解読したり、太平洋各地の同様の碑文の意味を一挙に明らかにするチャンスは残されているのである。はたして日本人にそんなことができるだろうか？ 私たちは日本人なら誰でも、アイヌ文字を勉強すればそれが可能だと思っている。欧米人に自分たちの祖先の文字(インドヨーロッパ語族の古代文字)が読めるなら、日本人にも太平洋各地に広がった祖先の文字を読めないはずはない。アイヌ文字の読み方が現在まで伝わっているとすれば、その可能性はなおさらのことである。図2に示したアイヌ文字の読み方を参考にすれば、読者にも何らかの文字は読めると思う。いずれにせよ、太平洋とその周辺にこれだけ多くの似た文字があることは、それぞれの民族がお互いに何の関係もなく文字を発明した結果とはみなせない。アルゼンチンの言語学者ホセ・イムベロニは、このような事実をふまえて、この地域にはインダス河流域とセイロン島、中国南部、インドネシア、ウォレアイ島、イースター島を環とするインド目太平洋線文字システムがあったと考えた。ここに日本のアイヌ文字をはじめとするさらに多くの文字群をつけ加えるなら、紀元前のいつの時代か、太平洋をとりまく広い地域に統一的な海洋文明(原日本文明)があったことは事実といえるだろう



チチカカ湖から探検協会が引き上げた石箱と黄金製の
ヘアピン(佐藤進一撮影)

大空の彼方より流星群のように落下し
巨大な火の玉となって炸裂する弾丸が発射されると
突如、あたりは深い闇に包まれてしまった-----

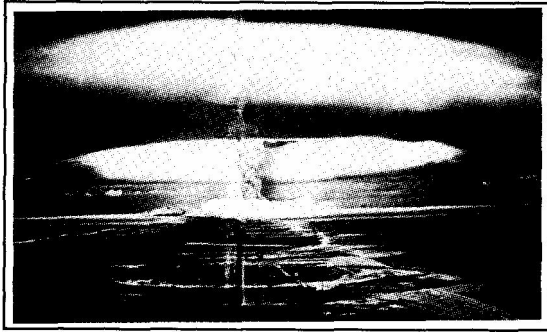
恐るべき竜巻がにわかになり
黒雲が耳をつんざく音をたてて
空高くあがる
この武器によって
太陽さえも輝きを失い、
宇宙全体があつくなった…

—『マハーバーラタ』

第4章

古代核戦争と謎の 地下都市

高橋良典の仮説 1



ムルロア環礁の水爆実験でできた巨大なキノコ雲

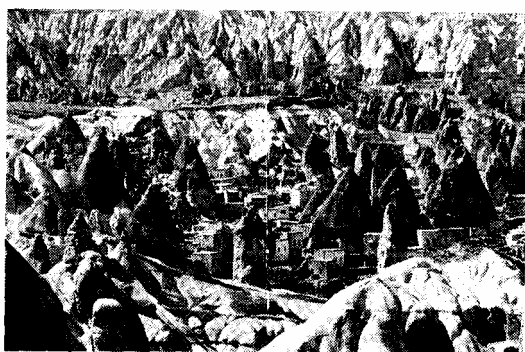
紀元前の高度な文明は、今からおよそ二八〇〇年前に発生した核戦争とそれに伴う異変で滅び去った、という壮大な仮説がある。この仮説は、チャーチワードが唱えたムー文明の滅亡原因を明らかにしてくれるだけでなく、アトランティス人と戦った地中海の謎の民族の正体をもうまく説明してくれる。世界各地のミステリー遺跡や遺物、不可解な伝説群を総合してみると、従来の歴史家たちが消し去ってきたムー王国の住民カラ族の栄光の物語がよみがえってくるというのだ。

証拠 1

地球が誕生してから考えられないほど長い時間がすぎた。人類の存在などそれにくらべればほんの一瞬にすぎない。しかし、その一瞬の時間の中で起きたことが、どうしてもわからないのだ。そして、地球には数知れないほどの謎が残されたままになっている。ここに取りだしたものは、ひとつの仮説(高橋良典の古代核戦争地球大異変説)を証明する、さまざまな謎である。これらの謎が解き明かされた"とき、""古代に核戦争があった""とい"う仮説が証明されるのだ。しかし、それはたやすいことではない。ひとつひとつの謎が、複雑にからみあい、あるものはさらに新たな謎を追加する。こうした謎の追跡は、だが、まったく思いもかけない結論を生むかもしれないのだ。常識をはるかに超えた、驚異の結論を-----。

秘境にひろがる荒 れ狂った大地

トルコの首都アンカラの南東にあるアナトリア高原中部に、二〇〇キロ平方にもわたる広大な荒地がある。いまも“世界屈指くっしの秘境”とされているカッパドキア地方だ。一年の半分以上は日照りが続き、



トルコのアナトリア高原にあるカッパドキア

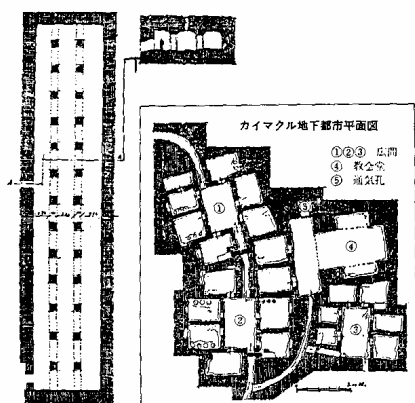
緑ひとつない裸の土地が露出している。見渡すかぎり岩山と荒地が続く風景は、まさに地の果てとっていい。そのあたりの小高い丘に登ってみると、さらに圧倒的な荒漠こうばくさが見る者の心をつかむ。地表を大きく裂き、深く白い谷がある。その向こうには鋭くとがった三角の岩が林立するかと思えば、古代の巨石文明を思わせる壮大な岩山が散らばる。そしてその背後には、数キロメートルにも及ぶ長い断層。それは幻想的でさえある光景なのだ。だから、見る者の心は、このカッパドキアが創生されたその瞬間を夢想する。そのとき、あたりはもうもうたる炎やガスに包まれ、天と地の境もなかったに違いない。大爆発にしゃくねつようがん岩は灼熱の溶岩流となり、飛び散り、溶け、激動し、叫び続ける……。とにかく、とてつもなく巨大なエネルギーが、この大地に荒れ狂ったことだけは実感できるのだ。この秘境カッパドキアは、一部の人にはその名をよく知られている。この荒地の内部には町らしい町はほとんどないのだ

が、そのかわり無数とっていいほどのキリスト教洞窟修道院がある。岩山や断崖に掘られたその修道院は、ほとんど廃墟になっているが、その一部にはたくさん宗教壁画が描かれており、そのためキリスト教美術の宝庫とされているからだ。この魂をゆさぶるような荒野にキリスト教の修道士たちが入りこんだのは、三世紀の初めごろだとされている。彼らがなぜ、この不毛の荒野で神に祈らなければならなかったのか、それもひとつの問題だ。だが、いまここで取りあげたいのは、その洞窟修道院のさらに地下深くひろがっている、とてつもなく大きな穴ぐらのことである。

数十万人が住める巨大地下都市があった

それはイエラルトゥ・シェヒル(地下都市)と呼ばれる。地元の村人たちには古くから知られていたらしいが、そのうわさが政府に伝わり、トルコの考古学者が初めて調査したのは、一九六五年五月のことである。そして彼らが発見したのは、まさに地下都市と呼ぶのにふさわしい機能を備えた、巨大な地下遺跡だったのだ。トルコ政府の報告書はこう伝えている。「地下都市は、人間がそこで快適な生活を営むのに必要な機能を完全に備えていた。まず、最重要な通気孔(エアコンディショナー)が、地表から一五〇メートル以上もの深さまで、都市の中心部を貫いている。その都市は確められただけでも、地下八階建ての構造があり、各階層は階段や傾斜した通路でつながれている。通

路と部屋の境目のところどころには、輪状の石扉が備えつけられていた。井戸もあった。共同炊事場もあった。炊事場には汚水おすい処理の溝と、煙を通気孔に導くベンチレーションが備えてある。寝室、仕事場、大広場があり、三条に分れた堂々たる地下歩道があった。」そして、カイマクルと呼ばれるようになったこの地下都市の推定収容人口は、なんと一万五〇〇〇人だという。いま、世界のどこにこれだけの人々が、日常と変わりのない生活を送れる地下都市があるだろうか。



しかも、こうした地下都市は一か所だけではない。一九六五年の調査で発見、確認されたのが、ほかにデリンクユ地下都市(収容人口六〇〇〇人)、ギョズテジン地下都市の二つ。その後、さらに収容人口がなんと六万人というオズコナーク地下都市が発見され、マヴルージャンという所にも地下都市が存在することが、最近明らかになった。その事実だけでも驚くべきことだが、このカッパドキアには、大小とりまぜてもっと多くのアンダーグラウンド・シティがあるらしいのだ。

戦争に備えた地下都市の疑問

それについてはいっさいが謎に包まれている。というのは、この地下都市群があまりに巨大すぎて、ほとんど調査ができていないからだ。地下八階まで確認されているカイマタル地下都市にしても、土砂が完全に除去されて見学可能なのは、上の数層にすぎない。そしてそこからは、ほとんど何の生活用具も出土していないのである。そこで、この地下都市群を研究している人たちは、地上にある洞窟修道院と関係づけて考えている。四世紀末、キリスト教はローマ帝国の国教となり、カッパドキアは東ローマ帝国に組み入れられた。そして六世紀になると、ササン朝ペルシアが東ローマ帝国をおびやかしはじめたため、両国の国境に近いカッパドキアは戦乱の場と化した。さらに七世紀になると、ペルシアにかわったアラブの回教軍がカッパドキアを襲う。修道士たちはこうした攻撃を防ぐために、地下都市を築いたのだ……。これが現在考えられている一応の解釈なのである。その根拠のひとつとして、この地下都市が、「ある一定」の期間だけ使用された臨時の都市"だったと推定できる調査結果がある。しかし、古代から現代までの戦争の歴史で、地下都市にたてこもって侵略者に対抗したという国や民族があったらうか。中国は匈奴きょうとに対抗するため万里の長城を築いた。日本の歴史でも戦争のために築かれたのは、城や砦とりである。とはいっても、カッパドキアの地

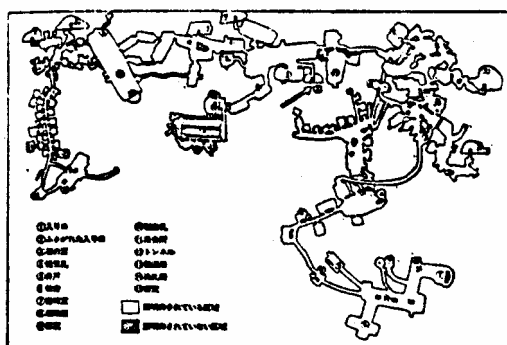
下都市が、戦争に備えたものであったことは明らかだ。というのは、地下にたてこもって行き来できるように、デリンクユ地下都市と隣のカイマクル地下都市は、秘密の地下道で結ばれていたからだ。この二つの地下都市は九キロも離れている。当然、発見されたトンネルも九キロの長さを持っている。この距離は日本の丹那トンネルよりも長く、清水トンネルの長さに匹敵するのだ。地上に回教徒軍が攻めてきたとき、洞窟に隠れるくらいならまだしも、一〇万を超える人間が地下一五〇メートルの奥まで逃げなければならない戦争とは、いったいどういう戦争だったのだろうか。ひとつの地下都市がやられたら、九キロもの地下道 p をくぐりぬけて別の都市へ移らなければならない戦争とは、いったい何だったのか。さらに不思議なことがある。一〇〇メートルや二〇〇メートルの距離ならともかく、九〇〇〇メートルもの長さの地下道を掘って、二つの都市を正確に連絡できるような技術を、六～八世紀の人々がほんとうに持っていたのだろうか、ということだ。二十世紀に行なわれた丹那トンネルの掘削くさくでさえ、国家的な大事業だったのだ。今から一二〇〇～一四〇〇年も前のこと、それは想像を絶する大土木工事だったはずである。また、カッパドキアの荒れた地上風景を見るかぎり、この地方が六～八世紀当時、一〇万人以上もの人間が生きていけるほど豊かだったとはとても考えられない。まして戦争に備えて地下生活をする以上、かなりの食料や生活必需品を貯えておく必要があるが、キリスト教徒たちはそれをどこから手に入れたのだろうか。それともこのカッパドキアは、かつてそんなに多くの

人間を養えるほど豊かな土地だったのだろうか。そして、騎馬のアラブ軍団と弓矢を武器としたキリスト教徒との闘いが、豊かな緑野をこんな草木もはえない不毛の岩山に変えてしまうほど激烈なものだった、と!こうした疑問は、はたして解決できるのだろうか。合理的な説明はつけられるのだろうか。

核戦争が地下都市を襲った

その問いに答えるのは、非常にむずかしい。しかし、まず大胆な仮説をあげて、それについてさまざまな検討を加えてみたい。その過程でカッパドキアの秘密は、明らかにされるはずだ。さて、その仮説とは次のようなものである。《カッパドキア地下遺跡は、昔、核戦争で滅んだ都市の跡だ》もちろん、現在の歴史の常識では、想像もできないような飛躍である。"しかし、カッパドキアの秘密は、"古代核戦争"を仮定すると、すべてに"合理的な説明がつけられるのだ。決して単なる空想ではない。その仮定には数多くの裏づけがあり、それらのひとつひとつを組み立てると、まさに恐ろしい大破壊"核戦争が、このカッ。ハドキアを襲ったことがわかるだろう。まず、人間が戦争に備えて地下深くもぐるのは、どんな場合かを考えてみよう。七世紀のアラブ軍団のような侵略者に対してだったら、人間はこんな馬鹿なことはしないはずだ。なぜなら、侵略者は少数の兵力で洞窟の入口を占領すれば、勝利をおさめられるからだ。入口をおさえれば、中に閉じこめられた人間はいずれ餓死してしまう!また、飛行機による火薬爆弾類の爆撃なら、第二次

世界大戦をふりかえってみればわかるように、ちよっがんじようと頑丈な地下室で十分防げるのだ。とすると、地下一五〇メートルの地下都市が備えるのは、核兵器による攻撃以外にはありえない。"広島と長崎が、人類で初めて""と"いわれる核兵器攻撃の洗礼を受けてから半世紀。核兵器は今やインド、中国といった発展途上国にまで拡散した。と同時に、世界の国々は核戦争に備えて、軍事基地や貯蔵施設、研究所、工場などを続々と地下に移すようになってきている。一時的には十万人以上の人間を収容できる地下都市も、世界各地につくられているほどだ。



デリンクユ地下都市の平面図

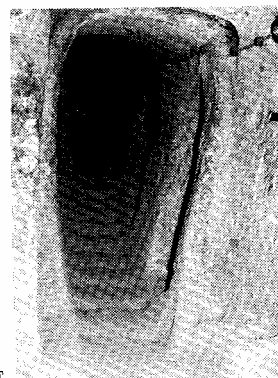
デリンクユ地下都市の平面図

たとえばモスクワや北京の地下には、網の目のようにトンネルが掘られている。ワシントンの地下には、核戦争のとき避難してきた人々を、一定期間養えるだけの必要物資が貯えられている。ノルウェーは、軍港まで地下に移してしまった。そして、外国の一般市民は、個人用核シェルターをつくることに必死になっている。平和の国スイスに放射能汚染に備えた地下避難所が、数多くつくられていることは有名な事実だし、イギリスでは政府が核シェルターづくりを奨励している。アメリカの核シェルター・

メーカーは成長産業だ。



ロンドンのシェルター図



カймаクルの迷宮

このように核攻撃に備えた現代の地下都市と、カッパドキアの地下都市と、どこに違いがあるだろう。むしろあまりの類似に驚くばかりだ。

証拠Ⅱ 数百万度の熱でできたガラス層

人類が核兵器を初めて手にしたのは、一九四五年のことである。とすれば、それ以前、はるかな昔に築かれたカッパドキア地下都市が、核戦争に備えたものである、というようなことが考えられるだろうか。しかし、ここに驚くべき事実がある。この地球のあちこちでは、いつとは知れぬ遠い昔に、核爆発があったという証拠が、次々に発見されているのだ。一九五二年にイスラエルで発掘作業にあっていた考古学者たちが、五メートルあまりの深さの地層から、厚さが約六ミリで二〜三〇〇メートル四方に広がっている、溶解した緑色のガラス層を掘り出した。それは石英の砂の層が、その部分だけ溶けて変色したものだ。このような砂のガラス化現象が起こるには、きわめて高い温度が必要だ。火山活動や通常

の爆発、火事などではこんな現象は生じない。それには数百万度の数…が必要だが、地球上でそれだけの熱が得られるのは、熱核反応しかないのである。そして、アメリカの考古学者たちは、それと似たガラス状物質をかつて見たことがあった。ニュー・メキシコ州の核実験の跡で!一九七三年にはイラク南部の砂漠で、同じようなガラス層が見つかった。この層はバビロニアやシュメ;ルなどの遺跡のかなり下に薄くひろがっていた。その南のアラビア南部の砂漠には、ハラスと呼ばれる強烈な放射能を受けたことを示している、黒く焼けこげた石の原っぱが二八か所ある。また、油田の調査をしていたフランス人の技師は、サハラ砂漠南部で緑色のガラス層のひろがりを見つけ、その溶解した珪土けいどが、「ホワイト・サンズ(アメリカの原爆実験場)のものと似ている」と報告している。モンゴルのゴビ砂漠でも、焼けてガラス状になった地層が発見されている。核爆発の証拠は、こうした不毛の砂漠(この砂漠自体、重要な問題を示している)だけでなく、世界各地の遺跡にも見られるのだ。

高熱破壊の遺跡は何を語るのか

ブラジルのピアウイ州に、セテ・シダデス(七つの都)と呼ばれる遺跡群がある。なかでも最大のものは、長さが約一・六キロもある都市だが、その中心にある大きな建築物の遺跡をのせた岩は、その南面が溶けてガラス状になっており、赤い金属が溶解して岩壁に涙のしずくのようにこびりついていた。探検家の一入はこう報告している。「あ

そこで発見されたいくつもの都市の遺跡は、規模として最大のものだと思われるが、一部は焼けつきでガラス状になっているし、溶解した石やクレーターだらけだった。無気味な裂け目が入った石の舗道や家があるかと思えば、岩がたぎってできた親指ほどの泡もある。それは、まるで巨人の火かき棒で襲われた跡のようだ!」さらに新大陸では、似たような遺跡がほかにもある。ペルーのタスコからそう遠くないところには、約一・六キロ四方にわたって山の岩が溶解し、結晶化している地域があり、城塞とおぼしき建造物の花崗岩かこうがんブロックは、高い放射熱によってガラス化している。このようにガラス化した遺跡は、北アメリカの南カリフォルニア地方、アリゾナ州、コロラド州でも見つかっている。もちろん、旧世界にも核爆発の影響を受けた遺跡がある。アイルランドのダンレアレとエニスの城塞の壁には、花崗岩が溶けてしまうほどのすごい高熱の跡が残っている。また、古代ギリシアの地理学者であるストラボンが、その著書『地理』に、""死海の地域には、原因不明の火によってとけた岩がある"と書いている。場所がカッパドキアに近づいてきたが、もう二つだけ証拠をあげておこう。ごく最近、小アジアのハットウサの遺跡が発掘された。すると、ここではレンガ積みの家が溶けて、赤いかたまりになっていたのだ。かつてこの町は、想像を絶する高温によって破壊されたのである。また、古代バビロンの地域には、"何人かの学者が""これがバベルの塔""の名残りだ""と主張している、高さ"四六メートルの塔の廃墟が

ある。ここにもまた、人工的に作りだされた高温破壊の跡が残っている。これについて学者の一人は、「数万のレンガを赤く熱しただけでなく、これを溶かし、塔の骨組全体と粘土壁全部を焼きこがしている。こんな高熱はどこから生まれたのだろうか。説明がどうしてもつかない……」と話している。有史以前、文明が栄えた中近東やアジアのみならず、ヨーロッパの辺境アイスランドや南北アメリカにまで、核爆発としか思えないようなすさまじい破壊の跡が散らばっているのだ。このことは、いつとは知れぬ古代、全地球的規模での核戦争があったことを物語るのではないだろうか。ひとつの都市、ひとつの地域ではなく、当時の文明すべてを滅ぼすような、そんな大規模な戦争があった。しかも核という最終兵器を使って……。

伝説の兵器は現代の核ミサイルか？

こうした大破壊があったとしたら、それはなんらかの形で後世に伝えられて必ず人類の記憶として存在するはずである。それを示す文献はないものだろうか。それがあつた。インドの古代サンスクリット語文献の中で、最も有名な『マハーバーラタ』は、さながら核戦争についての教科書のような文献だ。この文献は二五〇〇年前から現在の形で存在していた二〇万行からなる叙事詩だが、古代では考えられないような超兵器のようすを、くわしく伝えているのである。ヴィマナ(鉄でできた胴体に翼がついている空の戦車)に落ちつきはらって陣どっていた英雄アドワツタンは、水面に降りたち、神々

すら抵抗しがたいアグネア兵器を発射した。並みはずれた殺傷力を持ち、煙をともなわぬ火を放つ鉄の矢は、束になって敵を包みこんだ。流星が光を放って空から落ちた。たちまちのうちに敵の軍勢の上空は、濃い闇におおわれた。天も地もわからなくなった。強烈な風が吹きはじめ、不幸をもたらすたつまきが生じた。黒雲がとどろき、空高く登っていった。チリや砂が突然降ってきた。太陽でさえ目をまわして、ゆれ動いているようだった。地球はこの兵器の恐ろしいまでに激しい熱にゆれ、焼けこげた。広大な地域で、動物たちが大地にくずれ落ちて死んだ。水は蒸発して、その中の生物たちは死にたえた。あらゆる角度から炎の矢が絶えることなく激しく降りそそぎ、敵の戦士たちは猛火に焼かれた木立こだちのように倒れた。何千もの戦車が横転した。これはまさに核弾頭を備えた対地ミサイルの爆発ではないか。そして兵士たちも、この兵器の性質を知っていた。というのは、助かった少数の兵士たちは、まだ戦闘が終わっていないのに、大急ぎで近くの川にいき、自分たちの衣服や武器を洗って"いるのだ。""死の灰""による放射能障"害を防ぐための行動によく似ているではないか。『マハーバーラタ』が伝えるのは、核ミサイルだけではない。核爆弾による都市攻撃をも報告している。高速のヴィマナで飛んでいたグルカは、三つの都市に向けて、宇宙のすべての力を秘めている弾丸を投下した。太陽が一万個集まったほど明るい、煙と火がからみあった光り輝く柱がそそりたつた。ヴリシュニとアンダーカの全住民が灰と化した。

死体はひどく焼けていて、見わけがつかなかった。髪の毛やツメは抜け落ちていた。まるでだれかが、広島や長崎のあの日を見て書いたような文章ではないか!米国人・アラモスの最初の原子の火を見たジャーナリストは、"一〇〇〇個の太陽より明るかった"と報告したが、この爆発の様子、立ち上る煙と火の柱、犠牲者の姿、放射能による汚染の影響……などの記述は、核兵器以外のものを考えさせない。そして、インドにはこの『マハーバーラタ』を裏づけるような証拠がある。『マハーバーラタ』は、核戦争のあった場所をガンジス川上流だとしているが、まさにその地方に、焼けこげた無数の遺跡があり、岩石が"溶けてできたかたまりは、"溶解した"鋼鉄がすず鋼の中を貫流したかのように"中空になっている。"また、ずっと南のデカン高原にも、建物の中の調度品すらガラス状になっている高熱廃墟がある。そしてこの地方では、普通のものの五〇倍の放射能を持った人間のガイ骨が発見されているのだ。こうした古代の核戦争の存在を伝える文献や伝説はほかにもある。同じインドの古文書『ドロナ・バルバ』は、五十万人をまたたく間に壊滅させた"カピラの閃光せんこう"について記述している。中国にも古代核戦争を伝える文書がある。シベリアやカナダの原住民"のあいだには、"金の貝がら"に乗っ"て空を飛び、"輝く光の矢"で都市を"破壊しつくした戦士の話が伝わっているのだ。こうした古文書の記述を、すべて古代人の空想とみることも可能だ。事実、核兵器が開発される前は、おとぎ話として放置されていたのである。しかし、核兵器の実態が知られるにつれ、古文書の研究者たちは、こうした

記述の再検討を迫られ、そこに新たな意味を見つけだしつつあるのだ。

アルタミラ

スペイン北部にある有名な先史洞窟。一八七九年、一少女によって偶然発見されたこの洞窟の内部には見事な牛の絵が描かれている。最近はこの洞窟に先史の宇宙船らしき各種の円盤模様が描かれてしるということで、新たな注目を集めている。



ヴァル・カモニカ

イタリアのミラノ北東百キロの地にある峡谷。この谷の岩に彫られた線刻画は、先史時代からローマ初期のものまで[万五〇〇〇点を越え、中にはヘルメットをかぶった宇宙人が向かいあって戦う場面を描いたとされる不思議な絵がいくつもある。カモニカ漢谷の一带は、紀元前八世紀の戦争と大異変の時代に、アジアのトロイから亡命した原日本人カラ族の一派、カムナ族に移り住んだ地域とみられ、日本の神宇(カムナ)とそっくりの刻文が残されている点で注目される。



[エジプトの地下都市]

世界各地に存在する地下都市や地下トンネル網は、転漉や神話の中で、迷由員黄泉の国、地下の樂園、または地獄として描かれている。ギリシア神話の英雄イアソンに率いられたアルゴ号の乗組員たちは魔女メデアの住む黒海沿岸の地底王国コルキスを訪ね、龍の車(宇宙母船)と黄金の羊の皮ごろも(宇宙服)を手に入れたといわれたり、エジプトのファラオは女神アメンティの住む地下の樂園を訪ね、そこにある宇宙基地チュアト(星に向かうところ)からかホルスの眼と呼ばれる宇宙船に乗って星の彼方に飛んだといわれる。これまでエジプト神話のオシリスの国、暗黒の地下世界は空想的なものと考えられ、何ら実体がないとみなされてきた。が、探検協会ではオシリス神話の世界が太古のエジプトに実際にあった地下都市の記憶をとどめるものと考えている。最近エジプトのピラミッドで新たに謎の地下室が発見されたところから、伝説的なピラミッド回廊の存在が再び注目されている。サッカラの階段状ピラミッドの下に、強い放射能を含む塵ちりに満たされたトンネル網があることを知っている人は、王家の谷の性格を従来とは異なった視点からとらえなおしているかも知れない。おそらく古代エジプトの信仰を今もとどめるコ

プト派の人々の中には、エジプトからスーダン、エチオピアにかけて実在した太古の地下都市の記憶を伝えている人もいるにちがいない。探検協会では、ナイルの源流地帯に今なお太古の遺産を秘めた地下都市があることを固く信じており、いつの日か、パピルスに記されたチュアトの存在が明らかになるのではないかと、目下、調査を進めている。



王家の谷

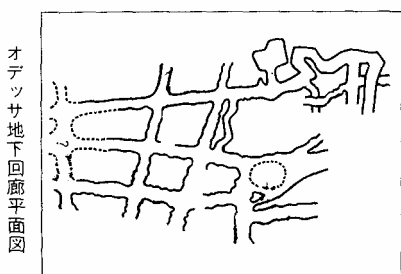
エジプトのテーベ郊外にある王家の谷は、『死海写本』で有名なヨルダンのクムラン洞窟、トルコの Cappadocia 遺跡とともに、考古学上画期的な発見がなされた地として知られる。クムランや Cappadocia そっくりの外観をもつこの地の洞窟群から発見されたツタンカーメンの黄金のマスクや歴代ファラオのミイラ、数々の豪華な遺品と遺構は、昔日のテーベの繁栄をしのばせるに十分である。しかし王家の谷は、古くからファラオの呪いに満ちた死の影が漂う土地でもあった。その呪いは、ツタンカーメン王墓の発掘にたずさわった関係者が次々に謎の死を遂げた時、すべてのエジプト学者をふるえあがらせた。原因は何だったのだろうか？この問題を調査した学者たちはやがて意外な事実を発見した。それは、王家の墓が大量の放射能を含む塵ちりに埋もれて

いたことだ(ゴネイム論文)。この事実は何を物語るものだろうか(同じ地形をしたクムラン地方でも二万人の遺体を収容した地下墓地と放射能が確認されていることは注目される)。



オデッサ回廊

オデッサ・カタコムとして知られるウクライナの地下回廊はロシア有数の第四紀動物化石の産地で、一九二九年、グリツァイによって発見され、現在までロシア科学アカデミーが継続的に調査している。オデッサ市の地下三〇平方キロにわたって図のように張りめぐらされたトンネル網の一部は明らかに人工的なものであり、キエフ市の地下トンネル網やクロマニヨンの地下マンション(収容規模二万人)との関係が注目される。



オデッサ地下回廊平面図

カイマクル

トルコのカップパドキアにある謎の地下都市群のひとつ。人口数万人を収容できる地下八階構造の大遺跡として知られる。中央部のタテ穴の深さは一五〇メートル以上。各階の部屋は傾斜した通路や階段で複雑に結びつけられ、地下八階には三条に分かれた堂々たる回廊もある。八階にうがたれたトンネルは十キロ離れた隣の地下都市デリンクユに通じ、さらにデリンクユから他の地下都市へも伸びている可能性がある



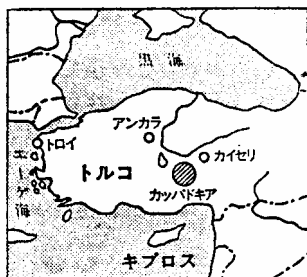
カイマクルの内部

カイマクルの内部

[カップパドキア]

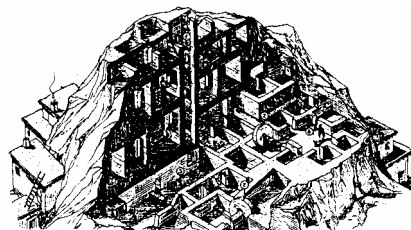
トルコのアナトリア高原中部にある広大な不毛地帯カップパドキアは、ギリシア語のカッポータス(つまりゼウスの異名「落とす者」)に由来する「雷挺の落ちたところ」だ。ウチュヒサルと呼ばれるこの地方の中心にある奇怪な岩山に立つと、周囲数十キロを赤々とした崖に取り囲まれた盆地のいたるところに、異様な形をした尖塔群が林立するさまを見ることができる。尖塔のひとつひとつは数階建ての洞窟で、その内部にほどこされた無数の宗教画と彫刻の存在は、この地を東ローマ帝国時代のキリスト教美術の宝庫と

している。



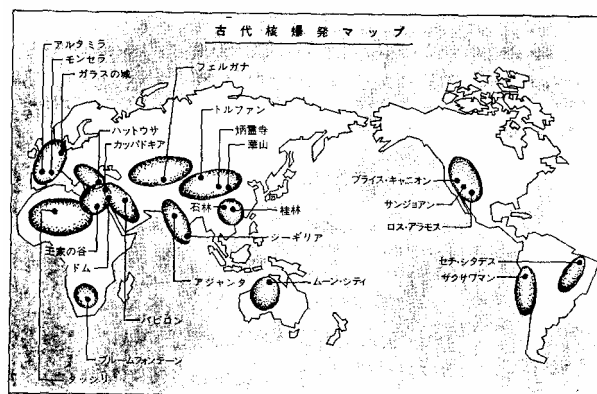
しかしこの地の最大の驚異は、ウチュヒサーールを囲む台地の下に眠る巨大な地下都市群の存在であろう。現在までに調査済みのカイマクル、デリンクユ、ギョズテジン、オズコナークをはじめ、マヴルージャンその他の地に存在するいくつかの地下都市は、すでに確認されたオズコナークだけでも推定収容人口六万人の規模を誇るもので、ここにかつて生活した人々の数は数十万にのぼるとみられる。しかも注目されるのは、これらの地下都市が、デリンクユとカイマクルを結ぶ長さ約十キロの地下トンネルを一例として、かつては相互に結ばれていたとみられることだ。一九六五年にこれらの遺跡を調査し、初めて世界に地下都市の存在を紹介したトルコの考古学者ヒクメット・ギュルチャイとマフムット・アコクの二人は、この巨大な地下施設の建造年代を六～十世紀と推定した。しかしその後の高橋の調査によれば、これらの建造年代は、カイマクル・カレの一部にみられる高熱による風化作用の跡や同地域で検出される高濃度の放射能、アナトリアの巨石文化や王家の谷の成立年代などからみて、少なくとも紀元前八〇〇年ころまでさかのぼるとみられる。カイマクル・カレという地名が「クリーム状の城」、すなわちクリームのように溶けてしまった都市を意味していることは、

これら地下都市の造られた目的と無関係ではなかったろう。



カイマクル地下都市断面図

カイマクル地下都市断面図



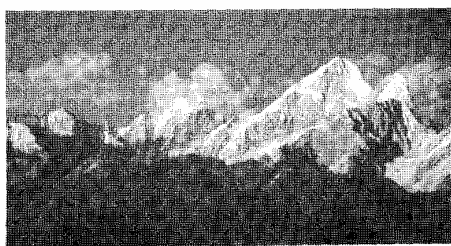
紀元前 8 世紀の核戦争マップ

紀元前 8 世紀の核戦争マップ

[クーガ王国]

チベットの最奥地、ナムナニ峰の麓に広がるアリ高原には、今も謎につつまれたクーガ王国の遺跡がある。海拔四五〇〇メートルを越えるこの地の、異様な山肌を表した比高三〇〇メートルの山頂にクーガ王国の都城はあり、断崖絶壁によって周囲の台地から隔てられたこの王宮へと到る道はただひとつ占厘の麓に口をあけた洞門をくぐって、暗黒の通路を登りつめる以外はない。そしてこの絶壁の急斜面にもまた、無数の洞窟が口を開き、何百という建物が頂上まで連らなっているのである。これらの遺跡は、チベット王朝の末期にランダルマ王によって弾圧

された仏教徒が、ラサ、シガツェからこの地に亡命して建てたクーガ王国の遺産とみられている。しかし、彼らが立てこもったこの王城の設備はあまりにも当時の水準からかけ離れたみごとなトンネル技術の跡を示している。クーガ遺跡と同じ構造をもつ要塞は、インドやセイロン、ブラジル、南アフリカなどに数多く残されているが、それらは本来、どのような技術と意図をもって造られたのだろうかクーガ王国の北西に位置するパミール高原で、ロシアの調査団はすでに巨大なホールと階段、整然とした区画をもつワハンスカヤ地下都市を発見しているが、この地下都市の建設者とクーガ遺跡を残した人々との間には、どんなつながりがあるのだろうかすべては大きな謎にまつまられたままである。



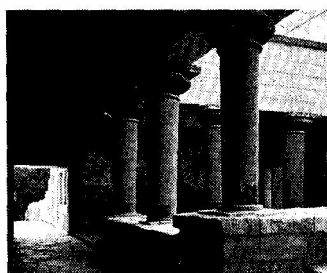
ダーズリンより見たヒマラヤ山脈

ダーズリンより見たヒマラヤ山脈

クレタの迷宮

一九〇〇年、イギリスの A・エヴァンスによって発見された地中海クレタ島のクノッソス宮殿のこと。複雑怪奇な迷路と近代的な設備(水洗便所など)をもつこの四階構造の石造宮殿は、ギリシアの英雄テセウスが退治した牛人ミノタウロス"の住む""クレタの迷宮""として神話に語り伝えられたもので、シュリーマンのトロイ発見に次いで、神話が歴史的真相を含むことを証明した画期的な遺跡である。

紀元前の日本人が建設した?クレタのクノッソス宮殿



紀元前の日本人が建設した?クレタのクノッソス宮殿

[古墳シェルター説]

核爆発にともなう放射能の被害を防ぐには、なんらしやへいかの遮蔽物が必要だ。鉛によるものが効果的であることは知られているが、土や水も効果がある。たとえば、土を一メートルほどの厚さに盛って、よくつき固めた場合、放射線は地上の五〇分の一に減ってしまう。核攻撃のときに、このような盛り土を固めた""古墳""内部の石室、石棺、木棺の中にしばらく(四~五日間)避難すれば、一次放射線を浴びて死んだり、重い放射線病にかからないですむだろう。このように、""古墳""はもともと死者を埋葬する施設というよりは、緊急避難用の簡易シェルターとしてつくられたのではないか。たまたまこのシェルターで生き残った人々が、新たな文明再建の中心になったため、子孫が彼らを祭る場所とし"て崇拝した。これが""古墳""造営の始まりとも考えられる。

[サハラ砂漠の謎]

地球上最大の砂漠サハラには、かつてアルビエンヌ海と呼ばれる広大な湖があった。有名なタッシリ遺跡"やセファールの""七つの都市""を含む、""炎の島""ハガ"ールのまわりに広がるこの美しい湖は、伝説によれば、太陽神ヘリオスの子パエ

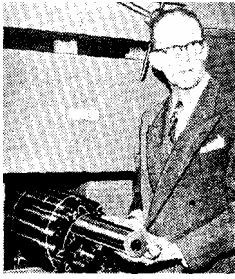
トーンの操作する車が誤って地上に落ちた時、一瞬のうちに消え去ったといわれる。その原因は何だったのだろうか。古代の歴史家や詩人たちが繰り返しその悲劇をとりあげたパエトーン伝説の真相を解き明かす鍵は、リビアン・ガラスとも呼ばれるテクタイト(ギリシア語のテクトス「溶けた岩」に由来するもの)の成因にある。テクタイトは岩石が最低二五〇〇度の高温で溶けたあと急激に冷えてできたもので、これまで火山生成物ないし隕石であろうと推測されてきた。しかしリビア砂漠のテクタイトが火山生成物であるという証明はなく、隕石説も、テクタイトの成分が砂漠の砂とほぼ同一で地球外起源の成分を含んでいないために無理がある。むしろわれわれは、テクタイトに含まれる放射性同位元素の存在などから、その成因を核爆発の高熱に求めるべきだろう。サハラ砂漠が核爆発によって誕生したとみられる別の根拠としては、エジプト、チュニジア、モロッコにある地下都市や地下回廊、今西探検隊が偶然発見したサハラの玉石(簡易式シェルター)などがある。また最近の人工衛星写真によれば、サハラ砂漠の西には巨大なウラン埋蔵地があることも確かめられている。この地に近いオクロで「天然原子炉」の跡が発見されていることは何を物語るのだろうか。



古代核戦争で風化したサハラの岩山

年代測定には”上の地層は下の地層より新しい”というぐあいに時間の前後関係だけを示す「相対年代」と、“今から何年前”というように年数で示す「絶対年代」とがある。この二つのうち絶対年代は、古代史研究には欠かせないものだ。よく聞かれる「放射年代測定」もこの絶対年代を出すためのものだが、その中のひとつに「放射性炭素法」(C14法)がある。これは現在の大気中のC14量を一〇〇とした時、ある遺物のC14量が五〇であれば、C14量が五〇パーセントに半減する期間五七三〇年をもとに、その遺物は五七三〇年前のもの、と測定する方法だ。放射性元素の崩壊速度は、まわりの温度や圧力などに左右されず、規則正しく進行するので、このC14法なども比較的正確な絶対年代を測るものと思われてきた。ところが、高橋良典は、この測定法には落とし穴があるという。仮に今から五七三〇年前の大気中のC14量が五〇しかなかったとすれば、遺物に含まれるC14量は二五になっているはず。にもかかわらず今までの方法だと、一〇〇のものが五〇になるのに五七三〇年、さらに二五になるまでの五七三〇年を加えて、一万一四六〇年という年代を出してしまう、というのだ。そして地球上のC14量は変化している、という最近の研究成果を考え合わせると、このC14年代は再検討する必要がある、と指摘するのだ。もしこの指摘どおりなら、現在知られている古代地球の歴史は、大きく書きかえられることにもなるのだが、はたしてその真相は？

[C14 年代測定法]



シカゴ大学のリビー博士が開発した C14 年代測定法には問題がある

[シルダリア地下回廊]

ロシアには、昔から豊富な地底王国の伝説がある。カザフ共和国のシルダリア地下回廊にまつわる話もそのひとつだ。四世紀の終わり頃、フン族に侵略された中央アジアの遊牧民族サルマートの言い伝えによれば、彼らは征服者の迫害を恐れて"秘密"の地下道"づたいに""シャンバラ""へ逃がれたといわ"れる。カザフ共和国の歴史家ドスジャノフは、この伝説の真偽を確かめるため長年中央アジアの伝説と洞窟調査を続けてきた。そして彼は、遂に伝説のトンネルとみられるものをシルダリア川の上流に位置するタシケントの郊外で発見した。高さ約二メートルのこのトンネルは、支柱を使わなくても安全な堅い岩盤に高度な技術を駆使してつくられたもので、約二〇メートルことに地上部に達する通気孔が天井に設けられているという。彼の発見したトンネルが、昔からこの一帯にあると噂"されてきた""シャンバラ国""の地下回廊の一部をなすものかどうか不明であるが、シルダリアの流域にはこのほかにもいくつかの人工トンネルがあり、それらは、十九世紀の初めに

チベット文献を調査したハンガリーの探検家ケーロスが明らかにしたシャンバラ(クジルオルダの北東・北緯四五~五〇度一帯)の地下都市につながるものとみられる。シルダリアが流れるツラン低地とアラル海の周辺は、地下都市研究が盛んな地域のひとつで、無数の地下川がその下を流れるウスチウルト砂漠の表面に、ナスカの地上絵をはるかに上回る規模の巨大な地上絵が数多く残されていることは、地上絵と地下都市の秘められたつながりを物語っている(ナスカ台地の下にも推定延長数百キロに及ぶ地下トンネルの存在が確認されている)。

ロンドンのシェルター図
カイマクルの迷宮

テクタイト

エジプト、スーダン、リビア三国の国境地帯、ウェイナット山の近くのクレター周辺から、リビアン・ガラスと呼ばれるテクタイト(ギリシア語のテクストケ"溶けた岩"を意味するもの)が見つかっている。これは隕石のカケラとみなされてきたが、地球外起源の成分を含んでいない。逆に、リビア砂漠の砂と化学構造が非常に類似していることが判明している。一般にテクタイトは、岩石が最低二五〇〇度の高熱で溶けたのち、急激に冷えてできたものとされている。このような高温は火山活動でも生じるが、リビア砂漠が火山活動でつくられたという証明はない。むしろテクタイトに放射性同位元素が含まれていることから、これをつくったのは核爆発によるものだと考えることができるのである。

トロイ

ヨーロッパの地図を開くと、ひとつの奇妙な事実に気がつく。「トロイ」という地名が、あちこちに見られるのだ。たとえば、イギリスの「トロイ」は古くから信仰の中心地とされ、そこには迷路状の地下道がある。また地下宮殿で有名なクレタ島には、「トロス」と呼ばれる地下墓地がある。この「トロス」が「トロイ」という言葉に関することは確かだ。さらにヨーロッパを離れると、アフリカのチュニジアには「トログロエーディス」と呼ばれる地下生活者がいる。「トロ」は「トロイ」に関係ある言葉と思われる。こうした「トロイ」に共通するのは、「地下」とか「洞穴」ということだ。つまり大胆に仮説を提起すれば、「トロイ」という言葉は、単に小アジアのトロイをさすのではなく、地下回廊や迷宮などの地下都"市がある場所"を示しているといえるかもしれない。

[パエトーンの落下]

ギリシア神話に描かれた次のような核戦争の記憶。今、地上は高い山々まで炎に包まれ……大都市はその城壁もろともごとく崩れ落ちている/エトナ山は二重の火によって高々と巨大な火柱をあげ、パルナソスの二上山、エリュクス山……カフカス山脈……アルプス山脈の高峰、雲をまとったアペニン山脈まで炎に包まれてしまった/リビアは熱のためその水分をすっかり失い……ナイル河は七つの河口の水がかれて砂漠となり……大地は到るところで裂けた/海は干あがってかつての大海原は不毛の砂漠と化し、深い水におおわれた海底一

の山脈があらわれてキュクラデのごとき島々となった/パエトーンはその髪の毛をちりぢりに焼かれながら、空に大きな弧を描いてまっさかさまに墜ちていった…(オヴィディウス)

バベルの塔

聖書に史上初の権力者ニムロデが築いたと記された塔。イラクのバビロン遺跡にあるジグuratがその遺跡とされる。推定によれば、底辺と高さがそれぞれ九〇メートルの階段状ピラミッド頂上の神殿で宇宙神マルドゥクを迎えたという。この塔跡で不可解な高熱で溶けたレンガが発見されている。



高熱で破壊されたあとを示すバグダットの階段状ピラミッド

高熱で破壊されたあとを示す

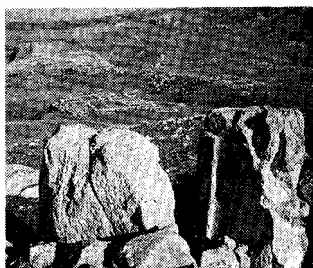
バグダットの階段状ピラミッド

ヒッタイト

トルコのアナトリア高原を中心に栄えた謎の帝国。ヨーロッパからアジアに進出したその民族は一時は西アジア一帯に勢力をふるいエジプトとも戦った。アナトリアに残された首都ハツトゥシャの遺跡

は、随所に巨石を用いたもので、家々のレンガが当時としては想像もつかない高熱で溶けた跡をとどめている。マブレヤ文字に似た鎖綴り文字や前インカに似た絨毯をつくったヒタイト人は、帝国もろとも謎の消滅をとげ、その技術、文化も多くの謎につつまれている。

「ラーマヤナ」の舞台となったキシユキンダーの王城ハットウーシャ



「ラーマヤナ」の舞台となったキシユキンダーの王城ハットウーシャ



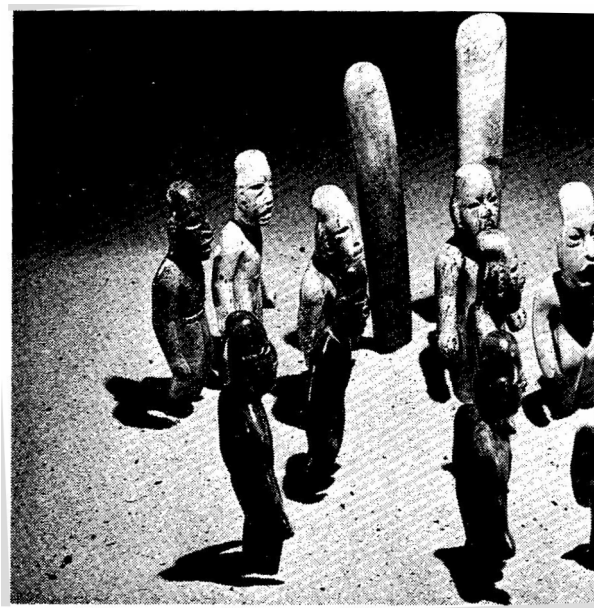
古代核戦争の廃墟から出撃するアトランティスの軍隊

古代核戦争の廃墟から出撃するアトランティスの軍隊 1

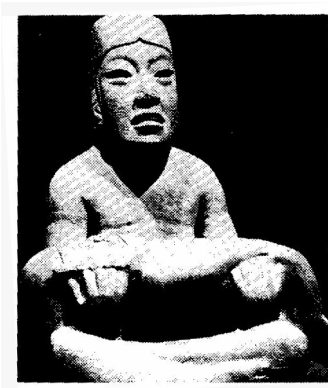
[放射能の後遺症]

核爆発は、人体に直接・間接に悪影響を及ぼす。それは広島・長崎の例でもよくわかるが、古代に全地球的規模の核戦争が行なわれたとすれば、放射能による後遺症の記録が、なんらかの形で残っているはずだ。

この点に関し、地球文化研究所の高橋は、イースター島のモアイ・カヴァカヴァやオルメカ、チャビンの彫刻が、放射能障害としてのケロイドや奇形、甲状腺腫、クレチン病などを表していると言及する。このような土偶や石像、木像は、似たようなものが世界各地で見つまっている。ネアンデルタール人がクル病にかかっていた、というのは有名な話だが、クル病は放射能障害の後遺症とみることもできるのだ。古代核戦争の結果、生き残った者の子孫はその悪影響で退化したことも十分に考えられる。



ケロイドのあとを示すオルメカ遺跡の出土品



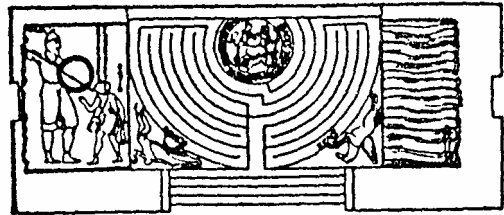


蛙子ひるこをかかえて悲しむ父親(イザナギ)

[ボリショイ・キテジ]

ロシアの民衆の間に今も生き続ける地底王国の伝説の中で、最もよく知られ、親しまれているのがボリショイ・キテジの物語である。ジンギスカンの孫バツアの率いるモンゴル軍の攻撃のさなか、突如、地底に消えたスズダリ公国の都ボリショイ・キテジの話はロシアの作家や詩人、リムスキー・コルサコフのような作曲家が取り上げたおかげで、今なおその存在を信じる人が跡を絶っていない。一二三六年に消えたこの都の住民は、伝説によれば、今も地底でしあわせな生活を送っており、スズダリ公国の故地に近いスベトロヤーリ湖の水面に、ときおり町の姿を映し出すといわれている。実際にこの湖を調べたダイバーたちは、伝説を裏づける証拠を湖底に見つけることはできなかった。しかし、この小さな円い湖を取り巻く周辺の台地には、かつてこの地を訪れた信者たちが掘ったとされる人工の洞窟が無数にあり、内部は何層かの迷路になって、地上に通気孔が残されている。さらにスベトロヤーリ湖一帯を含む、ヴォルガ沿いのマリ族居住地区の到るところに、このような人工洞窟や地下トンネル、地底湖や地下川、あるいは巨大な陥没地がある。

ということは、やはりこの一帯にかつてボリショイ・キテジの伝説を裏づける地下都市が実在したことを物語っているのではないだろうか。



[マハーバーラタ]

インドに伝わる世界最大の叙事詩。バーラタ族の戦争伝説を中心とする全一八巻ニニ万行に及ぶ詩編の起源は、遠く二七〇〇年前まさかのぼで遡る。作者はヴィヤーサと呼ばれるマハーバーラタの勇士と同時代に生きた伝説的聖人。物語の舞台となるのはガンジス河とヤムナ河のメソポタミア両河にはさまれたクルの大平原である。ここでバーラタ王の血を分けあった二組の子孫パーンダヴァとカウラヴァの両派が王位をめぐって対立を深め、遂には最終戦争によって共倒れの悲劇に終わる。全編の筋書きは、ホメロスの伝えるギリシア叙事詩『イーリアス』の構成に通じるものがある。両陣営が決戦に臨んで用いた兵器の数々と戦闘の場面は、この説話が今から二七〇〇年以上も昔の戦争を扱ったとは想像もできないほど現代的であり、ククラヤアグニのような核ミサイルを思わせせんこうるもの、核爆

発の閃光とその後生じる放射能障害を描写したようにみえる記述が“十八日戦争”を扱った六～九巻の随所にあられる点は大いに注目されてよい。また、この叙事詩に登場するクル族(バーラタ族)の英雄が、日本神話の高天原で活躍したわれわれの祖先と一致することも興味深い(徳間書店刊『謎の新撰 姓氏録』参照)。



クル平原の戦い

[ムー王国の地下都市]

紀元前六八七年の最後の異変前に、シュメール語でムーと呼ばれた宇宙船を駆使していたわれわれの祖先は、以下の地域を含む地球上の各地に、大規模な地下都市群とトンネル網を残したとみられる。

クーガ(中国)

ラサ(//)

トルファン(//)

トンホワン(//)

コイリン(//)

ユエヤン(//)

ムスタング(ネパール)

アティス(モンゴル)

コリマ(ソ連)

キテジ(//)

シルダリア(//)

オデッサ(//)

カフカス(//)

アルメニア(//)

カーネーリ(インド)

ジュンナール(//)

ワハンスカヤ(アフガン)

ゴルガン(イラン)

アニ(トルコ)

カッパドキア(//)

サモス(ギリシヤ)

クレタ(//)

ローマ(イタリア)

クマエ(//)

エニヤーツィア(//)

モーディカ(//)

ベツサ(//)

カルパート(チェコ)

プロバン(フランス)

ピレネー(スペイン)

グランカナリア(//)

タンジール(モロッコ)

アハガル(アルジェリア)

マトウマタ(チュニジア)

バールベック(レバノン)

クムラン(ヨルダン)

エルサレム(イスラエル)

ギゼー(エジプト)

ゴンドル(エチオピア)

クライン(南アフリカ)

ワマ(ナイジェリア)

マラニオン(フラジル)

ロンカドル(//)

サンタカタリーナ(//)

ロライマ(//)

アタカマ(チリ)

ラノララク(//)

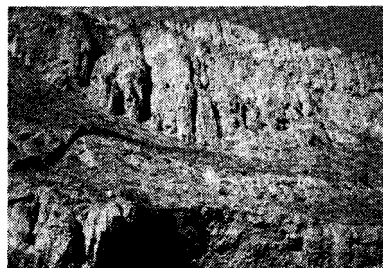
ティアワナコ(ボリビア)

ナスカ(ペルー)
クスコ(〃)
マチュピチュ(〃)
クエンカ(エクアドル)
サンアウグスティン(コロンビア)
テクパン(グアテマラ)
ロルトウン(メキシコ)
アカンバロ(〃)
チョルーラ(〃)その他

[ムスタング]

チベットとネパールの国境地帯に、ムスタングと呼ばれる地方がある。ここにはかつてムスタング王国があり、チベットやネパールの諸王朝から独立した王侯が、長い間勢力をもっていた。フランスの探検家ミシェル・セペールは、一九七〇年代の初期に、ヒマラヤ山中の険しい谷に囲まれたこの地を調査することになり、ロ・バス族の居住地に近い荒涼とした山の絶壁で、みごとな掘削技術の跡を示す二九の人工洞窟群を発見した。これらの洞窟は、絶壁の中ほどに等間隔で口をあけ、中に入ると秘密の通路でつながっていて、奥には広いホールと大小無数の部屋があった。現代の石工も及ばない高度な技術を使ってきれいに仕上げられたこの洞窟遺跡は、明らかに、いつの時代か、大勢の人間が共同生活を営んだ跡にちがいないが、セペールによれば、この地に長く住むロ・バス族も、この遺跡を残した人々については、何も知らなかったこの遺跡に関する情報をマイケル・グラムリーから入手した地球文化研究所の高橋は、一九九二年に現地におもむきジョング河谷の北面斜面にうがたれた無数の人工洞窟を調査した。しかしその後、この遺跡を中国政

府やネパール政府が本格的に調査したという話は聞いていない。ヒマラヤ山脈の国境をめぐる関係諸国の紛争の原因は、案外、これらの洞窟に眠る未知の文明の遺産にかかわりがあるのかも知れない。

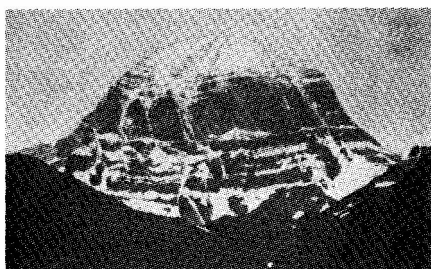


ラーマヤナ

『マハーバーラタ』と並び称されるインドの英雄叙事詩。全七巻。作者は前三世紀の詩人ヴァールミーキと考えられている。物語はヴィシュヌ神の化身ラーマがガンジス河の北にあるコーサラ国王ダシヤラタ王の息子として生まれるところから始まる。首都アヨーディヤの宮廷に育ったラーマはシータと結婚し王位を約束されていたが、継母の陰謀によって森に追放され、そこで魔王ラーヴァナにシータを奪われる。猿王スグリーヴァと同盟を結んだラーマは、ハヌマーンの協力ですータがランカの宮殿にとらわれていることを知り、ラーヴァナとの一大決戦におもむく。ラーヴァナとの壮絶な戦いと勝利の後シータを取り戻したラーマは、シータの純潔を確かめた上でアヨーディヤに凱旋がいせんし、王として迎えられて善政をし。このような内容をもつラーマ物語は一片の美しいロマンだが最近この叙事詩は、"ヴィマナ"と呼ばれる"宇宙船"や"プシュパカ"と"いう不思議な空中

戦車が登場することで注目されている。この叙事詩の中で魔王に仕立て上げられたラーヴァナが美女ヘレネーを誘拐したトロイの英雄パリスとして欧米に知られている太古日本の大王オモタルヒコであったこともさらに注目されてよい(『謎の新撰姓氏録』参照)。

国常立の息子クベーラとシバの都とされたチベットの
カイルス山



国常立の息子クベーラとシバの都とされたチベットの
カイルス山

その昔、地球は大異変に見舞われ、恐るべき洪水が発生して、海と陸の形はすっかり変わってしまった…:

堯・舜の時代に地球全土は戦火に包まれ、禹は洪水の後始末に追われた

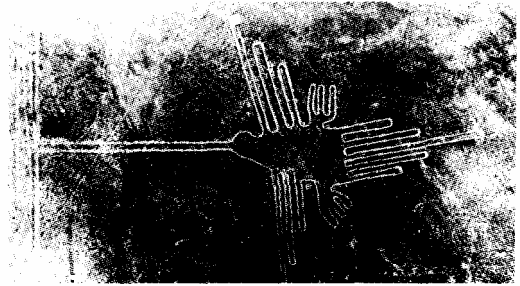
ところが、このような戦争と異変の混乱に乗じて、人身牛首の神を祭る者、蛇身人首の鬼を祭る者が西から東へ次々と来たり、我らの地に住みついた

— 『契丹古伝』

第5章

ムー文明の継承者・東大国と日本

高橋良典の仮説 II



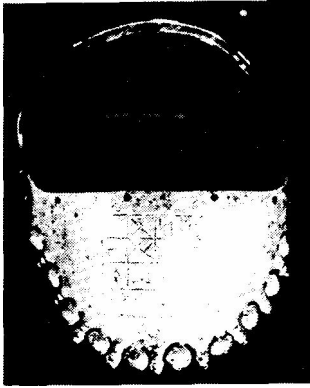
ナスカ平原に描かれた地上絵

ナスカ平原に描かれた地上絵



キンバレー山脈の岩壁に
描かれた古代日本の帝王ラ・ムー

チャーチワードは語る—「今から一万二〇〇〇年以前に栄えたムー大陸の住民カラ族は、イースター島からアメリカに植民してカラ帝国をつくと同時に、インド方面にも植民してナーガ帝国、ウイグル帝国などをつくった」と。彼の説く「ムー文明」がかつて宇宙規模の広がりをもつ「空艇文明」であったことは、のちに概説するとおりだへ第8章参照)。が、はたして、チャーチワードの仮説に登場するカラ族が世界各地にムー文明の都市をつくったというのは、考古学その他の学問から明らかにできる確かな事実なのだろうか。この点に関し、地球文化研究所の高橋は、ムー文明時代のカラ族が世界各地に雄飛していた当時の証拠を求めて、過去二〇年余り調査を進めていくうちに、以下に述べる貴重な手がかりをつかんだ。つまり、われわれは今のところム!王国の存在を直接的には証明できないが、『契丹古伝』という稀有の書物に記された東大国と、そこに登場するカラ族の存在を明らかにすることによって、間接的にムー王国の存在を証明できるのではないか、という見通しを得たのだ。



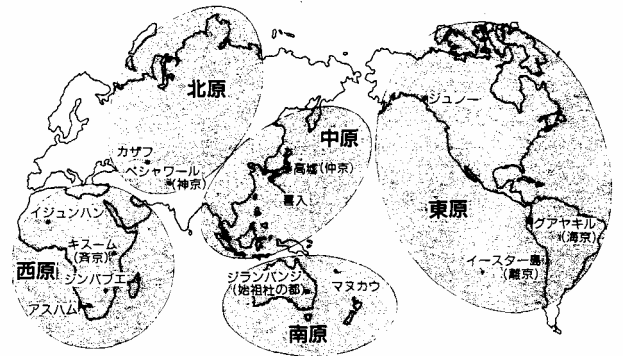
「いさかひを避け、とこしへに温れむいのちを重ねしめよ」と記されたエクアドル地下都市出土の黄金の胸飾り

証拠 1

大いなる『契丹古伝』

今から一〇〇〇年ほど前(九四二年)に遼の史官を務めた耶律羽之の手に成る王家の書『契丹古伝』は、.やまとふみししとさつかみすち『耶摩駝記』『氏質都札』『汗美須鍾』さいせいしようしよひ『西征頸疏』『秘府録』『神統志』『費みこくししんいんたいき彌国氏洲鑑』『辰殷大記』『洲鮮記』の九つの史料をテキストとして編纂されている。そこには、今日のわれわれが三〇〇〇年の時の流れの中で転変と流移の果てに忘れ去ってしまった、はるか昔の日本人の祖先の歴史が脈々と息づいている。『契丹古伝』の目的は、建国まもない遼(契丹)の王家がみずからの歴史的背景と正統性を明らかにしながら、漢民族の中原支配に抵抗する周辺諸民族の団結をリードし、鼓舞するところにあった。

が、同書は結果的に、われわれ日本人が今となっては入手できなくなった、『耶摩胎記』をはじめとする八世紀以前の古代史料を駆使することによって、記紀や他の古史古伝から洩れてしまった渤海滅亡以前の高句麗・日本の太古史を明らかにしている。、同書がわれわれに垣間見せてくれ



幻の東大帝国首都分布図

幻の東大帝国首都分布図

”

中原の首都	鹿児島県川内平野の incoming (いりき)
東原の首都	アラスカ南部の州都ジュノー
南原の首都	ニュージーランド北島のマヌカウ
西原の首都	アフリカ南部のジンバブエ
北原の首都	カザフ共和国のケンピルサイ
神京	パキスタンのベジャワール
秦率母理京	オーストラリアのジランバンジ
離京	イースター島のホツイチ
海京	エクアドル海岸部のエスメラルダス
斉京	ケニアのヒラックスヒル
仲京	韓国迎日湾地区の高墟耶(かこや)

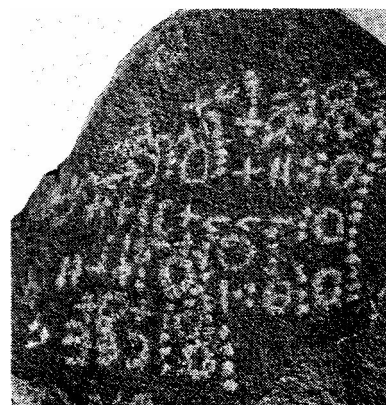
東大帝国の主要都市リスト

東大帝国の主要都市リスト

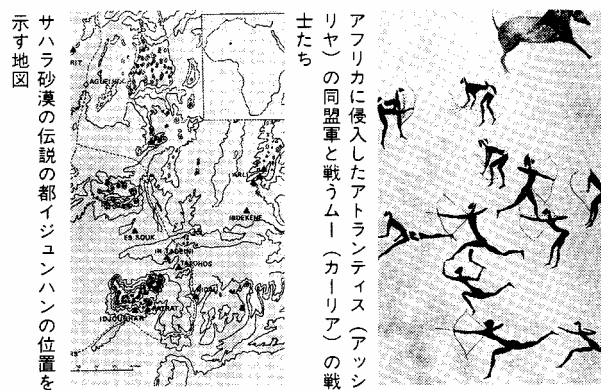
中原の首都	鹿児島県川内平野の incoming (いりき)
東原の首都	アラスカ南部の州都ジュノー
南原の首都	ニュージーランド北島のマヌカウ
西原の首都	アフリカ南部のジンバブエ
北原の首都	カザフ共和国のケンピルサイ
神京	パキスタンのペシャワール
秦率母理京	オーストラリアのジランバン
離京	イースター島のホツイチ
海京	エクアドル海岸部のエスメラルダス
齊京	ケニヤのヒラッタスヒル
仲京	韓国迎日湾地区の高壇耶(かこや)

る太古日本の歴史は、その内容があまりにも通説とかけ離れているため、これまで欧米や中国の学者が流布してきた世界史の常識に従えば、全くの空想としか見えない。が、『契丹古伝』によれば、われわれ日本人と契丹人の共通の祖先である東大神族の歴史は、過去三〇〇〇年にわたってエジプト、シュメ;ル、インダス、黄河の地を次々に侵略してきたアトランティス人、つまり中あや国で漢人として知られる欧米の支配階級アッシリヤ人～アーリヤ人の手で抹殺され、改ざんされてきたという。つまり、われわれがこれまで教わってきた紀元前の日本と世界の歴史はすべて虚構であり、われわれの祖先の真実の歴史、カラ族(タル族)と呼ばれてきた東大神族がかつて地球のすみずみ

に築き上げてきた輝かしいムー文明の歴史は、アトランティス人(漢人～アーリヤ人～アッシリヤ人)の手で巧妙に流布されてきた歴史の通説にひそむ大ウソを暴かなければ明らかにできない、ということと同書は訴えているのである。はたして、『契丹古伝』に書かれていることは、全面的に信頼してよいものか。そこに記された東大国は本当に紀元前七世紀ころ、地球の大部分を治めた国だったのか。また、当



サハラ砂漠に描かれた太古日本人の岩絵と文字



アフリカに侵入したアトランティス(アッシリヤ)の同盟軍と戦うムー(カーリア)の戦士たち

サハラ砂漠の伝説の都イジュンハンの位置を示す地図時の東大国王スサダミコが歴史的に実在したとすれば、その証拠は、世界各地にどのような形で残っているのか。今、わ

れわれが明らかにしなければならない疑問はあまりにも多く、一朝一夕には解決できそうもない。けれども、高橋は、彼自身の専門分野である古代文字の研究を通じて、今では『契丹古伝』に書かれていることが、ほぼ全面的に正しいのではないかと、という見通しをもつようになった。『契丹古伝』に記された東大国の伝説の都をいくつか現地調査していくうちに、彼は、日本神話の高天原が東大国の中原地方(日本からインドに到る地域)に実在したことや、アンデス・ヒマラヤの奥地にムー文明の痕跡が残されていることを突きとめた。そればかりではない。以下に記すごとく、『契丹古伝』に書かれたとおりの「歴史の抹殺」が、奈良時代以前の日本で実際に行なわれた証拠をつかんだのである。



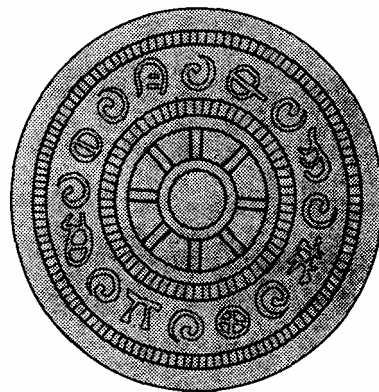
ムー(カーリア)との戦いを示すヒッタイトの壁画

抹殺された神代の記憶

一九九三年に遷宮せんぐうの大祭を二十年ぶりに迎えた伊勢神宮。その伊勢神宮の境内にある神宮文庫に古くから収められた史料は、奇妙なことに、漢字でも仮名でもない不思議な文字で書かれている。この由緒ある神社に源義経や平将門が残した歌、菅原道真や稗田阿礼が奉納した詩歌に、現在のわれわれが知らない文字が使われているのはなぜか。これまでわれわれが学校で教わってきた歴史によれば、古代の日本に漢字以外の文字はなく、漢字以前の文字もなかったことになっている。ところが、実際に古墳から出土しかめかんた鏡や、甕棺に副葬された弥生時代の遺物、各地の博物館に収納された縄文土器を丹念に調べてみると、それらの表面には、伊勢神宮の奉納文に使われているものと同じ文字が刻まれている。

日	百	〇	ヒ
之	且	〇	ツ
光	〇	〇	キ
天	日	〇	ヲ
下	井	井	ア
大	田	田	タ
明	ハ	ハ	ヘ
見	見	見	ム

単園銘帯鏡(模写)と解読結果(東京国立博物館蔵)



新しい読み方

ヒツキヲアタヘム

従来の読み方

日之光天下大明見

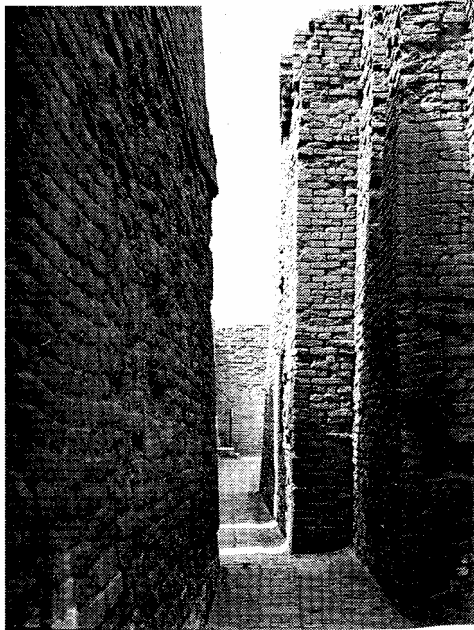
鏡(模写)と解読結果(東京国立博物館蔵)
この章で紹介したいいくつかの例を見てもわかるとおり、漢字伝来以前にそれらの文字が使われたことは確かである。にも

かかわらず、奈良時代に成立した『古事記』や『日本書紀』に漢字しか使われていないのはなぜか。今日の学界では、江戸時代に本居から宣長が「上古文字なし」「漢ごころを廃せ」と主張して以来のしきたりに従って、古代の日本には文字がなかったことが通説とされている。が、事実在即していえば、古代の日本には縄文時代から文字があったし、漢字以外に旧字と新字の区別があったことは文献にもはっきり記されている(書紀・天武十一年の記載ほか参照)。宣長は『日本書紀』を軽視するあくだりまり、同書の天智六年の条に記された「築紫都督府」の設置とそれに伴う「漢字使用令」が、カラ心を廃してアヤ心(漢人あやひとのいつわり)を育てたことを見過ごしてしまった。再び事実在即していえば、古代の日本から神代の文字とカラ心が消されてしまったのは、六六三年の白村江の戦いで、カラ族(日本)がアヤ人(中国)に決定的な敗北を喫したからである。つまり、われわれがカラ族固有の文字で記録された太古日本の輝かしい歴史をことごとく見失ってしまったのは、白村江の大戦後、九州の大"宰府に進駐して日本占領軍司令部""築紫都督府を設置したアヤ人ら(唐の軍人官僚二千余人/書紀・天智八年の記事参照)の陰謀により、それまで使われてきた神代文字の使用を禁止され、漢字の使用を強制されたことが最大の原因なのだ。「築紫都督府」が唐の占領軍司令部を意味していることは、この時期にくだらこま日本とともに唐と戦った百済と高麗のそれぞれの都が、唐に敗れたのち、「熊津都督府」「平壤都督府」という、同じ「都督府」の名称で唐軍の占領管理下に置かれた例を見れば明らか



太古の秘密を記した宮下文献

太古の秘密を記した宮下文献である。この時代に、われわれはそれまで使ってきた固有の文字を公式の書物に用いることをやめ、神代文字で書かれた古史古伝を、『古事記』『日本書紀』のような漢字表記の書物に書き改めた。その結果、白村江の敗戦以前にわれわれの祖先が世界各地に雄飛していた記憶は、地名・人名の漢字化とともに次第に失われ、日本の有力氏族がかつてインド、ヒマラヤ山脈の麓にも高天原の都を定めて、アジアからアフリカ、アメリカ大陸に到る九州全土を治めていた時代の輝かしい歴史も徐々に失われてしまった。『契丹古伝』は、紀元前の日本人が、東大神族と呼ばれたカラ族(クル族)の一員として、紀元前のインドでもテイルムン(太古の日本)の高度な建築技術のあとを示すモヘンジョダロ遺跡活躍していたことを伝えているが、当時の記憶は、九世紀の初めに万多親王らが編纂した『新撰姓氏録』という有力氏族の家系由来記に化石的な形でかすかに痕跡をとどめるのみである。

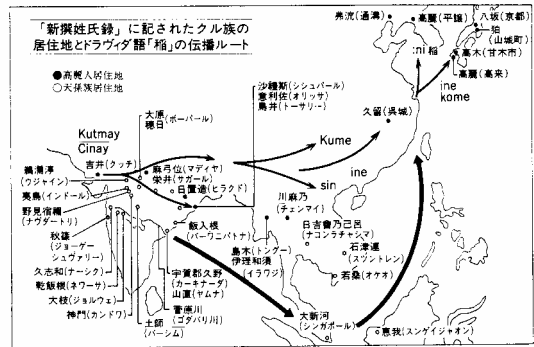


ティルムン(太古の日本)の高度な建築技術のあとを示すモヘンジョダロ遺跡

109

よみがえる高天原の神々

だが、この『新撰姓氏録』に残されたわずかな情報だけでも、われわれの祖先の失われた歴史を復元する上で、はかり知れない意味をもっている。例えば、そこには、京都の祇園祭りで有名な八坂神社の一族が、朝鮮半島から日本列島に移り住むはるか以前に中国大陸の久留(呉仔長江流域)にいたこと、その前はタイの川麻乃(チェンマイ)にいたこと、そしてさらにその前はインド東部の意利佐(オリッサ)にいたことが記されている。九世紀末に遣唐使を廃止して国風文化の復興につとめた菅原道真のルーツを『新撰姓氏録』に基づいて調べてみると、これまで実在したか確力めようのなかった日本神話の高天原の所在や、そこで活躍した日本の神々の実体がはっきりしてくる。



この書物から、われわれは、菅原一族の祖先の天神たち、初代の穂日(ホピ)や息子の夷鳥(イドリ)、末孫の鵜濡淳(ウジュヌ)らがインドのデカン高原を流れるゴダバリ河とナルマダ河の流域に住んでいたことを知るだけでなく鵜濡淳がウジャイン(ナルマダ河の北)の町に、夷鳥がインドーレ(ウジャインの東方)の町に、また穂日がポーパール(インドールの東)の町に拠点を定めて、これらの都市を建設したことが読みとれるのである(高橋良典著『謎の新撰姓氏録』徳間書店刊を参照)。そして、これから述べるのが最も重要なポイントであるが、実際にわれわれ探検協会のメンバーがインドのデカン高原へ調査に行ってみると……。驚くなかれ、穂日の町や鵜濡淳の町はここにちがいない、と単に文献から仮説を立てたにすぎないポーパールやウジャインの古い寺院の壁や古城の敷石のいたるところで、われわれは、日本の神代文字で書かれた古代日本語の銘文を発見することができたのである(第6章参照)。このことは何を意味するかといえば、それは、菅原氏に代表される日本の有力氏族が、かつてインドのデ



サハラ砂漠の洞窟に描かれたムー(太古日本)の女王ガーナ

サハラ砂漠の洞窟に描かれたムー(太古日本)の女王ガーナカン高原にいたことを示している。そればかりではない。われわれがデカン高原の中心部にある有名なアジャンタ石窟寺院の最古の柱から写しとった刻文を、あとで高橋が解読してみるとそこには、伊勢神宮の古代文字で「クダハラマロ」(管原麻呂 V と読める寄進者の名が刻まれていたのだ。クダハラマロのタダハラ(管原)は、『姓氏録』によれば、菅原氏の元の氏族名である。そのクダハラ氏の男子の名がアジャンタにあるということは、いまや疑いようもなく、菅原氏の祖先がインドのデカン高原でも活躍していたことを証明してい

る



アジャンタの石窟に描かれた壁画

ア

ジャンタの石窟に描かれた壁画そして、紀元前三世紀まで湖るアジャンタ石窟の創建者が菅原道真の遠い祖先であったといえるなら、天神の穂日や夷鳥たちが活躍したという日本神話の高天原は、まらがいなく、インドのデカン高原に実在したといえるのだ。一九九〇年に高橋が、『新撰姓氏録』という歴史学会公認の文献から"導き出したデカン高原""高天原仮説"は、今やわれわれだけでなく、インドのデカン高原へ行った人なら誰でも、現地と日本に共通する神代文字碑文を目にすることによって、決定的な形で確かめられる。しかも、彼の仮説は、インド人と日本人の言葉や遺伝子を調べた専門家の研究によっても、また、インドと日本の古い伝説や祭りの伝統、考古学上の遺物を比較した研究者の報告によっても、二重、三重に重なる結論として確実に裏づけられる。今なお戦いはやまずこのように見ると、われわれの祖先がかつて中原(インドから日本に到る地域)に都を定めて世界全体を治めたという『契丹古伝』の言い伝えは、現在のわれわれにとって確かに信じがたいものではあるが、太古日本の忘れ去られた歴史の真相をか

なり正確に伝えていることがわか



ライオンと格闘する太古日本の王ギルガメシュ

ライオンと格闘する太古日本の王ギルガメシュ。日本ではこれまで、江戸時代に神代文字の存在を明らかにした平田篤胤の功績が学問的に根づかなかったため、過去二〇〇年間、欧米の考古学と言語学発展に貢献し、オリエント世界の古代史を解明する上で決定的に重要な役割を果たしてきた碑文学の伝統がなかった。けれども、今やわれわれは、過去二〇年にわたる高橋の調査によってその正しさが明らかになってきた古代カラ族の神代文字を有力な武器として、世界各地に築かれたカラ文明の諸都市を探りあて、『契丹古伝』に記された東大国の位置や、高天使鷄という空艇に乗って世界を駆けめぐったわれわれの祖先の足跡を発見できるようになった(第7章参照)。『契丹古伝』に登場する東大国の実態を解明する作業は、ここ数年前に始まったばかりである。そのため編者の耶律羽之が採録した九つのテキストの史料価値も、今のところ定まっていない。また、『契丹古伝』に記さ

れた原日本人のカラ族と、チャーチワードが紹介したムー文明の建設者—カラ族との関係も十分に明らかになってはいない。しかし、高橋の見通しでは、二つのカラ族は時代を異にする同じ日本人の祖先であり、『契丹古伝』のカラ族が建設した東大国は、紀元前六八七年(C14年代で一万二〇〇〇年前)の大異変で滅亡したム f 文明の継承国家ではなかったかという。世間では、チャーチワードの唱えたム i 文明とプラトンが紹介したアトランティス文明が、ともに今から一万二〇〇〇年前に滅び去ったと伝えているが、『契丹古伝』というたぐい稀な文献とデカン高原に残されたカラ族碑文に基づけば、ムー(カラ)とアトランティス(アッシリア/アーリヤ/アヤ)の戦いが異変によって中断されたのは、前八世紀から前七世紀にかけてのわずかな期間であった。



アトランティス(ギリシア)との戦いを見守るトロイ(ムー)の英雄パリス

アトランティス(ギリシア)との戦いを見守るトロイ(ムー)の英雄パリスムーとアトランティスの戦いは、われわれの見方によれば今なお続いておりこの戦いは、日本人が『契丹古伝』に記された太古の歴史を解明し、アヤ人によって長いあいだ教えられ続けてきた虚構の世界史を書き改めない限り終わることはない、というのがわれわれの偽らざる思いである。

[アヒルクサ文字]

アヒルクサ文字は、伊勢神宮・出雲大社などの由緒ある神社や旧家に古くから伝わる神吠岐諱のひとつ。九州の阿比留家に伝わる阿比留文字の草書体と考えられたことから、江戸時代の国学者として有名な平田篤胤らによってアヒル草文字と命名された。が、本来はアヒル文字と別個に発生した紀元前の文字で、最近では股いん代甲骨文字の草書体ではないかと考えられている。アヒルクサ文字に代表される日本の古代文字は、伝世資料によって百数十種類あったことが知られているが、古墳・甕棺から出土した鏡や刀剣、縄文時代の土器・土面、石造物の表面に刻字が確認されているのは、今のところアヒルクサ文字以外ではイヅモ文字、トヨクニ文字、北海道異体文字などの数種に限られており、今後の研究が待たれている。

伊勢神宮
神宮文庫に収められたアヒルクサ文字とイヅモ文字の奉納文

伊勢神宮
神宮文庫に収められたアヒルクサ文字とイヷモ文字の奉納文

伊勢神宮
神宮文庫に収められたアヒルクサ文字とイヷモ文字の奉納文

伊勢神宮
神宮文庫に収められたアヒルクサ文字とイヷモ文字の奉納文

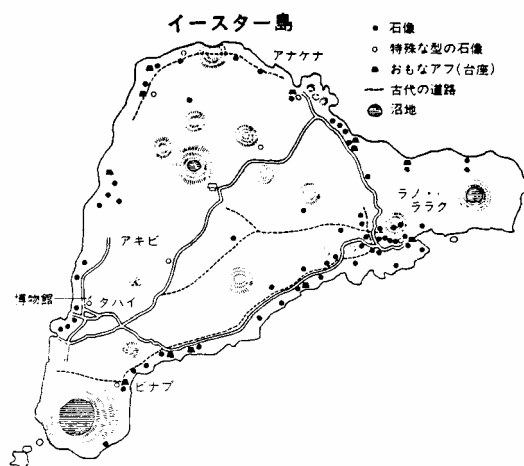
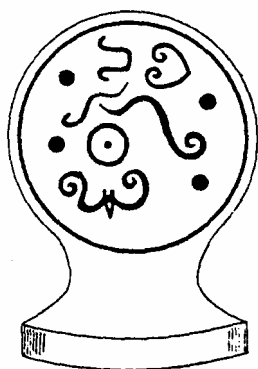


伊勢神宮神宮文庫に収められたアヒルクサ文字とイヷモ文字の奉納文

汗美須鍾^{かみすち}

『契丹古伝』に引用された史料。汗美須鍾(神統)には次のような内容が記されている。神祖ヨセフは、ヒンズークシュ山脈の南のふもとにあるアソタの地に都を定め、その都をペシャーワルと名づけた。ペシャーワルは神の都である。ヨセフはシャー・ジ・キのシャーンキヤー王に命じてこの都を治めさせた。彼はまたシラヒゲアケ(白髭王)に命じて朝鮮半島の迎日湾地羅らしめ、この地を高壇邑と名づけた。高壇の地は太陽つき観測の中心地(都祁)であった。高壇邑は南アフリカのアスハムとエクアドルのエスメールダスを結ぶ大円軌道の midpoint に位置するため、仲京と呼ばれた。ヨセフはエクアドルのコカムイトバクシ神に命じてエスメラルダスに居らしめ、その地をグアヤスと名づけた。グアヤスの港グアヤキルは太平洋航路の重要拠点だったので、海京と呼ばれた。彼はまた南アフリカのアカムイスハム神に命じてケニヤのムグルクに居らしめ、その地をヒラックス・ヒルと名づけた。ヒラックス・ヒルのあたりはアフリカに住むカラ族の宗教的聖地となり、キスームの都、齊京と呼ばれた。彼はキリコエアケ(聞得王)に命じてボゴングの地(オーストラリア)を治めさせ、その都をジランバンジと名づけた。ジランバンジは神祖ヨセフが最初に降臨したところモリなので、始祖降臨の都と呼ばれた。キリコエアケは、ジランバンジのほかにも、イースター島のハンガ・ヌイに宮殿を建てて住んだ。ハンガ・ヌイの地はホツイチと呼ばれ、ラノニフラク火山のふもと

にあつて神都ペシャーワルから最も離れた地球の裏側の地にあたるため、離京と称された。キリコエアケは生まれたときから頭に刃のような角をそなえ、常人とはちがっていた。彼は人間に害をなす悪霊や邪鬼を退治するのが何よりも好きだった。死者を甦らせたり、病気を封じたり、気の流れを変えたりする秘密の行法を二十四項目にわたって体系化したのは彼である。彼の教えは今でも有効であることが確かめられている。



イースター島遺跡分布図。ラノ・ララクの東に離京があった。

イースター島遺跡分布図。ラノ・ララクの東に離京があった。

[契丹古伝]

遼の耶律羽之がまとめた契丹王家の歴史書。全文四六章から成り、次のように始まる。いま神とは何かを考えてみるに、古くからの言い伝えでは、神は光り輝くものとある。その光り輝くようすはたとえようもない。しいてこれを譬たとえれば、日の光に輝く鑑のようである。そこで鑑は太陽神をかたどったものとして日神体と書かれ、カガミと読まれる。その昔、天界を統治した太陽女神たる我らの目祖アメウシハクカルメ"(阿乃法翹報云亭靈明""天"統治日靈女)は、シベリア南部のエニセイ川中流域に広がるミヌシンスク盆地に宇宙船で着陸し、盆地の南部から東部にかけてつらなるサヤン山脈のふもと、カーメンヌイで日孫を産まれた。のちに東大国主となられた日孫ヨセフ皇子は、またの名をアバカンといい、スサダミコともいう。ミヌシンスク盆地の中心都市アバカンにその名をとどめる目孫に、目祖はみずから乳を与え、彼が大きくなると、コマカケと呼ばれる飛行艇を与えて、地上に降臨させた。これが我らの神祖ヨセフの誕生の由来である。ヨセフを神祖と仰ぐ我らカラ族は、世界の各地で活躍した。カラ族の勇者はイースター島のラノ・ララクの南東にあるホツイチの霊廟にまつられ、各地のカラ族の都はいずれもコマヤ(高麗国・高天原)と呼ばれ、国名をシウク、族名をシウカラ、国民をタカラと称し、国王をシウクシフとたたえた。シウクとは東大国とうだいこく、シウカラとは東大民族、シウクシフとは東大国主という意味である。神祖ヨセフの子どもや

孫が世界の各地でカラ族の国を受け継いだのは、ヨセフの時代にカラ族が世界的な規模で活躍したからである。紀元前の我らの祖先の活躍を記した別の書物には、こう記されている。すなわち、トコヨミカド"(常夜帝""地下都市の王/"常世尊=不死の王)と呼ばれた東大国主ヨセフは、初めオーストラリアのジランバンジに降臨し、次いでミヌシンスク盆地を見おろすアフアナシェヴァの山に降臨した。オーストラリアとシベリアの二か所にカラの二つの源があり、同じシウ氏を名乗る二つの宗族がいるのは、神祖ヨセフの右のような降臨にともなって、我らの祖先が現地にとどまったからである。紀元前七世紀にカラ族の一員となったティルムン(東冥一日本〜インド)の人々はヨセフの子孫ではなく、大洪水のあとティルムンの樂園に住んだウトナピ"シュティム(阿辰法須氏""天御中主""禹)の子孫である。アフリカのカラ族の王としてその名を世界中の人々に知られたエチオピア王タルハカ(寧義氏=ニンギルス=ニニギ)が"現れたのは、ウトナピシュティムの時代より八〇〇年ほどあとのことである。ウトナピシュティムやタルハカ、ヨセフの時代に我らの祖先が世界の各地で活躍したことを垣間見るにつけても惜まれるのは、その後千数百年の間に我らカラ族のかつてのつながりが見失われ、祖先の貴重な記録が散逸さんいってしまったことである。そこで私は複雑にからみあった瓜うりのツルや綿糸のかたまりを解きほぐす思いでカラ族の失われた歴史を解き明かし、その昔、カラ族の祖先が今とは比べものにならないほど広大な土地で活躍した時代があったことを明らかにしたいと思う。

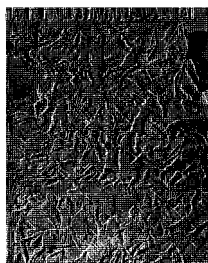


アッシリヤ(アトランティス)の宮殿

西征頌疏

『契丹古伝』に引用された史料。西征頌疏には、紀元前七世紀の戦いのようすが断片的に次のように記されている。神祖ヨセフはいよいよ西に向かって反撃を開始するにあたり、ボルネオ島の西部にいたクチン王の軍隊を同島南西部のクタパン要塞に移し、デカン高原中部にいたサガール王の軍隊をインド半島最南端のアーディチャナツルール要塞に移動させ、南オーストラリア海岸の中部にいたユークラ王の軍隊をエーア湖の西にあるクーバーピジー要塞に派遣して攻撃の準備をさせた。そしてついにみずから大軍を率いて怒濤のごとくエリユトラ海を渡り、アフリカに侵入した敵軍を駆逐してサハラ砂漠の西にあるイジュンハンの丘に達し、タロホスとイン・タデイニの間にタデメッカの都を設けてカラの同朋を救出した。ここにエリユトラ海とあるのはインド洋のことである。イジュンハンとはアフリカ大陸のさいはて、夕陽が沈む西アフリカの海岸に近いアドラール・デ・ジフォラスの高地にある。スサダミコ神祖ヨセフ(順嗟檀彌固""山幸彦ホホデミ)は紀元"前六六〇年に即位してみずから東大国を治められた。そしてこの記念すべき年から数えて八八〇年たった紀元二二〇年、高句麗の山上王位宮とその弟の百濟王仇首(山上王ちほやえちくの弟の蘭須)は千穂八重築しかむのみね紫神之峰

と呼ばれた九州・鹿児島の人々、漢帝国の滅亡を祝って、「秀穂立つシナカキ、とよあしかびさか神が培えけむ、豊葦芽榮」と神に感謝した。この年カラの人々はついに漢帝国の支配から脱し、再び日祖ゆかりのカラの故地を奪回して、日向高千穂と呼ばれた霧島山の神の都に永くとどまれるようになったのである。その後およそ[六〇年余りたった紀元三九一年、高號の好太王は右のように栄ある東大国の伝統を継いで高句麗王となり、大いに我らの旧領を回復して広開土王(コウカイトワケ〜トコイカウワケ〜瑤競伊弉王〜瑞競伊尼赫瓊)と称えられた。好太王の時代に人々は久しく失われていた祖先の気風を取り戻し、カラ族の勢いは再び盛んになったのであった。西征頌疏によれば、カキとは稲葦神洲のことで、稲穂が豊かに実る神の国という意味である。



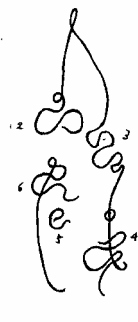
シャンカ文字

インドの初期仏教遺跡、サーンチー、パールフト、あるいはデカン高原の先史美術の宝庫バンパトケア、その他の遺跡から発見されている謎の未解読文字。現地でシャンカ文字と呼ばれている、この未解読文字の代表例は、図に示したアジャンタ最古の石窟の柱に刻まれた文字群である。高橋良典は『謎の新撰姓氏録』(徳問書店刊)の中で、日本人の祖先、たとえば太宰府天満宮に祀られた菅原道真らの祖先が、紀元前のイン

ド・デカン高原で活躍したこと、日本神話の高天原の歴史的な舞台は、インドのデカン高原だったという仮説を唱えている。古来より日本で「天神さま」として親しまれてきた菅原氏は、『新撰姓氏録』によれば、かつて管原(くだけはら)氏と呼ばれた。そして、アジャンタ最古の石窟に刻まれたシャンカ文字を解読した高橋は、驚くべきことに、これを日本の由緒ある神社に古くから伝わるアヒルクサ文字とタガラ文字で、クダーフ(管原)マロ(麻呂)と読んでいる。ということは、菅原氏のような日本の有力氏族がかつてインドのデカン高原で活躍したことを決定的に物語っているのではないだろうか。石窟の石柱



石窟の石柱と拓本



ku
de
ha
[o o ra]
ra
ma
ro

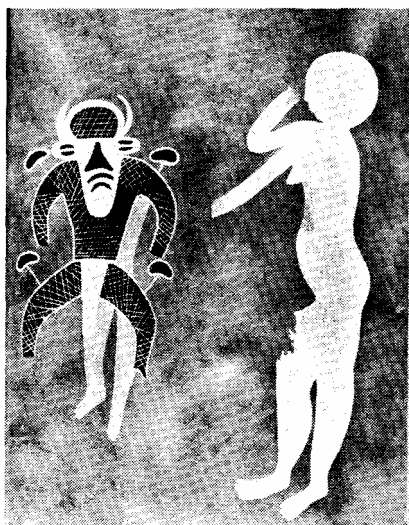
石柱のシャンカ文字の解読結果

石柱のシャンカ文字の解読結果

辰殷大記 しんいんたいき

『契丹古伝』に引用された史料。辰殷大記はこう記している。イサク(殷叔)と呼ばれたイスラエル最後の王ホセア(忍穂耳)

には老年になっても息子がいなかった。そこでカラの人々からこの上なく高貴な人物(殷越—干越)であると尊敬されていたイサクは、アフリカやヨーロッパ、小アジアの各地に離散したイスラエルの人々を率いて東方の聖地ティルムン(日本)へ旅立つにあたり、スサダミコ(密矩)と呼ばれたヨセフ(火々出見)を養子として迎え、彼の後継者とした。その後まもなくイサクは亡くなったが、そのとき彼は八十九歳だった。こうして我らの神祖ヨセフが永遠のいのちを授けとこよひこみこられた太陽の御子、常世トコヨヒヨミコ日子御子(督抗費国密矩)としてイサクの跡を継いだのは、紀元前六九五年(伊兮歩)乙酉の秋、九月(七月)のことだった。



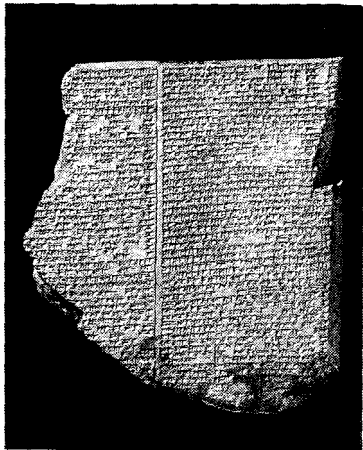
太古日本の王イサク (イザナギ)

太古日本の王イサク

ティルムン

大洪水ののち、ペルシア湾の東方につくられた神々の楽園。シュメールの伝説によれば、ティルムンは大洪水を生きのびたウトナピシュティムが神々とともに住むことを許された楽園で、息子のギルガメシュがク

ラブ(イラク南部の古代都市)の英雄になったあと、不老長寿の薬草を求めてやってきた土地という。有名なギルガメシュ叙事詩に、「はるかなる地、川々の河口」にあると記されたティルムンは、別の言い伝えによれば「太陽の昇る土地」にあり、計画的に区画された耕地を潤すすばらしい灌漑用水路と井戸のおかげで穀物が豊かに実り、町には立派な穀物倉庫があったという。神々の楽園ティルムンの"すばらしさは""エンキとニ""ンフルサグ""と名づけられ"たシュメールの粘土板に、次のように記されている。ティルムンの国は清らかだ/ティルムンの国は輝かしい……/ティルムンからすでは鳥が不吉な漣霧あげることもなく、雄鶏がけたたましい叫びを発することもない/ライオンは生き物を殺さないし、狼も仔羊をとらえない:…/眼病になる人もいなければ、頭痛になる人もいない/女性は年をとっても若々しく、男性もまた老いを知らない……シュメール伝説のティルムンは平知そのもので、争いことや病気のない清らかな国、人間がいつまでも若さを失わない輝かしい国だった。以上のティルムンは、高橋の研究によれば、太古の日本そのものであり、異変を生きのびたウトナピシュティムとギルガメシュは、あめのみなかぬしたかみ輻体神話の天御中王、高皇産霊に相当するという。つまり、ティルムンは、ティムン(契丹古伝の東冥)ティプン(契丹古伝の東表)に変化したあと、ジプン～ジボン～ジッポンを経て日本になったと い え る 。



ウルク（夏）の王ギルガメシュ（日本神話の高皇産霊）の物語を記したアッシリヤの粘土板

ウルク（夏）の王ギルガメシュ（日本神話の高皇産霊）の物語を記したアッシリヤの粘土板

【秘府録ひふろく】

〔契丹古伝〕に引用された史料。秘府録にはこう書いてある。神祖ヨセフは、今日アジアと呼ばれている地域を中心として、アフリカからオーストラリア、アメリカ大陸にまたがる広大な土地をカラ族のために確保し、これを五つの地域に分けて統治した。彼はまず、マダガスカルのチアフアジャブナ王を南アフリカのジンバブエに派遣して、東大国の西部を治めさせた。次に彼は、北アメリカのシトカ王をアラスカのジュノーに派遣して、東大国の東部を治めさせた。また彼は、九州の串木野カムイ神を喜入（または入来）に派遣して、東大国の中部を治めさせた。彼は中央アジアのカザフ（またはケンピルサイ）にウラル山脈南部のカンダガチ王を派遣して東大国の北部を治めさせ、ニュージーランド北島のマヌカウにオーストラリアの南のタスマン王を派遣して東大国の南部を治めさせた。ヨセフは、

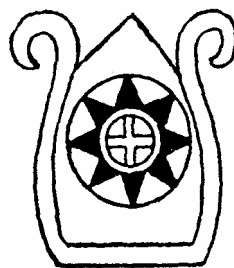
右のように東大国の諸大陸の統治を五人の長にゆだねると、みずからは宇宙船に乗って天空の安全をはかり、大海原を航海する人々の安全をはかった。また彼は、九州の句嬰国（のちの狗奴国）の司祭に対して、つねづねの祭りことをおろそかにすることなく、東大国民の末ながい平和と繁栄を保つよう心がけよと命じた。紀元前七世紀にヨセフが東大国の五つの地域を治める以前、これらの地域にはカラ族以外の先住民がいた。北原と呼ばれた中央アジアのステップ地帯には、遊牧民族のマッサゲタイ人（没皮）と狩猟民族のイユルカイ人（龍革）がいた。西原と呼ばれたアフリカ大陸には、穴居民族のギリガマイ人（魚目）とティブー人（姑腹）がいた。そして中原と呼ばれた東アジア地域にはアイヌ（熊耳）とコロポックル（黄眉）が住み、南原と呼ばれたインド・オセアニア地域には、マオリ人（苗羅）とパプア人（孟瀉）がいて農業を営み、海原と呼ばれたアメリカ大陸にはジェー語族（菟首）とコリヤ族（狼裾）がいて海洋漁業にいそしんでいた。これらの先住民は、カラ族とともに東大国の国民になったとき、いずれもヨセフの指示に従い、言いつけをよく守った。けれども、その当時インドにいたバクトリア人（箱）とガンダーラ人（牌圈、サカ人（籍）だけは性格が凶暴で手がつけられなかった。そこでヨセフは彼らを征伐してインドから駆逐し、ベンガル湾に追放した。

費彌国氏洲鑑ひみこく

ししゅうかん】

『契丹古伝』に引用された史料。費彌国氏洲鑑には次のようなことが書かれている。その昔、地球は大異変に見舞われ、恐るべき洪水が発生して、海と陸の形はすっかり変わってしまった。この異変で地軸が傾いた結果、大地は中国の北西部で縮んで盛りあがり(ビルマ～チベット～ヒマラヤの隆起)、南東部で引き裂かれて水没し蛇身人首の鬼を祭る者が次々にやってきて我らの土地に住みついた。そして彼らは我が東大古族の神の子孫とみずからを偽つたばかりでなく、伏羲や神農、黄帝、少昊なる人物を我らの王の祖先に仕立てあげてその系図に自分たちの祖先をつなげ、あるいは我らの王を陶・虞と改めて彼らの王にみせかけたうえでその子孫になりすまし、これら偽りの神と王に対する崇拜を人々に強要してみずかた(日本海溝～フィリピン海溝の形成)。プングラン(乃后稷)諸島のあたりにあった南シナ大陸と東北の大陸は沈んで海となり、アジア大陸の地殻が太平洋方面に大きく傾いて沈んだため、天が東に向かって海面から遠ざかっていくように見えた。秦・舜の時代に地球全土は戦火に包まれ、禹は洪水の後始末に追われた。ところが二のようなドサクサにまぎれて西からは人身牛首の神を祭る者やらを聖帝の子孫なりと誇らしげに語っている。けれども、彼らは自分たちの祖先だと思っていた舜と舜が彼らの思惑に反して東大古族の王であり、我らの祖先であったことをはたして知っているのだろうか。西から我らの地にやってきて帰化した人々が王として仕えたのは、嘉・舜のあと世界の王になった夏の国の禹が最初であった。その後久しく続いた夏王朝の創始者である禹のことを彼らは中国だけの王であ

ったかのように記しているが、これはとんでもない間違いだ。というのも、史記に記された禹は大洪水を生きのびてティルムン(日本～インド)の樂園に住んだシュルツパクの王ウトナピシュティム(天御中主nアソベ王朝初代ウソリ王)をさしており、彼のいた夏の国とは英雄ギルガメシュ(高皇産靈尊""アソベ王朝第二代タミアレ王)が活躍したクラブ(呉羽)の都をさしている。禹は中国だけの王ではなく、世界全体の王であったことが西族の伝承によっても確かめられるのである。



八咫やたの鏡文字

一伊勢神宮に伝えられた八咫の鏡の表面に刻まれた文字。これらの文字は従来、ヘブライ語で左から右に向かって、エイエアシェルエイエ(我は在りて在る者なり)と読まれてきた。しかし、そのような読み方はヘブライ文字にもとづく根拠のあるものとはみなされない。むしろこれらを分析した結果によれば、古代のサハラ砂漠で使われていたティフィナグ紋字で、あな畏けあがサハな崇めつることほイサクら言祝ぎつあな畏けサハな崇めつると読める(地球文化研究所・高橋解説)。つまり日本神話のイザナギに相当するイサク(古代イスラエル王国最後の王、ホセア)が紀元前七〇〇年頃に、サハもしくはは

サバと呼ばれた太古の宇宙船サブハをこと
ほいだことが記されたものと解釈される。
このサバは有名なシバの女王が使った空飛
ぶ乗り物であり、日本では天照大神の太陽
円盤として、古くから崇められてきた。、

エ イ エ ア シ エ ル エ イ ア
エ イ エ ア シ エ ル エ イ エ
יהוה יהוה יהוה

伊勢神宮の八咫鏡文字

伊勢神宮の八咫鏡文字

[耶摩駘記]

「やまとふみ契丹古伝』に引用された史料。著者の塙須弗は、耶摩駘記の中でこう述べている。日本がいまだかつて滅びることなく衰えることなくして国を保ってきたのは、この国を治める者がティルムン以来の輝かしい歴史を見失わず、先代から受け継いだ伝統を大切に守り続け、神の言葉にすなおに耳を傾けて、人間としてなすべきことを行なってきたからである。日本のことを秋洲とも書いてアキシマと呼んでいるのは、紀元前七世紀に神祖ヨセフがこの国に世界の都を設け、目体列島を世界の中央島、央畿島アキシマと定めたからである。



[ヨセフ]

旧約聖書にイスラエル十二部族の祖ヤコブの子として登場する人物。日本神話に山幸彦ホホデミ(火々出見)、ホオリ(火折)として

描かれ、東日流外三郡誌つかるそとさんぐんしにウヘリ(宇比利)の子として記されたマシカカ(馬司利)に相当する。紀元前六九五年に亡くなったホセア(旧約聖書のイサク/記紀のオシホ耳)の養子に迎えられ、アッシリヤに滅ぼされたイスラエル王家を再興したティルムン(東冥/日本)の王。前八世紀から前七世紀にかけて、アッシリヤ王サルゴン、センナケリブ、およびエセルハドンと戦ったティルムン王ウヘリ(大日靈女/アマテラス)の子、スダース(須瑳檀密矩/ホホデミ)として実在した。

契丹古伝に東大国主スサダミコの名で伝えられたスダースは、前七世紀の戦争と異変の時代に、われわれ日本人の祖先(カラ族/クル族/カーリア人)を地中海、アフリカ方面からインド、日本へ安全に導いた。その功績は忘れ去ることができない。彼は、前七世紀の初めにアッシリヤ(アトランティス/アーリヤ)に征服されたヨーロッパを除く地球全土を五つの地方に分け、それぞれの地域に都を定めて世界を統治した。旧約聖書に彼の父と記されたヤコブ(ニニギ)は、前七世紀にアフリカで勇名をとどろかせたエチオピア朝エジプトのファラオ、タルハカであり、彼の息子と記されたエフライムは、記紀および古史古伝にホホデミの息子として伝えられたウガヤ皇子と同一人物である。



ティアワナコの
太陽の門に描かれたヨセフ

原日本古代文字発見地点日本探検協会/高
橋 良 典 調 査



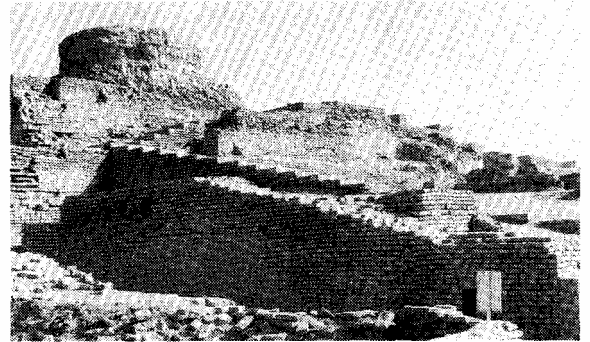
太陽神アフラ・マズダはイーマに告げた
おお、美しきイーマよ
この邪悪なる世界に厳しい冬が訪れよう
としている
雲高くそびえるかのアヴィ山の頂きにも
厚い雪が降りつもるであろう
そして水の豊かな緑なす牧場であるこの
大地もまた
かつてない大雪に見舞われる
さればイーマよ
今のうちに大いなるバーラを造れ(この
大地に大いなる地下都市を造るのだー)
『ゼンド・アヴェスタ』

日本探検協会では、デカン高原=高天原仮説を証明
するため、これまで何度も現地調査を行なってきた。
そしてその都度インドでも解読されていない
碑文を採集し、100例以上の碑文を解読した結果、
古代の日本人はインドのデカン高原あるいはイン
ダス文明地域でも活躍していたことをつきとめた。
日本探検協会が毎年継続して進めているインド・
ネパール・古代インダス文明地域(ティルムン=日
本)の調査に協力下さる方は協会までご連絡くださ
い。

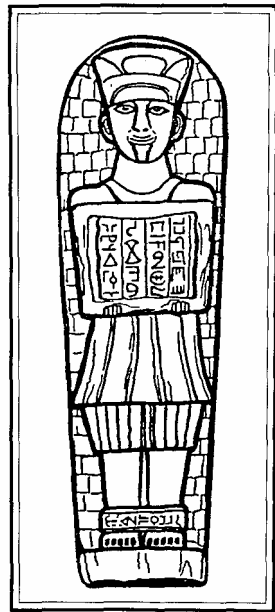
第6章

謎のムー碑文が語り始めた

探検協会の調査



モヘンジョダロ全景



フォーセットのマスコット人形

1
フォーセットのマスコット人形

モヘンジョダロ全景砂漠の中に花開いたレンガ造りのモダンな計画都市ーモヘンジョ・ダロ。かつてはインダス川の河口にあって、今はウエスタン・ナラ・ループとインダス川の間細長い帯状の島に残されたこの廃壇には、すばらしい技術のあとを示す焼きレンガの建物群、大浴場や穀物倉庫の跡がある。直角に交差した広い街路の脇には精巧なサイフォン式浄化槽に流れこむ暗渠式の下水道が設けられ、ダスト・シュートのついた壁の間を通り抜けて数階建てのマンションの中庭に入れば、その奥には水洗トイレやシャワーのついた小部屋と快適なバルコニーがある……。モヘンジョ・ダロは、今で言えば東京やニューヨーク、パリの清楚な高級住宅街といったところだろうか。現代のそれに劣らない衛生設備が町全体に施されている点を考慮すると、当時の市民の住み心地は、今の下町よりはるかに良かったことが想像される。しかし、モヘンジョ・ダロの住民を含むインダス人について、われわれの知っていることはごくわずかだ。彼らがその当時話した言葉は、いまだにどんなものかわかっていない。インダス人の宗教や人種、

政治形態についてもいろいろなことが推測されてはいるが、本当のところは誰にもわからない。インダス文明は、そもそも発生の経過から滅亡事情にいたるまで、すべて謎に包まれているのだ。もしも、インダス文字が読めたら、これらの点について多くのことがわかるにちがいない、とは誰しも思うが、印章に刻まれた文字を漠然と眺めているだけでは、とてもその秘密を明らかにすることはできそうにもない。はたして、インダス文字は日本に伝わる古代文字の知識で読めるのか読めないのか。これはさっそく試してみる価値がある。地球文化研究所の高橋は、こうして解読に挑戦した。地球文化研究所による解読結果

インダス文字	𑀩	𑀪	𑀫	𑀬	𑀭
変形過程	人	レ	口	ハ	ノ
トヨクニ文字	イ	ハ	口	目	
読み方	イ	ノ	ツ	ト	ハ

地球文化研究所による解読結果



モヘンジョダロから出土した印章

はナ(α)であるらしい。そして五番目の文字は、トヨクニ文字には見当たらないが、この文字と混用してよく使われるアイヌ文字のレ(R)に似ている。そこで左端の文字を除いて、ひとまず読んでみると、トバナレかつバナレ、トハナレ、ツハナレと読める。そしてこれらの音のうち、トハナレとはが「永遠なれ」に近い。また、トヨクニ文字は合体字として使われることもあるので、左端の文字を人とどに分解してみると、それぞれイ、ノと読める。二番目の文字はツ、トと読める。四番目の文字はナ、ア(9)と読める。音の配列をもう一度考えてみると、この印章には、どうやらイノツトハナアレと書いてあるらしい。その意味は、「生命永遠な在れ」

いのつとはあである。高橋は、モヘンジョ・ダロやハラッパーから出土したインダス文字の印章をいくつか読み解いていくうちに、日本人の祖先は、紀元前八世紀ころ、インダス川の流域からインドのデカン高原に移り住んだ事実をつきとめた。

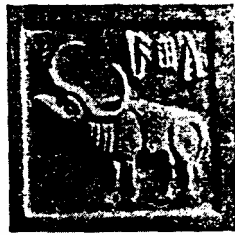
いのつとはインダスの印章には、「生命永遠なあ在れ」のほかにも、古代の日本語でめたまよみ「愛で給へ」「嘉し給へ」「勝たせ給へ」もいは「ラタ(神々の乗りもの)守り給へ」「祝ひ祭らなむ」などと書かれたものがあつた。インダス文明の印章

レポート 1 インダス文明の建設者は日本人だった

モヘンジョ・ダロから出土した図のような印章には、ユニコーンとみられる動物の上に、五つの文字が刻まれている。これらの文字をトヨクニ文字で読んでみるとどうか(204頁参照)。まず、左から二番目の文字は、トヨクニ文字のト(田)か、ツ(口)に相当するように見える。三番目の文字はバ(ハ)かハであるらしく、四番目の文字

地球文化研究所による解読結果

ハ マ タ セ タ カ



インダス文明の印章

ることが誰にもわかる。印章の右端に刻まれた文字は、アイヌ文字のク(ク)と同じもので、その隣りの文字は、アイヌ文字のル(ル)かレ(レ)に相当している。この印章には、日本の古代文字で、クルかクレと読める文字が記されているのである。

クルの文明はアジア全土に栄えた

地球文化研究所による解読結果インダス文字が日本の古代文字で読め、しかも日本語ではっきりと意味をなすことは、モヘンジョ・ダロやハラッパーにかつてわれわれの祖先がいたことや、インダス文明の建設者が日本人であったこと、日本人の祖先がティルムンと呼ばれたインダス国家をあとにして東方へ移動したことなどを物語っていた。これまで多くの考古学者は、先にあげたインダスの印章がシバ神を表したものであるということで意見が一致している。が、このシバ神の頭圭に刻まれている文字が読めなかったため、それ以上のことはわからなかった。

クルといえば、読者はただちに、『マハーバーラタ』の英雄を生み出したインドのクル族を思い浮かべ、カリアード・パレスにいた泥土煮王、すなわちウジャインのカラ王(クル王)を思い出されるだろう。また、古代史にくわしい人なら、ここに記されたクレが『日本書紀』に呉人くれひととして登場する高句麗こうくり人や中国の江南地方にあった呉くれ(久留くる)の国の人々と何か関係があるにちがいないと思われるだろう。確かに、その通りである。この印章は、モヘンジョ・ダロにいたインダス人がみずからをクル族と呼び、シバ神に対してクル族全体の繁栄を祈ったことを意味している。そして、モヘンジョ・ダロの印章にわれわれの祖先がクル族(カラ族)として登場することは、さらに重大な、次のような意味をもっている。

シバ神を刻んだインダス文明の印章

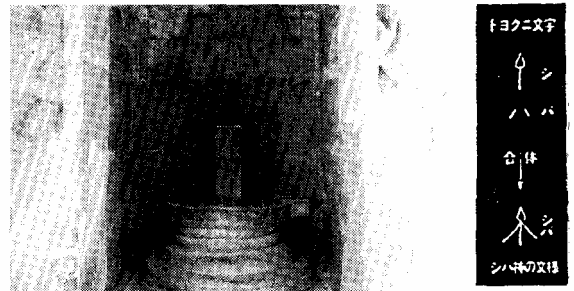
印章文字	ク	ル	カ	レ	ク	
変形過程	ク	ル	カ	レ	ク	
アイヌ文字	ク	ル	カ	レ	ク	
読み方	ハ	マ	タ	セ	タ	カ

シバ神を刻んだインダス文明の印章ところが、日本の古代文字を学べば、この印章には「クルに栄えをなむ賜たまへ」と書いてあ



モヘンジョダロの市街

つまり、インダス川の流域を中心に、かつてエジプト文明やシュメール文明以上の広がりをもつティルムンの国をつくりあげたわれわれ日本人の祖先は、世界最大の叙事詩『マハーバーラタ』にその栄光と悲劇的な末路をうたわれたインドのクル族であり、古代ギリシアの『エリュトラ海案内記』にその後の繁栄ぶりを記されたウジャインのカラ族そのものだった、ということである。紀元前のインドにいたわれわれの祖先は、前六世紀以降、北の仏教徒と南のヒンドゥー教徒に分かれて次第に別々の道を歩み出す前まで、ともに熱心なシバ神崇拝者であった。このことは、先に取りあげたインダスの印章にシバ神が描かれているのを見ても、また、インドの古いヒまつシバリングムンドゥー教寺院に祀られた御神体の表面に刻まれた文字がシ(Ω)とバ(ハ)を合体させてシバを表したものであることを見ても、はっきりしている。ウジャインのカリアード・パレスに「シバ祀る宮」が造られ、サーンチーの南のボージプルにインド最大のシバ・リンガムが安置されたことは、前八世紀にインドのデカン高原うひちにすひちにを治めた泥土煮王と沙土煮女王が熱



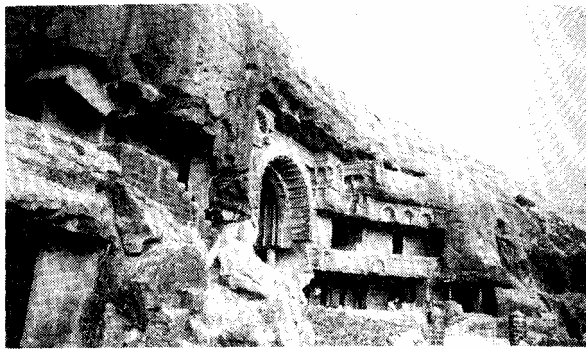
カイラサナーラ寺院のシバ・リンガムの表面には、日本のトヨクニ文字のシとバを合体させたシバ神の文様が描かれている

カイラサナーラ寺院のシバ・リンガムの表面には、日本のトヨクニ文字のシとバを合体させたシバ神の文様が描かれている心なシバ教徒だったことを、また、前三世紀までインドの歴史に輝かしい足跡を残したアヴァンティ王国がインドでも最大のシバ信仰の中心地だったことを意味している。だが、それにしても、古代のギリシアの船乗りにもまでその繁栄ぶりを"知られたわれらの""宝石の都々ウジ"ヤインが滅びたのはなぜだろうか。シュメール伝説のティルムンの都、モヘンジョ・ダロがアッシリヤないしアーリヤ人の軍隊によって破壊されたあと、デカン高原のウジャインに移って新しいティルムンの国、アヴァンティ王国を建設したわれわれの祖先は、その後どんな事情でウジャインを放棄しなければならなかったのだろうか紀元前のインドにいたわれわれの祖先は、アヴァンティ王国の滅亡後どこへ去って、どういうルートで古代の日本列島にたどりついたのだろうか

レポートⅡ

デカン高原は神代文字の宝庫だった

われわれは、カリアード・レスの廢塘をあとに、次の目的地であるデカン高原の洞窟寺院へ向かう途中で、このようなことをとめどなく考えていた。



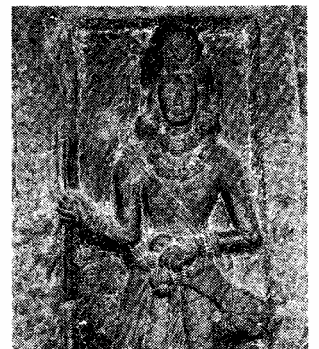
バージャ洞窟寺院の入口

バージャ洞窟寺院の入口インドのデカン高原で活躍した太古の日本人カラ族の聖地カールラ洞窟寺院われわれがインド第二の都ボンベイの南にあるバージャとカールラの石窟をめざしたのは、そこにインド最古の仏塔ストウーパを収めた洞窟があるらしい、もしかしたらカールラは、われわれの祖先の呼び名の"カラ"と"関係があるかもしれない、と思ったからだった。ボンベイの南東およそ二〇キロの西ガーツ山中にあるバージャ洞窟とカールラ洞窟は、アヴァンティ王国が滅んだのと同じ紀元前三世紀ころに造られたとみられる。とすれば、そこにはわれわれの祖先が南下したことを示す痕跡が残っているのではないか……。これはわれわれにとって賭けだった。が、結果は予想以上の大収穫だった。なぜなら、われわれはバージャの石窟で、またもや日本の古代文字を

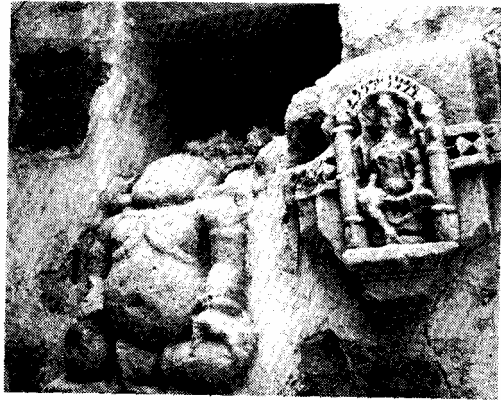
見つけただけでなく、字体を異にする三つの意義深い銘文を確認できたからである。バージャ第一二窟の南、およそ五〇メートルのところにある一四基のストウーパのひとつに、アイヌ文字で「カラ」と読める銘文が刻まれていたことは、明らかに、われわれの祖先のカラ族がウジャインからこの地に南下したことを示していた。バージャで日本のアヒルタサ文字やトヨクニ文字、アイヌ文字で書かれた日本語の銘文が見つかったことは、この地にわれわれの祖先がいたことを紛れもなく示していた。バージャのストウーパに「カラ」という文字が刻まれていたことは、この文字を記したのが、まちがいなく、古代のインドでみずから「カラ」と呼んでいたわれわれの祖先であることを示している。そしてこの文字はまた、バージャから六キロ離れたところにあるカールラ石窟を造ったのも、同じカラ族であることを意味している。バージャ第一二窟の南のストウーパ群からさらに五〇メートルほど南へ行ったところにある石窟の壁面にバージャ洞窟に刻まれた古代日本の戦士たち。"弥生人の服装をしている



弥生人の服装をしている。

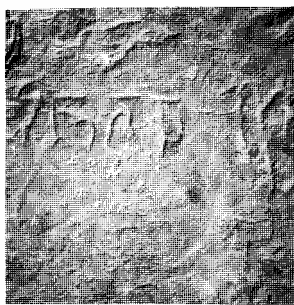


バージャ洞窟に刻まれた古代日本の戦士たち。



日本の力士を思わせるカリアード・パレスの石像

日本の力士を思わせるカリアード・パレスの石像彫られた戦士像の顔たちは、どれを見ても日本人にそっくりだ。バージャ石窟の「バージャ」という地名は、トルコ語の将軍パシャやアラビア語の将軍を意味する言葉とかかわりの深い古代高句麗語で、将軍を意味するピーシャ(沛者。もとは祭司の意)という言葉に由来している。とすれば、先の一四基のストウパのひとつに「……死にて祈る」という言葉が記されていたのは、この地で敵と戦って亡くなったカラ族の十四人の将軍たちに、われわれの祖先が哀悼の意を表して残したものにちがいがなかった。われわれは、バージャ石窟群の中



ボージブルのシバ寺院で見つかった日本のトヨクニ文字刻文

ボージブルのシバ寺院で見つかったトヨクニ文字刻文でも一番大きい第一二窟の天井部の梁はりに、「室守幸むるもりさきははめ」(この石室を守る者に幸いあれ)と書かれた銘文が

あるのを見つけた。その文字は、前三世紀半ばのアショーカ王時代に使われたインド最古の古代文字、カローシュティ文字やブラーフミー文字では読めないため、これまで未解読文字とされてきたものだった。ところが、この銘文は日本の由緒ある家系や神社に古くから伝わるアヒルタサ文字で読め、少なくとも紀元前三〇〇年ころまで湖るものらしい。バージャの石窟にこれらの銘文を残したわれわれの祖先は、どうやら紀元前三〇〇年ころ、デカン高原に侵入してきた敵と戦いながらアヴァンティ王国の栄光を守ろうとしたカラ族の精鋭部隊だったらしいのである(インド最古の文字が日本のアヒルクサ文字から派生したもので、アヒルタサ文字が中国・殷代の甲骨文字の草書体として数千年前から使われてきたことは、すでに徳間書店刊『謎の新撰姓氏録』の中で証明されている)。

[インドの神代文字碑文]

●アマラーヴァティ碑文南インド初期の仏教遺跡として有名なアマラーヴァティ遺跡の寺院の床に描かれた碑文。図のような文字群は、日本に伝わるイズモ文字と基本的によく似ており、地球文化研究所では、次のような解読結果を得ている。テラヲツクレバビクヤビクニツドヒクル(寺を造れば比丘や比丘尼集ひ来る)この碑文が描かれた時代はいつか定かではないが、アマラーヴァティ遺跡は、紀元前三世紀のマウリア朝時代、最初期のストウパが建設された頃の遺跡とみられる

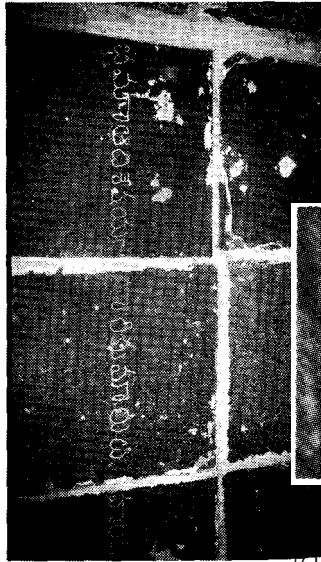
地球文化研究所による解読結果

原文	𑀓𑀲𑀭𑀮𑀯
トヨクニ文字	トハナアレ
発音	トハナアレ
意味	永遠な在れ

ところから、この碑文もまた、アマラーヴァティ仏教寺院の創建に伴って残されたものとみられる。

テラヲツクレバビクヤビクニツドヒクル

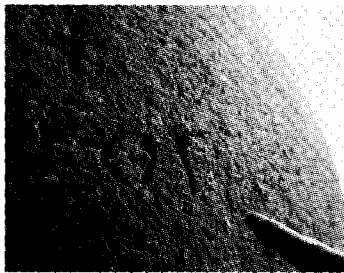
タイル上の文字	原型・読み方
𑀮	テ
𑀭	ラ
𑀯	ツ
𑀰	ク
𑀱	レ
𑀲	バ
𑀳	ビ
𑀴	ク
𑀵	ヤ
𑀶	ビ
𑀷	ク
𑀸	ニ
𑀹	ツ
𑀺	ド
𑀻	ヒ
𑀼	ク
𑀽	ル



●バージャ石窟碑文 B バージャ石窟群中、撮大の第一二窟の天井部の梁に刻まれた碑文。インドの古代文字であるカローシュティ文字やブラーフミー文字では読めないため、未解読文字とされてきたが高橋がアヒルクサ文字で解読したところ、のような結果を得た。ムロモリサキハメ(室守幸ははめ)つまり、「この石室をる者に幸いあれ」という意味である。

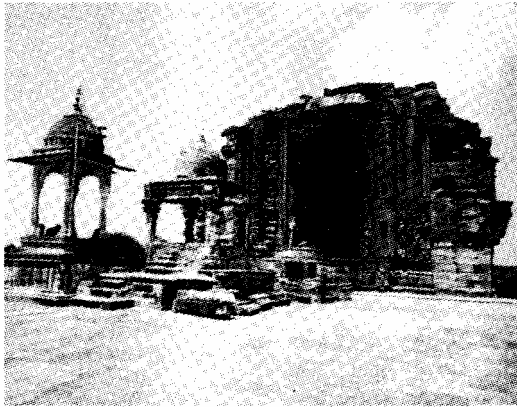


●バージャ石窟碑文 A ボンベイの南東にあるバージャ石窟寺院(紀元前三世紀)のストゥーパのひとつに刻まれた碑文。アイヌ文字で「カラ」と読める。「カラ」とは古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』で栄光と悲惨な末路をうたわれたクル族のことである。カラ(クル)族は、アーリヤ人の侵入に続くインダス文明の崩壊によって、過去の偉大な歴史を抹殺されたわれわれの祖先である。この銘文は、彼らがウジャインからこの地に南下したことを示したものと見える。



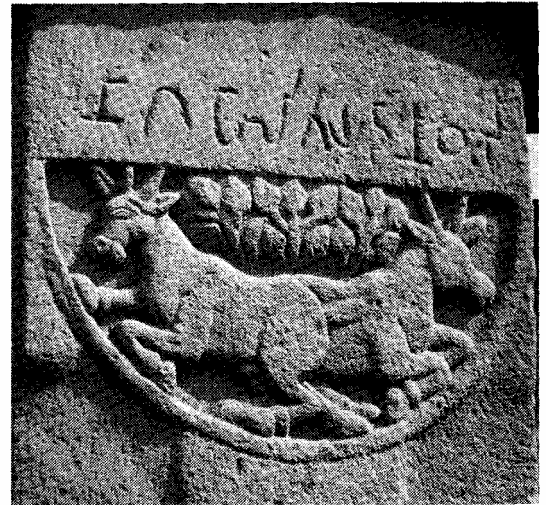
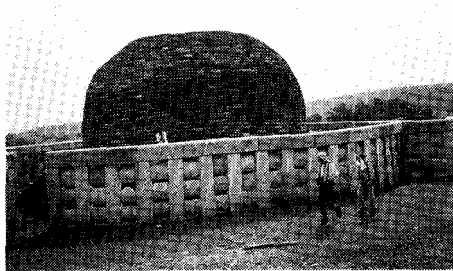
ボージプル碑文宮下文献に「大原の都の地」と記されたデカン高原の古都ボーパールの郊外にあるボージプル寺院の碑文。インド最大のシバ・リンガムを祀ったボージプル寺院の床や壁のいたるところに刻まれた銘文を調査した高橋は、それらが日本のトヨクニ文字やイヅモ文字で書かれていることを発見。その『つは、エジプトおよびインダス文明に共通の祈りの言葉であることを確認した。





日本の神代文字刻文が大量に見つかったボージプルのシバ寺院

日本の神代文字刻文が大量に見つかったボージプルのシバ寺院●サーンチー仏塔碑文
インド仏教美術を代表するサーンチー(マドヤプラデシュの州都ボーパールの郊外にある前三世紀の遺跡)の仏塔に刻まれた碑文。その多くは、アショカ王時代のカロシユティー文字で書かれている。が、中にはそれより古い銘文もある。第二塔の周囲を取り巻く囲い石のひとつに刻まれた図のような銘文は、日本の古代文字で「ユニコウ ンカムイ」と読める。



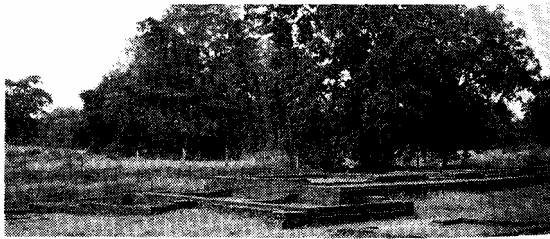
[カピラ城のコイン]

釈迦の父親スッドーダナ王の城跡から出土した紀元前六世紀のコイン。これらのコインには日本の神代文字が使われており、その中のひとつには、アヒルクサ文字で「カムヤキ」と読める王の名が刻まれている。カムヤキは、これまでの日本史研究で一度も実在証明がなかった初代天皇カムヤマトイハレヒコ(いわゆる神武天皇)の第二皇子として記紀に記された神八井耳命(カムヤキミミノミコト)の名前、カムヤキと致している。日本の神八井は、古事記と書紀の編さんに携わった太安万侶の祖先、多(オホ)家の開祖だが、ネパールのカムヤキは、古代日本のクル族から分かれたスッパ族の始祖とみられる。スッパの古音サハは、多家の「多」の古い読み方として知られるサハと一致する。

問題のコインには日本のアヒルクサ文字が刻まれている。

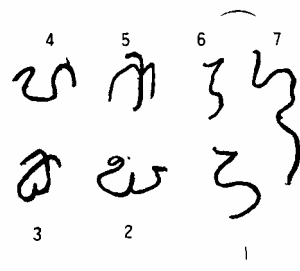


ブツダが育ったカピラヴァツツの城跡



[キャサニア碑文]

スリランカ仏教の発祥地、キャサニアの古い寺院の境内にある石碑に刻まれた碑文。コロomboの東方一キロにある、キャサニアのラージャ・マハ・ヴィハーラ寺院のこの石碑に刻まれた碑文は、フィリピンに伝わるアヒルクサ文字系のタガラ文字で、マナビタテマツル(学び奉る)と記されている(地球文化研究所解説)。この碑文の年代は、寺院内の最も古いダゴバ(パゴダ)の原形が造られたのが、紀元前三世紀とみられているので、その頃まで遡るものとみられる。はたして、スリランカのキャサニアにラージャ・マハ・ヴィハーラ仏教寺院の基礎を造ったのは、インドから渡来した原日本人であったのだろうか。

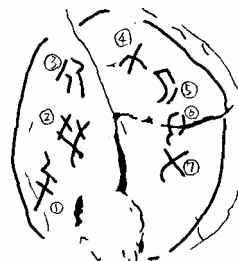


学 び た て ま つ る

寺院の建設者が太古の日本人であったことを物語るラージャ・マハ・ヴィハーラの碑文

[呉城ごじょう文字]

中国江西省清江県呉城遺跡から出土した陶片に刻まれた文字。一九七五年の『文物ぶんぷつ』七期の報告によれば、殷代の甲骨文字より古い文字とされている。その多くは土器の底や石の鑄型に彫られており、大部分は一字のみであるが、なかには複数の文字が刻まれた標本もいくつかある。「文物」に紹介された図の例を見ればわかる



- 1 𠄎 止 且 𠄎 * 𠄎 𠄎 十 * 𠄎
- 2 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
- 3 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎
- 4 𠄎
- 5 𠄎 𠄎 𠄎
- 6 𠄎 X
- 7 𠄎

陶鉢の底に刻まれた文字

呉城遺跡出土の文字

呉城遺跡出土の文字これらの文字のうち、などは甲骨文字にも同じ形があるので、

呉城文字が甲骨文字と関係あることは誰の目にも明らかである。前頁の古代文字を解読するにあたって、右図のような円陣を組んで配列された文字群の場合は、どの位置に視点を置くかが大切である。地球文化研究所では、①から⑦までの文字を次のように読みとり、解読を試みた。①②③の文字を、午・魚・介と読むことに大方の異論はないと思われる。しかし、④⑤⑥⑦の文字は、これまで④を目と読み、⑦を七と読むことはあっても、意味が通じなかったものである。

⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①
 七 ㇿ 𠂔 𠂔 介 𠂔 午
 介 魚 午

そこで、これらの文字を日本に伝わる北海道異体文字(通称アイヌ文字)で読んでみる

と、④の文字はアイヌ文字の𠂔(オ)に相当する。⑤の文字は𠂔(ク)に近い形をしている。⑥の文字はアイヌ文字のㇿ(リ)とまったく同じだ。⑦はアイヌ文字の𠂔(七)がしばしば

七と表記されているので、七(二)と読める。以上をまとめてみると次のようになる。午魚介オクリニここでオクリニを「送り荷」と考えれば、呉城文字が刻まれた陶鉢とうはちの中には""午""の季節、つまり端午たんごの"ころ(午=五で旧暦の五月ころ)採れたイキのいい魚や貝が盛られて、当時の役所か市場に送られたことを意味するのではないだろうか(前頁参照)。呉城出土のその他の資料の正確な実物写真が手許にない段階では、このような読み方もできるということしかいえないが、次頁に示す甲骨文字の解読例

を見ていただければ、アイヌ文字で股の中期(呉城文字)や後期(甲骨文字)の文字を研究してみるだけの価値はありそうである。



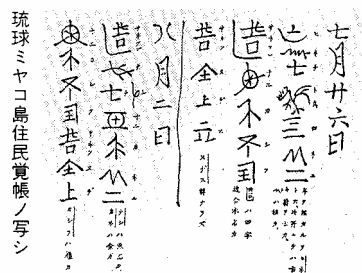
鍋京出土の甲骨文字(無いか無いかと読める)

鍋京出土の甲骨文字(無いか無いかと読める)

古代琉球文字]

鹿児島県の南西諸島でかつて使われていた文字。琉球文字の記録は与那国島と宮古島にいくつか残っている。与那国島の例は、地球文化研究所によれば、父子らヴィシュヌを敬うて太一祝えと解読された。ヴィシュヌはインドのヒンドゥー教三大神のひとつである。また、タイチ(太一)は南方系海人の豊漁祈願の祭りである。宮古島の古記録は次のように解読されている。ヴィシュヌへ父子ら稲と布を納む願い 叶えらるもうひとつの例は、稲と魚 ねぎ 椰子に布を納む願い叶えたまえこれらの宮古島の古記録は、『東京人類学会誌』第十号に住民覚帳ノ写しとして報告されたものであるが、その他にも一般に知られていない例がいくつかある。宮古島の文字は、明治時代の考古学

者、八木奨三郎が、『日本考古学』原史時代"篇第七章、技術第六節""文""字""(符標識)において報告"した、先の与那島(現・与那国島)の文字とほとんど同じものである。これらはイツモ文字を主体とし、アイヌ文字とトヨクニ文字をいくつか混用した形で、奉納祈願文に用いられたことがわかる。以上のような琉球文字はおそらく台湾から九州にかけて、それ以前のアイヌ文字とともに、さらに多くの実例が見つかるものとみられる。



琉球ミヤコ島住民覚帳ノ写シたかさご

高砂文字

台湾から出土した図のような石碑に刻まれた文字。現在、天理市の天理大学参考館に納められているこの高砂碑文の文字は、これまで神代文字の研究者によってアヒルクサ文字系統の文字と考えられてきた。しかし、これらの文字を地球文化研究所で分析した結果によれば、ここにはアイヌ文字、イツモ文字、アヒルクサ文字、そしてフィリピンのタガーフ文字などが組み合わされて使われており、以下のような内容が記されているという。国つ神とウカラの船は戦いついに大いにあ(吾)勝てるを祝い彫りける右の解読にもとづけば、この高砂碑文は紀元前八世紀末に刻まれたと推定される。

この碑文を伝えたのが台湾の高砂族であったとすれば、高砂族は西方の地から台湾に移り住み、台湾の先住民との戦いのちにこの島を占拠し、そしてその一派が日本へも渡来したと考えられる。現在まで高砂族が使用している船の舳先へききにきざまれた文様のひとつは、インドネシアのトラジャ族のマークとまったく同じものである。それは高砂族の移動経過を物語るものではないだろうか。



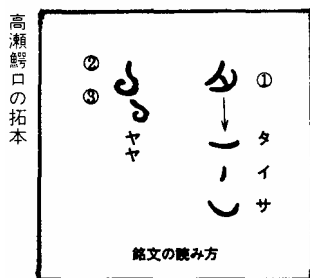
高砂文字を刻んだ石の拓本

高砂文字を刻んだ石の拓本

高瀬鰐口 たかせわにぐち

明治一九年(一八八六)十一月に、神田由道が『東京人類学会誌』第九号で紹介した鰐口(神社にお詣りに行ったとき、社殿の軒下に吊るされた綱を手にして打ち鳴らす金石製の祭器)のことである。となみこの鰐口は、富山県東礪波郡井波町の式内社高瀬神社に伝わるもので、径一八～二〇センチの石の表面に円が刻まれ、円の内部に図のような文字が彫られている。この鰐口の文字は、地球文化研究所の高橋によれば、北海道異体文字で「タイサ」

と読めるという。もしもこの鰐口文字がそう読めるなら、タイサぎ一鰐はハ"シプトやカムトとともに""エ""ジプト""を意味する言葉である。また、①の文字を囲む○は、これを北海道異体文字で読めば〈ラ〉となるが、ラないシラ"ーは古代のエジプト語で""太""陽""を意味している。"このように考えると、高瀬"鰐口は、全体で""エジプトの太陽""を表したものと考えられ"る。次に、鰐口の背の文字を同様に北海道異体文字とみなして読んでみると、②は「ヤ」の形に最も近く、ヤと読むことができる。②と③の文字は二つとも同じ文字だと思われるので、「ヤヤ」と読めることになる。ヤ(ぎ)といえは、これは今から二七〇〇年ほど前、エチオピア出身のファラオとして有名なタルハ力王時代のエジプトにいたイスラエル人が"祭っていた""ヤーウェ""の神を"表す言葉だ。ということは、高瀬鰐口をこの地に残した人が紀元前七世紀のエジプトから日本へやってきたイスラエル人だった、ということの意味することになる。



高瀬鰐口の拓本

斐太_{ひだ}石器

落合直澄が『日本古代文字考』の中で紹介した石器(上巻二十八丁)。同書によればこの石器は、新潟県中頸城郡宮内の社山に鎮座する式内斐太神社の神宝で、ヒスイとみられる青石の表面に、図のような文字が刻

まれている直澄はこれらの文字の配列をアワ文字とアヒルクサ文字が混用されたものとみなして、「ヤナサク」と読んだ。しかし、その意味がわからないため、ヤナサクとは古代の神の名ではなかったかと推測するにとどまっている。高橋はこの斐太石器文字を中国殷いん代・周代の金石文つまり銅器の表面に彫られた文字と比べてみた結果、これらの文字は、それと非常によく似ていることに気づいた。①②③④は、それぞれ今の漢字の「父子九作」の元になった文字である。斐太石器は、ひよっとしたら、今から三〇〇〇年前に遡る古い石器で、ここに刻まれた四つの文字は「父子九作」、すなわち「父と子が心をこめて作ったもの」を意味していると考えられる。しかし、これらの文字を反時計回りに並べてみると、それらはアイヌ文字を曲線的に表したのもよく似ていて、「ミワキサク」と読むことができる。アイヌ文字の「サ」と「ク」の倒置形を合体させると、斐太石器の文字になる。ということは、この石器に神話の高天原で活躍した伊弊諾(キサフタク)神の名が、「神伊弊」として刻まれた可能性も大いにありうることを意味して

斐太石器とその読み方



カ:カ | ヲ+
 ヲ+ | ヲ+
 ヲ+ | ヲ+
 ヲ+ | ヲ+

いる。

斐太石器とその読み方

宮下文献

山梨県富士吉田市の郊外にある小室神社の神官、宮下家に代々伝わる古文書。今から約一〇〇年前、秦の始皇帝が大陸を統一した当時、斉(イツモ)の方士・徐福が富士山の麓にあったという阿祖山太神宮を訪れ、そこに伝わる神代文字の記録をまとめて残したものが原型になったといわれる。宮下文献は、これまでの解釈によれば、日本神話の高天原が富士山麓にあり、国常立くにとこたちと国狭槌くにさづちの兄弟が再会した蓮葉山ほうらいは日本の富士山にほかならないことを記した書物とみなされてきた。が、高橋は、この書物に記された蓮葉山がインドのデカン高原にあるラカジュワル山をさし、高砂之不二山の麓にあった大原の都、阿田都山は、ラカジュワル山地にあるバンパトケヤ山(高砂之不二山)の麓のポーパール(大原)と、サーンチーの仏塔がそびえるヴィディシャ(阿田都)の丘をさしているという仮説を提唱。一九九〇年のインド調査によって、ポーパール郊外のサーンチーやバンパトケヤ、ボージフルの各地に、日本の神代文字で書かれた碑文を大量に発見し、宮下文献に記された高天原は、インドのデカン高原そのものであることを立証した。従来の古史古伝研究は、伝承の舞台をもっぱら国内に限定してきたが、これからは広く海外にも目を向ける必要があるとみられる。



宮下文献に高砂之不二山と記されたデカン高原バンパトケヤ山

宮下文献に高砂の不二山と記されたデカン高原バンパト

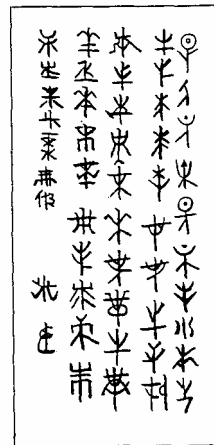
[吉見百穴古字]

埼玉県東松山市の吉見百穴にある古代文字。吉見百穴は日本の代表的な横穴群集墳として知られているが、その建造年代は紀元前の縄文時代まで湖るとみられる。

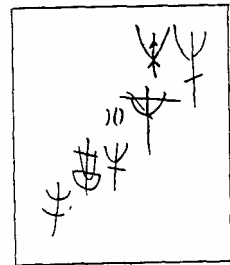
吉見百穴古字

「吉見百穴古字」

埼玉県東松山市の吉見百穴にある古代文字。吉見百穴は日本の代表的な横穴群集墳として知られているが、その建造年代は紀元前の縄文時代まで湖るとみられる。



解読の手がかりとなる桃木文字表



吉見百穴古字

解読の手がかりとなる桃木文字表近年、これらの文字の解読に取り組んだ古史古伝の研究者、吾郷清彦は、吉見百穴古字が皇祖皇太神宮の竹内家に伝わるイザナギ天皇時代の桃木もものき文字とよく似ていることを発見し、桃木文字でこれらを

上から下に読み、次の結果を得た。〈読み〉ツエヒクヘホキ〈意味〉杖曳く尸墳城一方、高橋は、これらを同じ桃木文字で下から上に向かって読み、次のような結果を得ている。〈読み〉ヒユバカマエム〈意味〉火弓場構えむ両者のちがいは、竹内文献に見える桃木文字の文字表の見方の違いに由来する。吾郷は文字表の最初の一行をア行・力行とみなして先の解読結果を得たが、高橋は、同じ行をア行・ハ行とみなして解読した。そのどちらの読み方が正しいか、ということは、もちろんこの一例だけで判断できることではない。けれども、もしも高橋の読み方が正しいと仮定すると、吉見百穴のこれらの文字は、今からおよそ二八〇〇年前のイザナギ時代(紀元前八世紀前半)に起こったという戦争の伝説と一致する。『記紀』や「上記うえつふみ」、「宮下文献」、『竹内文献』その他の古文献のどれにも伝えられているイザナギとカグツチ(火具土)の戦いが実際にあって、火弓場“すなわち”火の戦場”が松山古城に構えられたということになる。日本神話の伊弉諾いざなぎが、イササフタク=イサク將軍(タク〜タケ〜タケルは軍帥を表す古語)として古代のイスラエルで活躍したことや、パリクシト(ハイクシト〜フイクサタ〜イサフタク)としてパーラタ戦争時代のインドでも活躍した実在の王であったことは、いまではすっかり忘れ去られてしまったが、吉見百穴の文字はそのことを思い出させてくれるのである。



紀元前700年ころまで遡るとみられる吉見百穴

紀元前 700 年ころまで遡るとみられる吉見百穴

大いなる玉座から神は命じられた
ブント(神の国)への道を求めよ
ミルラ(没薬)の丘に到る大道を開け
「われは汝の美をつくりし神
われのため神の国より驚異をもたらせ
われ、海と陸の軍隊を導かん……」
私は彼ら(遠征隊)を率い
海と陸の道をはるばる越えて
人を寄せつけぬ海峡の水辺を探さぐり
ついに、ミルラの丘に達した
そこは神の国神の光かがやける土地であ
った……『ブント訪問記』

第 7 章古代の地球 を治めた日本の王 探 検 協 会 の 調 査 II



宮下文献に天之田原男と記された太古日本の王ツタンカーメン

宮下文献に天之田原男と記された太古日本の王ツタンカーメン

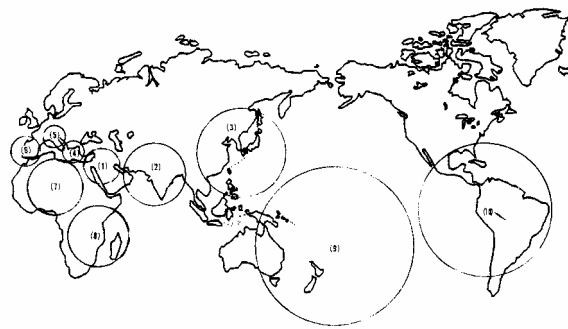
日本に伝わる神代文字は、かつて太平洋を中心に栄えたムー王国と、その継承国家テイルムンの栄光を記すために使われた。その神代文字を手がかりとして、世界各地の未解読碑文に挑戦してみると、驚くべきことに、太古日本の王が全世界を治めていた遠い昔の記憶がよみがえってくる。ム r 文明時代の碑文は、以下に見るいくつかの文明の建設者が、帝王ラ・ムーの教えに従った太古の日本人であったことを物語っている。

レポート 1

古代カラ族の未解読文字分布原日本人カラ族が世界各地に残した文字から浮かび上がってきた文明とその遺跡について一。カラ族の残した文明と思われるものが地球上におよそ十か所ほどある。

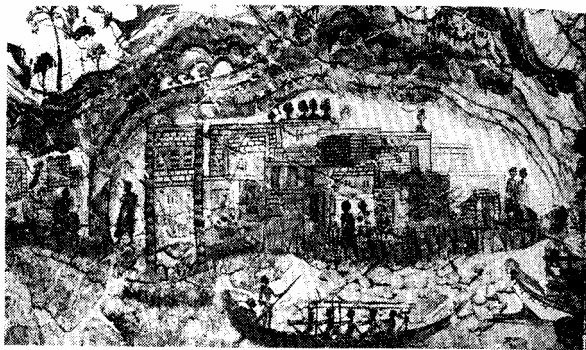
- (1) シュメール文明
- (2) インダス文明
- (3) 原中国文明
- (4) タレタ・エーゲ文明
- (5) エトルリア文明
- (6) イベリア文明
- (7) サハラ文明
- (8) アサニア文明
- (9) オセアニア文明
- (10) アンデス文明

以上の十か所の文明(地図参照)についてそれぞれ簡単に述べていくこととする。



太古の日本人カラ族が残した世界 10 大文明

太古の日本人カラ族が残した世界 10 大文明

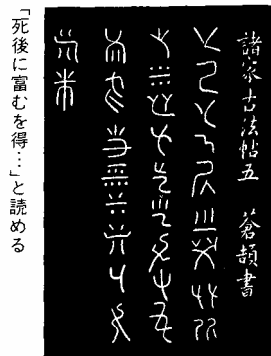


古代カラ族の航海者が寄港した地中海のクレタ島

古代カラ族の航海者が寄港した地中海のクレタ島

第一に**シュメール文明**について。従来シュメール文明は五〇〇〇年前に栄えた文明とされてきたが、シュメールは粘土板に SMR という表記で出ていて、サマリア文明であったと考えられる。サマリアは実は三〇〇〇年前、ダビデ、ソロモンによって築かれたイスラエル王国の都であった。このサマリアの元の古い名前はカルとかクリ、カラあるいはクルという表記がなされていて、古代イスラエル王国の国名はカルクー、すなわちカルの国、カラ族の国であるということが古い文献から確かめられている。そしてわれわれがふつうヘブライ人といっている人たちは、ヘロドトスの『歴史』に登場するカーリア人、フルリ人とつながりがあり、フルリ人はタルリ、つまりクル族であるということで、カラ族の残した文明の第一と考えられる。第二は**インダス文明**。中近東に栄えたシュメール文明とかかわりを持つインダス文明の担い手は、インドのタミル人に代表されるドラヴィダ語族と考えられる。このドラヴィダ語族は地中海方面からインド、日本に移住した人々で、実際に日本語とドラヴィダ語がかつて共通の祖語を持っていたことが多くの専門家によ

って認められている。日本におけるその代表的な言語学者が大野晋教授である。地球文化研究所の高橋良典が解読したインダス文字の銘文からインダス文明の建設者がクル族であったこと、そしてほぼ日本語といえる言葉をインダス文明の担い手が使っていたことが判明している。



漢字の発明者・蒼頡が残した碑文（西安郊外）

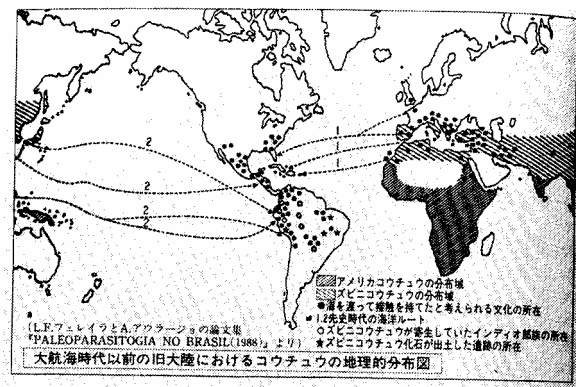
第三に**原中国文明**

明。日本人の祖先の一部をなす倭人がかつて江南、山東、満州、朝鮮の各地にいたことが中国の史書に記されている。そして、その倭人といわれる人たちの到来以前に中国や朝鮮にいた人たちは、日本に伝わる漢字以前の文字を用いて、数多くの碑文を残している。中国の古代碑文もまた日本語で書かれていることから、この原中国文明はわれわれ日本人の祖先、カラ族が築いたものとみることができる。第四に**クレタ・エーゲ文明**。このタレタ文明時代に残された三種類の古代文字、タレタ絵文字、線文字 A、線文字 Bのうち、すでに線文字 B は解読され、古代ギリシア語で書かれていることが判明している。線文字 A と、絵文字を高橋が試みに解いた結果によれば、それらは古代の日本語、つまりカラ族の言葉で書かれていることがわかった。第五に**エトルリア文明**。BC 八世紀の初めに小アジアのカー

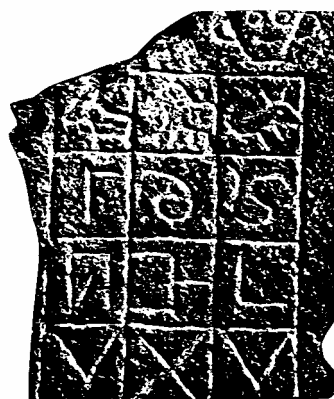
リア人地区からイタリアに移り住んだエトルリア人は、日本に伝わる古代文字を用いて記録を残している。このことからエトルリア文明の建設者も原日本人のカラ族であったと考えられる。第六に**イベリア文明**。イベリア半島のタルテッソスに伝わる古代碑文もまた、日本に伝わる古代文字で記されている。有名なタルテッソス・リングに刻まれた文字を解読した結果、この指輪はアフリカに亡命したイスラエル最後の王ホセア(イサク)がエチオピア朝エジプトの王からイベリアの統治を委ねられたことを記したものと考えられる。イベリア半島のイベリアという言葉は、ヒブル、ヘブルから来ている。また、イベリア半島の古代都市セビリアもサマリアから来ている。このことも間接的にイベリア半島の統治者が古代イスラエル最後の王ホセアとかかわりのあることを暗示している。第七に**サハラ文明**。サハラ砂漠の各地、たとえばアルジェリアのタッシリやマリ共和国のアドラール・デ・ジフォラスに残された古代文字碑文を読むと、アッシリアの追求を逃がれたイサクとヨセフ、イザヤらがホガール山中に身を隠したことがわかる。彼らはエチオピア王ピアンキとタルハカの時代にアッシリアに反撃して、この地にタデメッカと呼ばれる都を造った。そのことも碑文の解読結果から判明している。マリ共和国のタロホスとインタデイニの間にある巨大な石造都市の廃墟は、そのタデメッカに相当し、この地区に残されたティフィナグ文字碑文はBC 七世紀のタデメッカに日本人の祖先の一部が住んでいたことを示している。日本の『新撰姓氏録』はアルジェリアのオーネトやマリ共和国のブーグーニからやってき

た人々の名前を記し、『契丹きつたん古伝』はまた、日本神話のホホデミに相当するヨセフがマリ共和国のイジュンハンに救援部隊を派遣したことを記している。第八に**アサニア文明**。東アフリカのケニヤからタンザニア、モザンビーク、ジンバブエ、南アフリカ、コンゴにかけて無数に存在する遺跡群はこれまで、いつ誰が残してきたものかわからなかった。が、このアサニア文明の都がエンガルクー、あるいはニイケルクーと呼ばれていることは、それがカル国(イスラエル)の滅亡後に再建された新カル国、新ケル国であったことを意味しており、日本の『姓氏録』や『契丹古伝』にケニヤのキスム、ソマリアのキスマユ、スーダンのナパタ、シャバのルブンバシやマノノ、リカシ、ジンバブエ、セイシェルなどの出身地の名前、あるいは都市名が記されている。このことは、これらの遺跡がBC 七世紀からBC 五世紀にかけて、日本の『姓氏録』に名をとどめる沙半王(シャバ王)や飛鳥戸(アスハム)の人々によってつくられたことを示している。第九は**オセアニア文明**。『契丹古伝』によれば神祖ヨセフはオーストラリアやニュージーランド、イースター島に都市を建設したといわれ、実際にオーストラリアやイースター島にはそれらの都市の跡とみられる遺跡があり、日本に伝わる古代文字で記された碑文が残されている。オーストラリア東部のジランバンジやイースター島のラノ・ララクは『契丹古伝』によればキリコエアケが統括したといわれるが、このキリコエアケはイースター島でウオケと呼ばれ、オーストラリアでウオガウオガと呼ばれ

る神となっている。また、イースター島に伝わる文字板のひとつを解読した結果もまたイースター島と日本のつながりをはっきり物語っている。第十はアンデス文明。アンデスの諸王朝は伝説によればステルニとその子孫によって開かれたといわれる。エクアドルとペルーの伝説は、昔カラ族の一行がイカダの大船団を組んで西からやって来たと伝えているが、その指導者ステルニは紀伊半島の古代碑文にもステルニと記された王であったことがわかっている。『契丹古伝』は神祖ヨセフの時代にエクアドルのエスメラルダスに都が置かれたことを記し、日本神話はスクナヒコナが伊勢から常世の国へ旅立ったことを伝え、『史記』は徐市によ



大航海時代以前の旧大陸におけるコウチュウの地理的分布図



ㄱ	ㄴ	ㄷ
ㄹ	ㅁ	ㅂ
ㅅ	ㅇ	ㅈ
ㅊ	ㅋ	ㆁ
ㆁ	ㄷ	ㅈ
ㅊ	ㅋ	ㆁ
ㄱ	ㄴ	ㄷ
ㄹ	ㅁ	ㅂ
ㅅ	ㅇ	ㅈ
ㅊ	ㅋ	ㆁ

エクアドルの地下都市から出土した石板の文字とその解読結果

大航海時代以前の旧大陸におけるコウチュウの地理的分布図エクアドルの地下都市から出土した石板の文字とその解読結果

(徐福とも記された人)が数千人の童男、童女を率いて蓬莱ほうらいを目指したと伝えている。その徐市は日本のアイヌ文字で表されたスクナヒコナ⁶の各文字を合成してつくられた漢字名であることも高橋が証明している。エクアドルのバルディビア海岸から日本の縄文土器や弥生の家型埴輪が出土していることや、アンデスのティアワナコ、エクアドルのクエンカその他から日本語碑文が見つかること、カラ族の子孫が今もブラジルのフルニオ族として日本語によく似たイア

テ語を話していることなどから、日本人の祖先が南アメリカで活躍した時代が過去にあったことは確かな事実とみなすことができる。

レポートⅡ

『竹内文献』と古代文字

『竹内文献』は、「神代の万国史」とも称されているように、上古以来のあめのうき伝承、「空飛ぶ円盤」を思わせる天浮舟ふねに乗って地球に降臨した神々やその子孫(日本人の祖先)が地球を駆けめぐった黄金時代、その後の「万国土どろの海となる」大異変や大戦争による崩壊と再建を記した一大叙事詩である。『竹内文献』のイザナギ神話にはこう書かれている。上古(紀元前七五〇年頃)第二代天皇イザナギは、ヒサカタノアメノマハシラ(比刺方天真柱)を巡って皇后イザナミと結婚したあと、天越根中日見日高見国あめのこしねなかつひみひだかみのくに(今の富山湾地方の氷見をふくむ日高見=石神ピットカムイの国)の栗礼羽くれは赤土大宮で即位した。皇后のイザナミは、ここで蛭子ひるこの尊みことをはじめとする多くの皇子、皇女たちを産んだ。しかし彼女は火の神を産んだとき産道がひどく焼けただれて、七夜苦しんだ。そこで彼女はこの病気をなおすため、夫のイザナギに別れを告げてイダナ国パミル高原からアフスタン国のヘラサカイトに去って行った。文中のイダナ国パミル高原とは、ナ支那国(中国)の西のはずれにあるパミール高原をさしている。また、アフスタン国のヘラサカイトは、アフスタンを今のアフガニスタンと考えれば、イラ

ン国境に近いヘラートをさしていると思われる。しかし、このあとの文で、アフスタン国にはアフガニスタンのカブールのほかに、ウズベタ共和国の首都タシュケントやボハラなどがあったとされているので、当時のアフスタン国は今のアフガニスタンより広がったことがわかる。



イスラエルの都市ゲラサに通じる王の大路

イスラエルの都市ゲラサに通じる王の大路アフスタン国のカブールやボハラ、タシュケントといった町は、いずれもシルクロード沿いの交易拠点で、これらの町にはパレスチナのサマリアやゲラサ、エルサレムなどからやって来たイスラエルの商人たちが数多く住んでいた。そこで、文中のアフスタン国をイスラエル人によって営まれた隊商都市ネットワークと理解すると、この国にあったとされるヘラサカイトは、前八世紀に栄えたイスラエルの都市ゲラサをさしていると考えた方がよい。イザナミがこのゲラサへ病気をなおしに帰ったのは、おそらく彼女がゲラサかサマリアあたりの出身で、イスラエルの女性だったからではなからうか。これは後にイザナミが白人の女性であったことが『竹内文献』に書かれていることでも十分うかがえることだ。イザナギは、妻の重い病気が火の神によってもたらされた

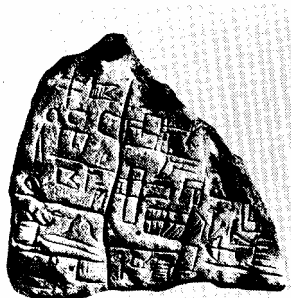
ことを憤り、火の神を剣で突き刺した。このことによって火の神の穢けがれは清められ、皇子は生まれ変わった。その後、イザナギがイザナミのあとを追ってアフスタン国へ行ってみると、皇后はヘラサカイトにおり、元の通り美しくなっていた。そこでイザナギはヘラサカイトに



オーストラリア北部にある古代核戦争の廃墟

オーストラリア北部にある古代核戦争の廃墟

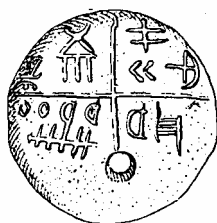
コーカサスの地下都市を探検したアルゴ号の勇士が残したとみられるマイコップ碑文



宮殿を建てて皇后とともに住み、ここでカブイル民王、ガズニ王尊、ファライ王尊を生んだ。イザナギはこれら三人の皇子を、アフスタン国のタシュケント城、ボハラ城、カブイル城のそれぞれの王に任命すると、

彼らを現地に残し、皇后のイザナミと連れだって日本(天国)の都に帰ろうとした。

『古事記』と『日本書紀』によれば、イザナミは火神を産んだとき受けた火傷がもとで、黄泉よみの国に去り、イザナギが火神を殺したあと、黄泉の国に行つて彼女を連れ戻そうとしたが失敗に終わったことになっている。しかし、イザナミが地下世界から生き返つて、イザナギとの間に三皇子をもうけたことは、竹内文献だけでなく『上記うえつふみ』も記している。おそらく記紀の編者は、イザナミと三皇子の出自を隠すために、彼女をヘラサカイトではなく、平坂で死んだことにしてしまったのだろう。ところが、このことを知つたヨモツクニ(泉国)の白人王は、白人女を返すな、イザナギを追い返せとばかり二人を追つてきた。白人の追手をかかわすためにイザナギとイザナミは相談して、逃げ道に桃の実をうず高く積みあげた。白人王と女たちは突然降つてわいたような、おいしい果物の山に、すっかり上機嫌となつて、二人に対する追求の手を休めた。そこでイザナギ天皇は、ヤツシ城の白人王に向かつて「汝をローマ国王に命ず、ネゴイ山の王城に居るべし」と告げたところ、この白人王は天皇の申し出を喜んで受け入れた。こうして天皇はさきにアフスタンの各地に派遣した皇子たちにそれぞれカフル、ボハラ、タシュケントの王として防衛の任務を忠実に果たすよう訓令を發したあと、イザナミ皇后をともなつて日本の都に帰つて来たのである。『竹内文献』のこの記事は、皇后のイザナミが「白人女」であつたと述べているが、これは、第一六代天皇ウ



日本の古代文字で記されたタルタリア遺跡出土の粘土板

ヒチニの娘ミチノク姫の孫に、ヨロボクニヌシ(豫呂母国主)がおり、このヨーロッパ王、すなわち白人王の孫娘がイザナミであったという記事からも裏づけられる。イザナミが日本では白山姫として加賀の自山に祭られ、白い肌の女神を連想させるのは単なる偶然の一致だろうか。彼女がアフスタン国の王妃でありながら、イザナギとともにこの国を脱出したのは、アフスタン国がアッシリヤに滅ぼされたイスラエルをさしているとするれば、当然のことと考えられる。滅亡前にすでにアッシリヤの属国と化していたイスラエルの王妃が、アッシリヤ(またはヒッタイト)の王女の一人で、アーリヤ系の白人女性だったということは、十分に考えられることである。イザナギがイザナミを黄泉よみの国から連れ出したということは、『竹内文献』の文脈の中では、もっぱらヨモツ国と名づけられたヨーロッパ・小アジア(アナトリア高原)イラン高原地域の一画から脱出したことを意味するものとして語られているが、一方、この地域には数多くの地下都市と地下回廊があるので、実際にイザナギはイザナミをアッシリヤ支配下の地下都市のひとつから救出した

「黄泉の神」ことが考えられる。イザナギの時代に活躍したイスラエルの予言者イザヤが、紀元前七五〇年ころ、迫りくる地球の異変を警告して「あなたは岩の間にはいり、ちりの中にかくれて、主の恐るべきみ前とその威光の輝きとを避けよ」(イザヤ書第二章一九節)と勧めたように、当時の人々は洞窟や地下都市に避難していた。イザナギの孫とされるオシホミミま、『宮下文献』によればトヨクミヌ(トヨクモノネ)の孫で、トヨクミヌがアイヌのポニウネカムイと同一人物であったとするれば、オシホミミはポニウネの孫のポイヤウンペに相当する人物ということになる。ポイヤウンペは、アイヌの叙事詩『ユーカラ』の中で少年時代を洞窟の中で過ごしたと語られている。ポイヤウンペの父か、あるいは祖父にあたるアイヌラックルは、魔神にさらわれた日の女神(または婚約者)を救い出すため、地下で魔神と戦っており、このことはイザナギが黄泉の国(地下都市)で鬼神たちと戦った話と同じである。前七五〇年前後の小アジアは、ホメロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』に物語られたトロイ戦争が終わってまもないころで、トロイから脱出したアエネイアースはローマに落ちつき、ギリシア軍の総帥メネラーオスも、ようやくの思いで故郷にたどりついたといわれる。メネラーオスの妻ヘレネーが、トロイの王子アレタサンドロス(パリス)に誘拐されたという話や、オデュッセウスが冥界の王の住むハデースの地下の館を訪れたという話が、日本に伝わる古い物語とよく似ているのは、日本の伝説に登場するイザナギやイザナミ、

太古の地下都市に君臨した「黄泉の神」ミクトランテクトリ



太古の地下都市に君臨したミクトランテクトリ

アイヌラックルやポイヤウンペが、いずれもこの時代に活躍した人物の記憶に基づくものであることを意味している。『竹内文献』はそのような意味で、この時代の失われた日本の歴史(ひいては世界の歴史)を復元する上で、有力な手がかりを与えてくれる。この時期に活躍した天皇たちの行動範囲は、予想以上にスケールの大きなものであり、当時の世界情勢と不可分にかかわっていたことを教えてくれる。本文では、アッシリヤ王とみられる白入王の追求を逃れたイザナギが、その後、ヤツシ城の白人王をローマ国王に任命したと書かれている。この記事の白人王は、おそらくアッシリヤ王とは別人で、トロイから脱出してローマに着いたアエネイアースをさすように思われる。しかし、それがアエネイアースでなかったとしても、同じ前七五〇年ごろに、ロムルスがローマ市を建設し、ローマ(あるいはエトルリア)初代の王になったと伝えられているので、『竹内文献』の記事はまちがってはいない。またここに登場するヤツシの城が、ルーマニア北東部のヤーシ郊外からクタテニ遺跡として見つかったこと、ククテニ遺跡から出土した土偶が、シュリーマンによって発見されたトロイ市第二期の廃墟から出土した土偶と同じヴァイオリン形をしていて、ククテニはトロイからの亡命者によって建設されたことをうかがわせること、さらにイタリアの初期エトルリア文化(ヴィッラノーヴァ文化)は、このクタテニあたりからドナウ川を湖った入々がアルプスを南下して築きあげたものであることを証明する遺物や記録があること。こうした事柄は、イザナギがヤツシ城の白人王に、ローマを建設するよう命じた

という記事と非常によく一致している。アルプスのチロル地方に、東北・北陸地方のナマハゲに似た行事が古くから伝わっていることや、南アルプスのモン・ベゴが、日本の東北地方でベゴと呼ばれている牛の神にちなんだ聖なる山であること、また、『竹内文献』でカムナと呼ばれた文字の名と同じ名称をもつエトルリア系のカムナ族がカモコ力溪谷やピネローロの谷に、日本のアイヌ文字と同じ文字を残していること、カムナ族の文字であるカムナモジを解読した結果、彼らは日本語を話していたとみられること。これらの点を前述の事実と合わせて考えると、イザナギ天皇がトロイ戦争の亡命者にイタリア地方の開発を指示したことは十分に考えられ、ギリシア人やローマ人がイタリアを中心とする南ヨーロッパ地域で勢力をもつ以前は、この地域でも日本語を話す人々が活躍していたことは確かだと思われる。

アイの胸飾り

テーベ王朝最後のファラオ、アイ(国常立くにとこたちの父親の高皇産霊神) たかみむすびのかみが残した胸飾り。天空を司る女神ヌトの頭上と羽の下に刻まれた文字は、これまでエジプト語を記した未解読の象形文字と考えられてきた。が、これらを地球文化研究所の高橋が読み解いた結果、次のような言葉が刻まれていることがわかった。
・日経ひふる天日あむひとともに
出づるトウトアंकアムン/永遠に在れ〔頭上〕
誓ひ/トウトアंकアムン/御身愛で/
死したるのち/あの世でも/朝な夕べに祈る〔右下〕
ここに主//天日奉りて/絵師/イシ

スの宮の日経る札つくる、〔左下〕文中の「主」とは、高橋によれば、前八〇九年の第一次テーベ戦争で亡くなったツタンカーメン(宮下文献に見える天之田原男神)を手厚く葬ったカラ族出身のファラオ、アイをさすといふ。



ツタンカーメンを手厚く葬ったファラオのアイ

233

〔アシカビキミノシ〕

竹内文献に登場する上古第一代天皇。紀元前一六〇〇年頃在位。中国の歴史書『史記』に記された黄帝と同一人物である。竹内文献は、この天皇の時代に次のようなことがあったと伝えている。・上古第一代天皇は宇宙の彼方の天日国から地球に天降り、天元根国(コーカサス山脈/天帝の下界の都)で即位した。・天皇は天元根国に天神人祖一神宮を造った。・また、この神宮の別宮を日球国(飛弾山脈)に造った。・天皇の二十五人の皇子の一人は、天の浮船と呼ばれる宇宙船の建造にあたった。・天皇は万国の地図と文字

をつくらせたあと、日本の富士山から天上の星、天日国に神去った。ここに登場する天日国とは、アメンピ(Amenpi)のアナグラムから、ヴィマナであることがわかる。

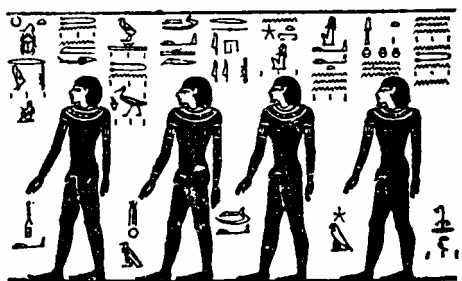
〔アメノトコタチ〕

竹内文献に登場する上古第一三代天皇。紀元前一〇〇〇年頃在位。中国の歴史書『史記』に見える周の文王と同一人物。テーベの都から世界を治めたエジプトのファラオ、アメンホテップ一世として実在した。竹内文献は、この天皇の四十八人の皇子と皇女が、それぞれ北アメリカと南アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、ミヨイ、タミアラに派遣され、国王になったと伝えている。アメノトコタチは、日本の筑波山に仙洞大宮という巨大な地下宇宙基地をつくり、ここから天界に神去った。この天皇の孫の中に、星間宇宙飛行と関わりの深い天日月間星男女尊や長寿守護神がいたと伝えられているのは注目される。竹内文献は、テーベ王朝十一代のファラオのうち、この天皇の治績しか伝えていないが、宮下文献には他の天皇名も記されている。

〔アメノヤソヨロズタマ〕

竹内文献に登場する上古第九代天皇。東日流外三郡アソベ王ウソリ、記紀の天御中主と同一人物。中国では、紀元前一五〇〇年ころ発生した大洪水を治めて夏王朝を開いた禹として知られ、メソポタミアでは、同じ洪水を生きのびて神々の楽

園ティルムンに住んだウトナピシュティム(旧約聖書のノア)として知られている。竹内文献は、この天皇の時代に次のようなことがあったと伝えている。・天皇は宇宙船に乗って万国を巡幸した。メソポタミアのニップール(尼波羅国)に天降ったとき、人々は天皇の来訪を記念して、ジググラト(大黒人山)という階段状のピラミッドをつくった。・万国巡幸の旅から日本に戻った天皇は、息子に位を譲ると恐山に向かい、この地で神去った。恐山霊場の由来はこの時に始まる。おお、見よかの山すそに身を横たえて眠れる大きな蛇をその長さは30オーナ(約56m)幅は8オーナ(約15m)身は水晶のごとく輝き光を放つ金属におおわれているおお、そなたはかの山の蛇の名を知っているかそれはこうだ”炎の中に生きるもの”-----



チュアト(地下都市)から銀河系に旅立つエジプトの宇宙飛行士

[アンデスの黄金板碑文]

イスラエル最後の王ホセア(旧約のイサク/記紀のイザナギ)と、彼の養子になったティルムン王スダース(旧約のヨセフ/記紀のホホデミ)が、紀元前七〇〇年ころ残した碑文。エクアドルの地下都市から出土したといわれる二の碑文の文字は、欧米の学者がイン

ドのブラーフミー文字によく似ていると指摘。故クレスピ神父所蔵の図のような黄金板(52 cm×14 cm×4 cm)を紹介したスイスの作家デニケンは、この碑文の作者を宇宙人とみなした。が、高橋は、これらの文字を、インドのブラーフ、・、1文字の元になった日本の神代文字で読み解いて、次のような結果を得た。・これなる金の板にイサクとヨセフ記す〔一行目〕・ここにわがクルの宝あつめしめ〔二行目〕・のちの世に伝えていしすゑたらしめん〔三行目〕・ヤアエをわれらのカムイとあがめよ〔四行目〕アンデスの黄金板が、日本の古代文字で書かれ、しかも古代の日本語で意味をなすことは、紀元前のアンデスの統治者が日本人の祖先のクル族であったことを物語っている。一九三〇年代に南米の地下都市を捜し求めたナチスドイツのSS隊員は、戦後まもなく、日系インディオのヒバロ族が入口を守るエクアドルの地下都市に侵入し、この黄金板と同じ文字で書かれた何万枚もの金属板を押収したという。「死後に富むを得…」と読める漢字の発明者・蒼頡が残した碑文(西安郊外)



カラ族の地下都市から出土した黄金板碑文

[イザナギ]

竹内文献に登場する上古第二一代天皇。紀元前七二五年頃在位。インドの叙事詩『マハーバーラタ』の中でカウラヴァ(ムー)との戦いに勝利を収めたパーンダヴァ(アトランティス)の英雄ユディシュティラの息子として描かれているパルクシト、すなわち旧約聖書のイサクと同一人物『契丹古伝』に殷叔の名で記され、「日本書紀」に伊弉諾(イサフタク〜パルクシト)の漢字名で表記されたイサク(イザナギ)は紀元前八世紀にアッシリヤ(アトランティス)のためにパレスチナを奪われたイスラエル王ホセアとして実在したとみられる。



[イジュンハン碑文]

契丹古伝に日の沈む西の大陸のはてにある斐伊絢倭と記されたアフリカ大陸、マリ共和国のイジュンハンにある碑文(次頁参照)。サハラ砂漠の青い戦士として知られるスーダン系トゥアレグ族の祖先が残したものとされている。現地でティフィナグ文字と呼ばれているこれらの文字は、これまで解読不能とされてきた。が、ティフィナグ文字と日本の神代文字の類似に注目した地球文化研究所の高橋は、これらの文字の音価

を復元。サハラ砂漠の岩山に刻まれた文字は、紀元前七世紀の初めにアフリカで活躍した日本人の祖先、カラ族が残したものであることを突きとめた。木村重信・大阪大学名誉教授が現地で採集してきた百種以上の刻文は、高橋によれば古代アフリカに都市文明を築いていたカラ族が、前七〜八世紀の戦争と異変の時代に、東方に向かって脱出し、大移動したことを物語っているという。これらの刻文の中に、スダースやタルハカ、ニニギといった固有名詞が見えることは、イジュンハン碑文がエチオピア朝エジプト時代に記されたことを意味している。タッシリの壁面に描かれた古代日本の貴婦人たちは、この時代に、タルハカ(ニニギ)やスダース(ホホデミ)に導かれて、アフリカに侵入したアッシリヤの暴虐から逃がれたのである。



サハラ砂漠のタッシリ高地

サハラ砂漠のタッシリ高地

アツシリヤ(アトランティス)のアフリカ侵入によって東方へ避難する古代カーリア(ムー)の貴婦人たち



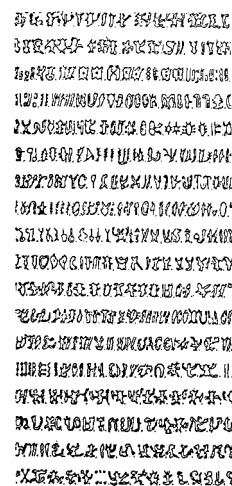
アツシリヤ(アトランティス)のアフリカ侵入によって東方へ避難する古代カーリア(ムー)の貴婦人たち

[イースター島文字]

イースター島で発見された謎の文字板コハウ・ロンゴロンゴに書かれている文字。図の文字板には、日本人の祖先の一部をなす古代イスラエルの民=カラ族(旧名カルと呼ばれた首都・サマリアの人々)の一グループが、この島を経て葦原の瑞穂あしはらみずほの国と呼ばれた日本に向かったことが記されている。イースター島はかつて、太平洋を航海するバルサ(筏船)の船団の重要な寄港地で、この島と日本は熊野の諸手船もろたぶねと呼ばれる快速船で結ばれていた。日本の熊野にある列石がイースター島のアフ(モアイの台座)とよく似ていることは、すでに何人かの研究者によって指摘されている。この島の文字板が熊野の諸手船について述べていることは(左の訳文参照)、今も

日本で行なわれている諸手船もろたぶね神事の伝統の中に生きており、日本とイースター島との失われたつながりを明らかにするものとして注目される。以下、アタン文字板の訳(部分)を示す。贅ささげたてまつりて降ることなき雨が降らめと水をも飲まずひと時なむも寝ずに夜昼となく海見晴らしし父母ちちははたちを讃えまつらく熊野の諸手船の楫をとり我ら神さびつつ廻る…(下略)

エステバン・アタンの文字板

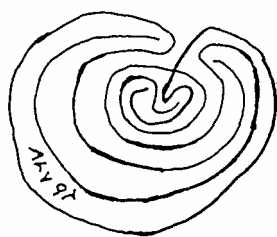


エステバンアタンの文字板

[エトルリア文字]

ローマ帝国の成立以前にローマ市を建国したエトルリア人。彼らの残したエトルリア文字は、いまだに解読されていない重要な文字のひとつである。図の迷宮に描かれた記号は日本の古代文字で、「カムサリヌ」(神去りぬ)と読める。エトルリアの人々は彼らの伝説に従えば、紀元前八世紀のトロイ戦争において、炎のトロイを脱出した英雄アエネアスの率いるトロイ派の将兵がローマに移り住んだこと

に始まるといわれている。小アジアからブルガリア、オーストリア、チロルの谷を通過してイタリア半島に南下したとみられる彼らは、その途中にもチロルの谷にカムナ文字と呼ばれる、これまた日本の神代文字と関わりの深い文字群を残している。『竹内文献』は、この時代にイザナギの部下の将軍がトロイからローマへ移り、今日のローマ市を建国したと伝えている。したがってこの地域にエトルリア人が日本の古代文字を用いていくつかの記録を残したことは十分に考えられる。



この地域にエトルリア人が日本の古代文字を用いていくつかの記録を残したことは十分に考えられる。



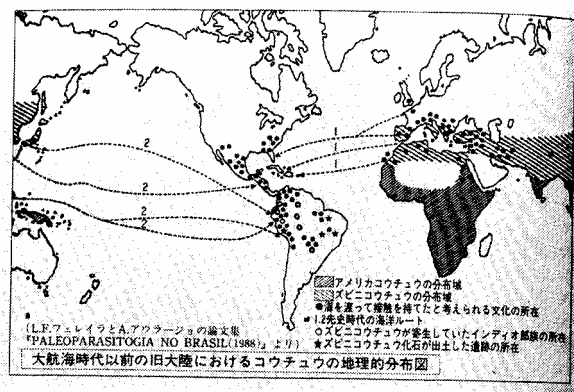
古代エトルリアの壁画

古代エトルリアの壁画

オオトノチ

竹内文献に登場する上古第十八代天皇。紀元前七五〇年頃在位。インドの叙事詩『マハーバーラタ』の中でドリタラーシュトラの息子ドゥリヨーダナと戦ったパンドウの五人の息子の一人として描かれているユディシュティラと同一人物。日本のアイヌに伝わる叙事詩『ユーカラ』にも、ポイヤウンペ(オモタルヒコ)と戦った英雄、カムイオトプシとして描かれている。竹内文献に

よれば、この天皇の時代に地球はまたもや大異変に見舞われ、天皇は恐山から天界に避難して再び地球に戻ったという。オオトノチの都は世界各地に造られ、天皇は天の浮船と呼ばれる空艇に乗って万国を巡幸したともいう。その空艇は一日に八〇〇〇里、ないし一万一〇〇〇里飛ぶことができたというから、当時の航空機は、時速一三〇〇キロ以上のスピードをもった超音速機だったことがわかる。



大航海時代以前の旧大陸におけるコウチュウの地理的分布図



シ	リ	ニ
サ	の	ヘ
カ	カ	ナ
ク	乙	ム
ト	ム	フ
ノ	ク	ツ
マ	マ	マ
ク	ロ	ツ
ル	ル	ル

エクアドルの地下都市から出土した石板の文字とその解読結果

[オモタルヒコ]

竹内文献に登場する上古第十九代天皇。紀元前七五〇年頃在位。日本のアイヌに伝わる叙事詩「ユーカラ」にポイヤウン

ペという名の英雄として描かれ、インドに伝わる世界最大の叙事詩『マハーバーラタ』の中でパーンドウの五人の息子と戦うドリタラーシュトラの息子として描かれたクル族の英雄ドゥリヨーダナと同一人物。宮下文献に国狭槌くにさづち（パーンドウ）の五人の息子の[人、穂千田ほせんた比古として記されたオモタルヒコは、インドの叙事詩『ラーマヤナ』の中で、バーラタ国王ダシャラタ(ミタンニ王ドゥスラッタ)の五人の息子と王位を争った魔王ラーヴァナとして描かれている。が、これは、のちにインドの歴史を改作したアーリヤ人の虚構であり、オモタルヒコ(ドゥリヨーダナ)は、エジプトからインドに都を移したテーベ王朝最後のファラオ、アイ(高皇産霊神)の孫として、また、国狭槌の妻の白清竜プリター)と国常立(ドリタラーシュトラ)との間に生まれた悲劇の子として、ハスティナープラ(ホセンタ)の都に君臨した。『新撰姓氏録』にその名も天日鷲翔矢命として登場するオモタルヒコは、ギリシャの詩人ホメロスが残した二つの大叙事詩、『イーリアス』と『オデュッセイア』の中でも、輝きわたる太陽のごとき英雄、トロイのアレクサンドロスとして物語られている。



オモタルの都ハスティナープラを調査する探検協会

[岐山きざん文字]

中国西安郊外、岐山県の十六羅漢碑に刻まれた図のような文字群。これらの文字を研

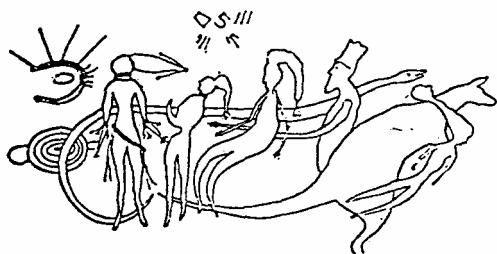
究した地球文化研究所では、この碑文に使われた文字が古代サハラ砂漠で使用されたティフィナグ文字であることをつきとめて、次のように解読している。栄え賜はらなむへブルの瑠璃富むカムイに祈りを捧げなむ右の解読結果によると、中国でも BC 七〇〇年頃サハラで使われた文字が残されていることがわかる。と同時に、この碑文は古代地中海世界で活躍したへブル人(カラ族)が東方の地、中国大陸にも足跡を残したことを物語っている。



[キンバレー文字]

オーストラリア北部のキンバレー山脈一帯で発見された文字。これらの文字は日本に伝わるアイヌ文字、トヨクニ文字とのかかわりを示している。その一例は、同山脈の岩壁に描かれていたもので、地球文化研究所によると日本のアイヌ文字で、アルジイサク(主イサク)と読むことができる。この洞窟画に描かれた人物は丸い頭をしており、BC 七〇〇年頃、サハラ砂漠の各地に描かれたエチオピア王朝時代の円頭人のモチーフと共通する。左図は、キンバレー山脈を流れるプリンス・リージェント川の谷間の洞窟に描かれた壁画である。左端の人物はアンテナ付きの宇宙ヘルメットをかぶっているように見え、その他の三人も何か現代的な宇宙

服を身にまとっているように見える。これらの人物像の上に描かれた五文字は、これまた日本の古代文字で、カムラツク(神ら着く)と読める。すなわち、「神々が到着した」という意味である。この絵から判断すると、彼らは左端に描かれた飛行物体から降り立つ神々を出迎えたかのように見える。それは『契丹古伝』の中に描かれた古代カラ族の王、スサダミコ(ヨセフ)の飛行物体であったかもしれない。コーカサスの地下都市を探検したアルゴ号の勇士が残したとみられるマイコツ



日本の古代文字で記されたタルタリア遺跡出土の粘土板

クニトコタチ

竹内文献に登場する上古第十四代天皇。紀元前八〇〇年頃在位。日本の『ユーカラ』に国造りの神コタンカラカムイとして描かれ、インドの『マハーバーラタ』にクル族の大王として描かれたバーラタ国王ドリタラーシュトラと同一人物。ギリシャではテュエステースの名で知られている。宮下文献は、この国常立(農立比古)に国狭槌(農佐比古)という弟がいて、二人は故郷を離れたあと東方に新天地を開拓したと伝えている。が、この伝承はテーベ王朝の末期にドリタラーシュトラが弟のパーンドゥとともにエジプトからインドへ移住し、戦争で荒廃し

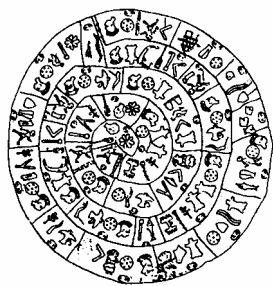
たテーベから父王のアイ(クレオン/周の厲王胡/高皇産霊神)を迎えたことを物語っている。また、宮下文献では二人の兄弟が仲良く国造りをしたことになっているが、日本とインドの叙事詩は、この大王の時代にクル族が分裂してアトランティス(アッシリヤ/アーリヤ)とムー(エジプト/カーリア)の恐るべき戦争が始まり、地軸が何度も傾く異変が発生したと伝えている。竹内文献によれば、クニトコタチはこの時代に位山くらいやまと槍ヶ岳に大宮を造り、その後、天上の星に飛び去ったといわれる。クニトコタチは、大本教の関係者の間で良うしとら(東北)の金神として崇められ、再び世界を治める天皇として甦ることが予言されている。クニトコタチの父王アイ



[クレタ象形文字]

ギリシャのクレタ島にあるファエストス宮殿跡から出土した粘土板の文字。地球文化研究所では、図の円板の文字を、次のよう解読している。主あるじうしはくエホバの民主あるじヨセフうしはく民発たつはセト神かしこむ父の民エロハ民…… [略] 越すは神民…… [略] タルハカうしはく民……上の解読結果によれば、古代のクレタ島にいた日本人の祖先は、前六八七年の里ハ変前に、ヨセフ(スサダミ

コ)に率いられて島を脱出したことがわかる。



クレタ島出土のファエストス円盤

クレタ島出土のファエストス円盤

[クレタ線文字 A]

紀元前八世紀に日本人の祖先、カラ族(カーリア人)の航海者がクレタ島にいたことを示す文字。地球文化研究所では、ハギア・トリアダ宮殿跡から出土した図の粘土板の文字を次のように解読した桶か盥三十風呂三蓋も三 櫂九 酒十三櫓の柱連縄一〇亜麻布十三 盥四五 船五戸板といたも四 櫂六 酒十四〔当時の注文書の一部〕



線文字 A を刻んだクレタ島出土の粘土板

「クレタ線文字 A」
紀元前八世紀に日本人の祖先、カラ族(カーリア人)の航海者がクレタ島にいたことを示す文字。
地球文化研究所では、ハギア・トリアダ宮殿跡から出土した図の粘土板の文字

を、次のように解読した。
桶か盥三〇 風呂三
蓋も三 櫂九 酒十三
櫓の柱連縄一〇
亜麻布十三 盥四五 船五
戸板も四 櫂六 酒十四
〔当時の注文書の一部〕

線文字 A を刻んだクレタ島出土の粘土板

タカミムスビ

竹内文献に登場する上古第一〇代天皇。東日流外三郡誌に見えるアソベ王朝第二代のタミアレ(多弥生)と同一人物。中国では、夏王朝第二代の夏后啓として知られ、メソポタミアでは、ウトナピシュティム(禹/ウソリ/天御中主)の息子ギルガメシュとして知られている。宮下文献のタカミムスビ(エジプト王アイ)とは別人物。竹内文献は、この天皇の時代に次のようなことがあったと伝えている。・天皇は北アルプスに巨大な地下都市(大宮仙洞)を造り、不老長寿の薬を飲んで長生きした。・また、ミヨイ島やタミアラ島(太平洋の古大陸)を視察したあと、檀君国(ウラル山脈一帯)を訪問し、諸王を任命した。シュメール伝説の英雄ギルガメシュはクラブに都を定めたが、その都は富山市郊外の呉羽にもあったといわれる。



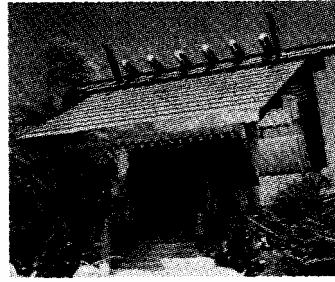
アッシリアのホルサバード宮殿から出土した太古日本の王ギルガメシュ像

アッシリアのホルサバード宮殿から出土した太古日本の王ギルガメシュ像

竹内文献

茨城県北茨城市磯原にある皇祖皇太神宮の神官、竹内家に代々伝わる古文書。今から約二〇〇〇年前、大陸文化の侵入によって古代日本の歴史が失われるのを恐れた武烈天皇武内宿禰の孫にあたる平群真鳥を富山の皇祖皇太神宮に派遣し、そこに伝わる神代文字の記録を漢字仮名混じり文に改めて残したものが原型になったといわれる。この書物には、太古日本の天皇が宇宙の彼方の天日国より飛来して地球全土を治めたことや、この地球がたび重なる天変地異によって荒廃したこと、それにもかかわらず日本人の祖先が天の浮船に乗って天界と地上を往来し、異変で滅びた文明の再建に全力をつくしたことが物語られている。これまでの研究者は、竹内文献のスケールがあまりにも壮大であるため、酒井勝軍のピラミッド調査をのぞけば、見るべき成果を挙げていない。がこの書物に収められた一〇〇種以上の神代文字を、高橋が遺物に即して具体的に調査した結果、竹内文献に記された内容は基本的に真実の歴史を扱っているという。このことは『山海経』や『史記』その他の文献、あるいは言語学、考古学、民族学、神話学、遺伝子分析などの最新成果によっても裏づけられる。古史古伝の中で最も異端の書とみられている竹内文献がこれから日本と世界の歴史を大きく書き変える日もそう遠くはないとみられる。

富山の皇祖皇太神宮



テーベ王朝

紀元前十一世紀から前九世紀にかけて、ナイル河中流域のテーベを首都として栄えたエジプトの世界王朝。地球文化研究所の調査によれば、日本の『宮下文献』に登場するアメノトコタチ(天常立)以下の十一代の天皇は、エジプト・テーベ王朝(第一八王朝)の十一代のファラオとして、現実の歴史の中で実在したことが判明している(次頁の王名対応表を参照)。

ハトシェプスト女王



トトメス3世



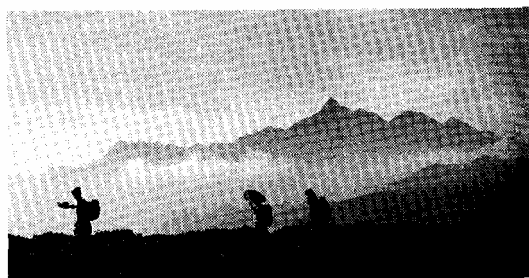
トトメス3世ハトシェプスト女王第一代天常立比古神アメンホテップ一世別名ジムヌ神農比古神第二代天之御柱立神トトメス一世第三代天之木合比女神パトシェプスト女王第四代天之草奈男神トトメス三世第五代天之土奈男神アメンホテップ二世第六代天之火明男神トトメス四世第七代天之水男神アメンホテップ三世(ニンムリア)第八代-天之金山男神アメンホテップ四世(イクエンアテン)別名ナフリア農谷比古神第九代天之火山男神スメンカラ

一第十代天之田原男神トウトアंकアメン
(ツタンカーメン)第十一代高皇産霊神アイ
(クレオーン)

トヨクモノネ]

竹内文献に登場する上古第十五代天皇。紀元前七七五年頃在位。日本の「ユーカラ』にコタンカラカムイの子ポニウネカムイとして描かれ、「マパーバーラタ』に大王ドリタラーシュトラの太子として描かれたヴィカルナ(宮下文献の阿和路比古)と同一人物。この天皇はチベットのカイラス山にある仙洞(シャンバラ)と呼ばれた地下都市に住み、銀河系最大の宇宙船プシュパカ・ヴィマナをもっていた。のちにインドの財宝神クベール、クンビールとして知られ、日本でも金比羅様として祀られるようになったトヨクモノネは、シバ神のモデルとなったオモタルヒコの異母兄であり、チベットではシャンバラの王サナート・クマラの名で、日本では鞍馬山の魔王尊の名で今も崇められている。竹内文献は、二の天皇の時代に、富山の呉羽丘陵に五福城と呼ばれる大宮が造られ、トヨノ文字(別称イヅモ文字)が使われるようになったと伝えている。

大洪水以前に世界の王の都
があった北アルプスの雲ノ
平 伊藤誠一撮影



大洪水以前に世界の王の都があった北アルプスの
雲ノ平 伊藤誠一撮影

「ペドラ・ピンタ ダ文字」]

ブラジル北部の巨大な宇宙卵遺跡として知られるペドラ・ピンタダの岩壁に刻まれた図1のような文字。地球文化研究所ではこれらを、次のように解読している。ヨセフとイサクに船を降せる神を見よイサクヨセフとともに手厚く守れ図の下部に描かれた卍形の奇妙な図形は、古代カラ文明の飛行艇として知られるヴィマナの推進力、構造を表したものとみなすことができる。しかも、文中にヨセフおよびイサクという名前が登場するところから、イサクの別名、古代イスラエル最後の王ホセアの時代(BC 八世紀末)にこのペドラ・ピンタダ碑文が残されたものと考えることができる。ペドラ・ピンタダ遺跡に刻まれた別の碑文(図2)はまた、次のような解読結果が得られている。ステルニの父なるカムイを祭らむナイムラブの母から力を給はらむ右の解読結果にもとづけば、図2のペドラ・ピンタダ碑文の年代は、BC 二〇〇年ころとみなされる。



ペドラ・ピンタダの宇宙卵巨石

。よ
うに
イ
ヅ
モ

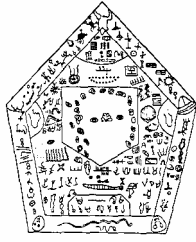


図 1

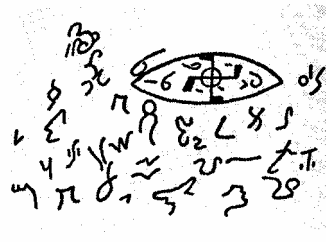


図 2

図 1 図 2

私たちはただ眠るためにわずかに夢を見る
ために来たのだろうか
いや、ちがう、そんなはずはない
私たちが地上でただ空しく生きてゆくた
めに来たなんて!

けれども私の心に何ができよう
空しく地上で生きてゆくために私たちが
来たのだとしたら……

どこにあるのか、私のほんとうの故郷は

…:

アステカ・インディアンの歌

第8章

今よみがえる太古 日本のムー文明

ふたたび美しい星に帰る日をめざして



ペルーのイカの石に描かれた「星を見る人」

ペルーのイカの石に描かれた「星を見る人」

宇宙遊泳するタッシリの少女



宇宙遊泳するタッシリの少女

一般には知られていないが、一九六〇年代にきわめて重大な意味をもつ発見があった。それはトルコのカップドキアにおける巨大な地下都市群の発見である。これまでわれわれは太古の高度な文明の存在をオーパーツによって断片的に知るだけであったが、この時からそのような先史の失われた文明の研究・調査は現代科学の最先端をいく専門家の最重要課題となった。トルコの地下都市から発見されたものは太古の高度なサイエンスおよびテクノロジーの存在を証明するものだった。そして、このような地下都市が世界各地に百か所以上も存在すること、またこれらがムー文明として知られる太古宇宙文明の遺産であることが、いまや明らかになるようとしている。「ムー」とは吉代シュメール語で「飛行物体」という意味である。われわれがムーという言葉で表している高度な文明は、かつて地球全体を美しい惑星として統治していた日本人の祖先、クル族(カラ族)が築いた宇宙文明そのものをシンボリックに表現したものであることがはっきりしてきた。太古の

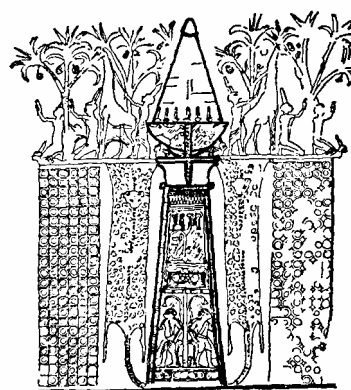
失われた文明がどのようなものであったか、われわれは今ようやくその一端を知りうるようになった。以下、これまでに明らかになったムー文明のスーパーサイエンスのいくつかをこ紹介しよう。

地球探検 1

古代宇宙文明の大きいなる遺産

インドの国際サンسكريット研究所の G・R・ホスエ所長が英訳した古文書『ヴィマニカ・シャストラ』(航空学概説)には、今から二七〇〇年前までインドにあった各種飛行機械のつくり方や使用法が詳しく述べられている。古代インドの賢者マハリシ・バラドワジャの手に成り、今世紀の初めにバラモンの官阿桶旧パンディット.S・シャストリに伝えられたこの由緒あるテキストには、地球の上空を飛べるだけでなく惑星間飛行もできた三つのタイプの航空機の構造と材料、性能、建造法、操縦法などが具体的に記されている。今日の物理学でタキオンとして知られている超光速粒子を電気に変え、三相交流モーターで超電導状態を実現して宇宙空間を飛行するこのヴィマナは、現在アメリカやロシアが必"死になって開発している""空飛ぶ円""盤""そのものである。"古代インドのヴィマナは空を飛ぶことができただけでなく、空中に停止することも、水上に浮かぶことも、水中を潜行することもできた。また、機体を取り巻く電磁場を操作することによって光を放射・吸収したり、雲や嵐を発生させることもできた。重力の問題をすでに解決していた古代インド

の科学者は、あらゆる形の飛行機械をつくることができたばかりでなく、住居や都市、巨大な島さえも宇宙空間に浮かべることができたのである。これらの記述に似たことはインドの有名な叙事詩『マハーバーラタ』や『ラ!マヤナ』などにも記されており、今から三〜四〇〇〇年前に、"クルの神々は""空飛ぶ島""ともいうべき巨大な宇宙ステーションとさまざまなタイプの宇宙船を持っていたことがわかる。インドの数多くの伝説は、紀元前八世紀の宇宙工学者マヤが周囲一万キュービット(直径一・五キロ、円周四・七キロ)にも達する星間宇宙船を造っただけでなく、カガナカーラ・サブハをはじめとするいくつかの巨大な宇宙都市や宇宙ステーションを造ったと述べている。『サマランガナ・スートラ・ダーラ』は、かつてブラフマンが造ったヴィラヤ、カイラサ、プシュパカ、マニカ、トリビスタパの五つの宇宙都市のことを伝えているが、この書物に

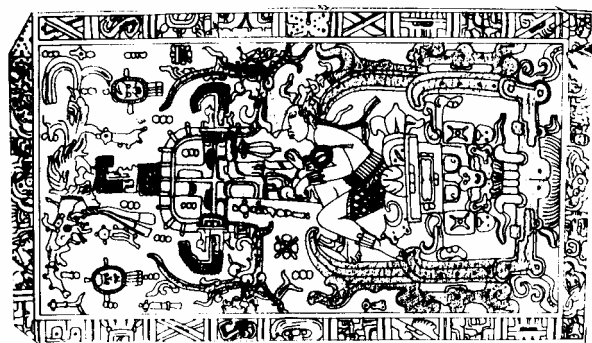


紀元前9世紀のエジプトの墓に描かれたファラオの乗り物。現代のカプセル型宇宙船と燃料ロケットそっくりの形をしている。

よれば、クペーラ(金比羅)の宇宙都市プシ

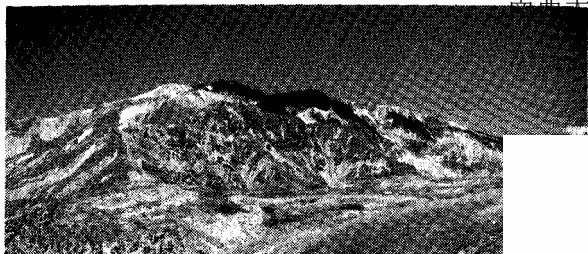
ユパカは五五〇キロ×八〇〇キロという信じられないような規模を持ち、銀河系でひととき美しい輝きを放っていたといわれる。インドとは別に、古代のアンデスやメキシコに高性能の飛行機械があったことは一九四〇年代以降、中南米の各地で進められたいくつかの考古学調査と遺物の再評価から次第に明らかになってきた。一九五二年にメキシコ国立人類学研究所のアルバート・ルース・レイリエル博士がパレンケの"碑銘の神殿"と呼ばれるピラミッドの地下で発見した巨大な王の柩ひっぎの蓋石には、ロケット型の飛行機械を操縦する古代のパイロットの彫刻画がはっきりと描かれている。イギリスの航空技術専門家 J.J・サンダーソン博士がパレンケの飛行機械の復元を試みたところ、それはエドウィン・グレイの考案した EMA モーター(従来とは異なるエネルギーを利用した無限に近い連続運転可能な電磁パルス式モーター、アメリカ特許番号第 3890548 号)の構造とよく似ていることが明らかになった。ということは、この飛行機械が現在でも実用化されていないタキオン駆動式の航空機であった可能性を物語っており、古代のメキシコにも宇宙船といえるものが存在していたことを示している。古代のアメリカ大陸にはマヤの宇宙船以外にも別のタイプの巨大な航空機があった。それは、中米のコスタリカから南米のコロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルーに到る地域から出土した大小二十数個の奇妙な黄金製品の研究から明らかになったものである。動物学者かつ考古学者として知られるイギリス海軍情報部のアイヴァン・サンダーソン博士をはじめ、ベル・ヘリコプターの設計者としても知られるアー

サー・ヤング、世界最

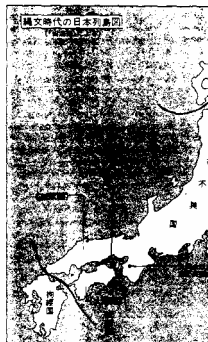


宇宙船を操縦するパレンケの飛行士

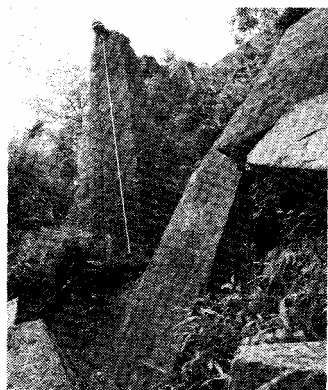
宇宙船を操縦するパレンケの飛行士初のロケット・パイロットであるジャック・ウルリッヒといった第一級の専門家がこれらの"動物形態品"を鑑定した結果、まちがいに古代の航空機の模型であるという結論が出た。それらの航空機は現代のスペース・シャトルよりはるかに高度な性能をもった宇宙船といえるもので、インドの飛行機械と同様、空中から海中へ、海中から空中へスキップし、ジャンプできる機能を備えていたと報告されている。



雲ノ平 (富山県/伊藤誠一撮影)



山海経に記された太古日本の国家



葦嶽山ピラミッド (広島県/西脇要撮影・有賀訓提供)

コ遺跡(ボリビア)から飛び立ったヴィマナは、イースター島に着陸し、そこから南西太平洋のトンガに飛行した。トンガらにニューギニア上空を越えてヒマラヤ山中の神々の地下の館

古代ムー王国の地下都市シャンバラ(仙洞) ネットワーク



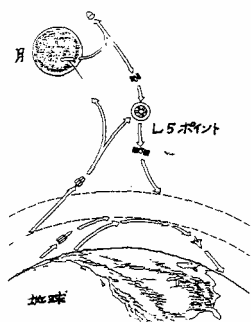
ムー王国の地下都市シャンバラ(仙洞) ネットワークを目ざしたヴィマナは、当時ヒマラヤにあったシャンバラ(仙洞)と呼ばれるムー文明の都からヨルダンのパールベック宇宙港に立ち寄ったのち、さらにエジプトやガナを経て、ティアワナコの宇宙港に戻った。」当時のヴィマナは地上に着陸するとき、ナスカ(ペルー)やソールズベリ(イギリス)、あるいはコーカサス山脈東麓のウスチウルト台地に描かれた地上絵を航空標識として利用していた。別の星と地球を往復するときは、アンデスやヒマラヤ、コーカサス山脈が大きな目印になった。"『山海経』にはこれらの山脈に"天帝の下界の都"があり、神々の地下"の館(地下都市)が地上の航空標識やピラミッド、人造湖をともなって、世界各地に造られたと記されている。太古ムー文明の宇宙船は、地球の七つのチャクラに造られた地下都市から月や火星へ飛び立ったのである。太古ムー文明は、現在 NASA が計画しているスペース・コ

地球探検 II

地球から銀河へ旅 立った神々

それでは、これら太古のムー文明の航空機は当時どのような形で使われていたのだろうか。中国に伝わる世界最古の地理書『山海経せんがいきよう』によれば、当時の飛行ルートはこうである。「アンデスのティアワナ

ロニー(宇宙植民島)をはるかに凌ぐ宇宙ステーションをいくつも持っていた。それらは月と地球の重力が均衡するラグランジュ・ポイント、特に NASA が注目している L5 ポイント周辺に造られたとみられる。そして、月のクレーターにはいくつかの月面基地が、また、クレーター内部には地球と同じように巨大な地下都市が造られていた。中国の古い記録には、宇宙飛行士の后(こう)げいが恋人の常(とこ)餓(が)じょうがとともに月へ向かい、月面上に立ったとき、「凍ったように見える地平線」が見えたので、そこに「大寒宮(たいかんきゅう)だいかんきゅう」を建てたと記されている。この常(とこ)餓(が)は火星の人面岩として知られる航空標識のモデルとなったムーの女王とみら



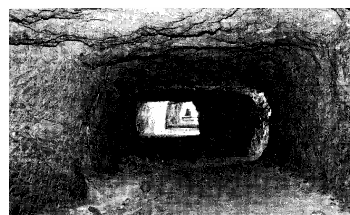
紀元前 8 世紀にアマテラスの宇宙ステーションがあった月と地球の重力均衡点

れる。 ムー文明はさま

ざまなタイプの宇宙船や宇宙ステーションを生み出しただけでなく、そこには超光速素粒子タキオンを利用した発電装置が作動する快適な都市が栄えていた。ティアワナコの太陽の門やトンガの太陽の門は、当時のタキオン発電装置の遺構とみられる。また、中米コスタリカの石球やオーストラリア、アフリカの各地に残る石球は、当時のタキオン照明装置の一部であろう。この時代は宇宙医学と宇宙芸術が栄えた時代でもあった。現在、ヨガや経絡(けいらく)けいらくとして伝

わっている高度な知識は、当時の宇宙飛行士のために組まれた健康法の一部であった。この時代の医学が現代の医学よりはるかに進んでいたことは、アンデスやヨーロッパ、あるいはコーカサス、中央アジアなどの各地から出土した遺骨に見られる脳外科、心臓外科手術の成功例によって確かめられている。古代のアルメニアでは、現代のものにまさるとも劣らない手術用の鋼鉄製ピンセットをはじめとする各種の手術用器具が見つかり、エジプト、ペルーでも歯科用のブリッジ、義歯などの使用が確認されている。芸術面においては、地球の各地で光と音のハーモニーを自然の中で再現する宇宙芸術(コズミック・アート)が実践されていた。アンデス高地のマルカワシや日本の中央高地には、当時の芸術劇場の跡がある。また、南極の厚い氷の下には火星の人面岩と同じような人物の絵が大地に刻まれているだけでなく、ブラジルのリオデジャネイロの近く、コロンビアのボゴタ周辺、メキシコのロルトゥン洞窟、日本の北アルプスの穂高岳その他には、自然の岩山を削り取って加工した神々の像が描かれている。このように進んだ当時のムー文明にあつては、宇宙船、宇宙ステーション、地下都市などの建造にレーザー光線や超 LSI に代表されるスーパーテタロジーが使われていた。その証拠としてプレ・インカのビーズ(穴の直径わずか 0・三ミリ)やメキシコのモンテ・アルバン遺跡から発見された黄泉(よみ)の神ミクランテタトリの仮面(見方を変えれば、太古の超 LSI 回路図)などがある。また、この時代の地球上の各地にはさま

手賀沼の一带、利根川流域のピラミッド山をつないでいくと、それぞれの地域には、なんと太古の宇宙船の設計図が浮上してくる!そして、当時の日本におけるヴイマナの飛行ルートさえ、次のように復元されている。縄文時代以前の飛行ルートのひとつは、南アルプスの農鳥岳のうとりだけ(約三〇〇〇メートル)から北アルプスの雲の平の上空黒部源流地帯の上空を越えて能登半島へ向かうものであった。農鳥岳のノトルとは、アイヌ語で「岬への道」という意味を表している。"日本列島には、この飛行ルートに関連したピラミッドが数多く残されており日本アルプスの各地には今なお当時の地下都市の跡がある。われわれはこれまで、チャーチワードによって唱えられたムー文明の存在が、縄文時代以前の日本とどのようにつながっていたか十分に把握していなかった。が以上のような最近の調査結果を踏まえると、今から一万二〇〇〇年前に滅んだとされるムー文明は、紀元前八世紀まで栄えていた太古日本のグローバルな宇宙文明を、当時の飛行物体の愛称"ムー"にちなんで、別の形で表現したものだという結論に導かれる。つまり、太古日本のピラミッド・地下都市・宇宙船文明こそが、ムー文明の実態であったといえるのである。その昔、この美しい地球から銀河の彼方に旅立ったわれわれの祖先は、インドに伝わる世界最大の叙事詩『マハーバーラタ』によれば、シャンバラの王クベーラとシバの兄弟が築き上げたクル族(カラ族)の偉大な宇宙文明を享受していた。現在の日本人は、『マハーバーラタ』に登場するクルの大王ドリタラーシュトラ(シバ神の父親)が日本



東日流地底城(日本探検協会調査)

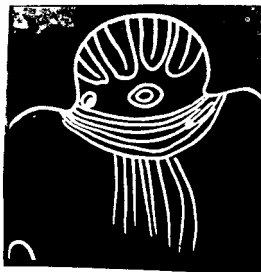
神話の国常立くにとこたちの神であり、『ユーカラ』の主人公コタンカラカムイ(国造りの神)でもあることを忘れ去って久しい。が、日本の各地に祀られている金比羅様は、太古日本のムー文明時代に活躍したインドの宇宙神クベーラにほかならず、京都の鞍馬山に祀られている魔王尊サナート・クマラも、シバ神の兄にあたるクベーラであることが今では明らかになっている(徳間書店刊『謎の新撰姓氏録』参照。)われわれの祖先がかつてこの地球上に築きあげていたムー文明は、アーリア人の侵入にともなう大戦争と異変によって、今から二七〇〇年前にことごとく滅び去った。けれどもわれわれは現代のサイエンスとテクノロジーによって当時のムー文明の輝きを再び取り戻そうとしている。今やわれわれ日本人は、かつての祖先が造りあげたムー文明の真相を解明することによって、かけがえのない地球を再び美しい星につくり替える責任と使命を担っているといえるのではないだろうか

[宇宙服土偶(遮光器^{しやこうき}土偶)]

青森県を中心に、カムチャッカ・北海道から近畿に到る地域を治めた古代津軽王

国(紀元前三世紀ころ)から出土する謎の土偶。宇宙飛行士の気密服にも似たその異様な服装に着目したロシアの A・カザンツェフが、一九五〇年代に、この土偶は太古に地球を訪れた異星人であるという説を発表して以来、世界各国の宇宙考古学者から注目されるようになった。日本のユーフォロジ(UFO 学)の草分けとなった CBA インターナショナルの創設者・松村雄介の話によれば、アメリカ航空宇宙局 NASA の専門家は、カザンツェフの仮説をまじめに受けとめて、この土偶をモデルとする宇宙服の開発に成功したという。紀元前の地球を治めた太古日本のアソベ王朝(いわゆる中国の夏王朝)の系籍を伝える『東目流外三郡誌』によれば、この土偶は紀元前三世紀にマケドニア(秦)に国譲りをした古代イヅモ王国(齊)の大王、オオクニヌシ(齊の王建)の化身である太古のアラハバキ神を表している。古代インドでアーラヴァカ・ヤクシャとして敬われた宇宙神ラーマの別名イシカが、『三郡誌』の中でもアラハバキの別名イシカ神として伝えられていることは、太古日本とインド(ティルムン)の深いつながりを示す一例として、重要な意味をもっている。

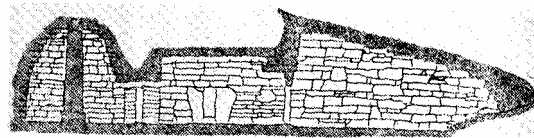
アンリ・ロートが「火星の大王」と名づけた太古日本のアラハバキ神(アルジェリア・タッシリ)



アンリ・ロートが「火星の大王」と名づけた太古日本のアラハバキ神(アルジェリア・タッシリ)

[エトルリアの宇宙船]

一九五九年にイタリアのフィオレンティーノで発掘された「モンタニョーラ山」と呼ばれるエトルリア時代(前七世紀)の古墳は、その断面図を見ると、コロンビアの黄金模型の断面図とよく似ている。このことは、エトルリアの「モンタニョーラ山」が前七世紀ころまで実在した「フリ鳥」タイプの宇宙船をモデルにしたためではないかと考えられる。コロンビアの宇宙船の全長と翼長の比は、黄金模型から判断するとおよそ一六対一三であったことがわかるが、日本の伝説にみえるフリ鳥の翼の長さは一三尋(二・三・六メートル)あったといわれているので、おそらく当時の。フリ鳥「宇宙船」の標準的な長さは一六尋(二・九メートル)くらいであったと思われる。フィオレンティーノの古墳の全長が二八メートルあったと報告されていることは、この「モンタニョーラ山」がフリ鳥宇宙船の実物大の模型として造られた可能性があることを示している。



太古のヴィマナを形どったエトルリアの古墳

入古のヴィマナを形どったエトルリアの古墳

[エトルリアのロケット]

一九六一年にローマ市内のパラティーノの丘を発掘していたイタリアの考古学者は、この丘の内部に設けられたエトルリア時代の地下住居の壁に、ロケット・タイプの宇宙船が描かれているのを発見した。そのロケットは、現在のロケットと同じように発射台の上にあってケーブルで固定され、後部からガスを噴動して今にも飛び立とうとしている。ロケットの背景にはこの噴射ガスをさえぎるための防火壁も描かれている。



太古の秘密を隠したローマの丘

太古の秘密を隠したローマの丘



古代の中国人が想像した天帝の龍車

[古代中国の宇宙飛行士]

中国の伝説によれば、大洪水以前、堯帝に仕えた飛行技師后羿は「天の鳥」に乗って宇宙空間に飛び出し、月面に降立って「大寒宮」を建てたという。王嘉が四世紀に編

集した『拾遺記』にも「月への船」や「星の間に浮く船の話が載っており、有名な屈原の『楚辞』には、彼がヒスイの戦車乗って、ゴビ砂漠から崑崙山脈の上空を飛び、航空測量した話が記されている。

[サンダーバード]

アメリカのインディアンが昔から信奉している鳥。サンダー・バード (ThunderBird 雷鳥)は、その名からもわかるように、稲妻と雷鳴をともなって天に羽ばたく巨大な鳥で、ふだんは高い山の上か雲の中、あるいは地下の洞窟にひそんでいるが、インディアンが滅亡の危機に瀕したときには救いに現われると信じられている。コロラドからニュー・メキシコにかけて住むホピ(穂日)族は、彼らの祖先がかつて宇宙的な規模の異変に遭遇したとき、この鳥に乗って故郷の星から地球へやって来たことを伝えている。北米の太平洋岸に住むキラウト族も、氷河時代の到来とともに餓死しそうになった彼らの祖先を救ったのはこの鳥だったと次のように伝えている。やがて天空に稲妻が光り、雷鳴がとどろき渡ったとき、彼らは雷の音とは違ったもう一つの音が、何か回転しているようなブーンという大きな音がするのを耳にした。それは太陽の沈む西の方角からやって来た。彼らは太平洋の彼方から巨大な鳥の形をした物体が近づいてくるのを目撃したのである。その鳥の翼の長さは、彼らの戦闘用カヌーの二倍ほどもあった。目は炎のように赤々と輝いていた。そしてこの鳥は、一匹の大きな鯨を生きたまま腹にかかえ

ていた。彼らは驚きのあまり身動きもできず、ただ啞然"とするばかりだった。""サンダー・バード""は彼ら"の目の前にその巨大な鯨を降ろすと、天高く舞いあがって消え去った…。アメリカ人のインディアンが伝えるサンダー・バードは「戦闘用カヌーの二倍ほど」もあり、「鯨を生きたまま腹にかかえていた」と言われているので、その全長と翼の長さは日本の""フリ""鳥""とほぼ同じである。"しかもこの鳥はアメリカ大陸の「西の方角」から、「太平洋の彼方」から飛んで来たと言われているので、日本からやって来たと考えてもおかしくはない。なぜなら、日本のアイヌは、ポロシリ(poro-siri 大きな山)のふもとにフリ鳥が一〇機もあつたと伝えているからである。



鯨をつかむ北米インディアンの伝説の鳥サンダーバード

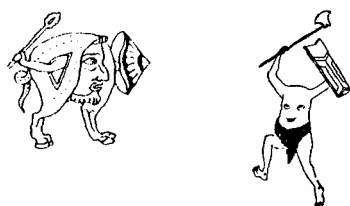
山海経 せんがいきょう

中国に伝わる世界最古の地理書。今から三五〇〇年前に夏王朝を開いた伝説の帝王、禹が洪水ののちに作成したといわれる世界地図の解説書によれば、縄文時代の日本には拘縷こうえい国=九州島、"肢踵きしょう国=中国・四国地方、""胡不興よ国=近畿以東の本州島、肅慎国=北海道島以東の四つの国、ないし肢踵国が二つに分かれた叔歎国=中国地方と大踵たいしょう国=四国島の五つ

の国家があつたこれらの国家は、北海道の肅慎国を除けば、今から三五〇〇年前に湖る三皇五帝時代の世界の王、顓頊せんぎよくこうよう高陽帝が若水(和歌の水、アイヌ語でワッカ""聖なる"水"が流れる川)と呼ばれた紀伊半島の紀ノ川の流域に建てた胡不興国に始まる。大洪水以前の時代の胡不興国の都は、同書によれば、最初、紀ノ川下流の和泉葛城山の麓、和泉市父鬼町から葛城山を越えて粉河こかわ町へ向かう途中にある中津川の丹布津比売神社のあたりにあつた。われわれは今、平安時代に空海が開いた真言宗の本山、高野山の金剛峰寺の近くにある富貴の地に、もう一つの丹生津比売神社を捜し出すことができる。が、富貴の高野山にあるその丹生津比売神社の元宮は、父鬼の高陽山(和泉葛城山)のふもとにある中津川の丹布津比売神社だったといわれている。このことは、現在のわれわれがなげなく親しんでいる富貴の高野山が、もともとは父鬼の高陽山に由来していることを意味している。と同時に、高野山という名前が、かつて紀伊半島の父鬼の山のふもとに都を定めて全世界を治めたと伝えられる額碩高陽帝の胡不興国の名にちなんでいることをも示している。中国の『史記』や、『淮南子えなんじ』その他の記録をひもとけば、今から三五〇〇年ほど前に胡不興の地から全世界を治めた顓頊高陽帝は、そのころ地球の支配権をめぐって彼に反旗をひるがえした共工氏や三苗の賊徒と戦ったとき、紀伊半島の地下深く造られた玄宮にたてこもって彼らの反乱を鎮めたことが明らかになる。われわれはこれまで『墨子』に「三苗大い

に乱れ、夜、怪しげな日出づ。三日の間、朝、血の雨降る…高陽、玄宮(地下都市)にあって禹に三苗の征伐を命ず……」と記された高陽帝の地下都市が、この日本の、紀伊半島にあったとは夢にも思わなかった。けれども、歴代中国の皇帝たちが意味もわからず大切にしてきた『山海経』の中には、現在のわれわれがとうの昔に忘れ去ってしまった太古地球の驚くべき秘密が、それこそ山のように記されているのである。『山海経』を正しい観点から読み直せば、これまで長い間、ヨーロッパと中国の「正統派」の学者によって構築されてきた紀元前の世界史と世界地理が、いかに多くの虚構でおおわれているか、一目瞭然となる。従来の学説は、紀元前に実在した地球規模の異変をまったく否定し、世界各地に残された当時の異変に関する古い言い伝えや記録をほとんど無視して組み立てられているため、いまだに「山海経」に記された太古宇宙文明の真相をつかみきれず、当時の高度な文明の遺産を見過ごしているといえる。

中世のゲルマン人と中国人が想像した『山海経』の怪物の一部



中世のゲルマン人と中国人が想像した『山海経』の怪物の一部

[空飛ぶ蛇]

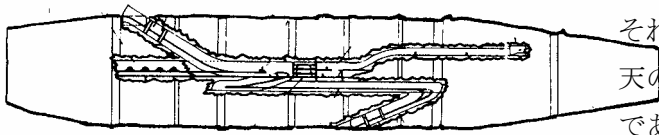
フェニキアの歴史家サンクニアトンが、トロイ戦争の時代(前八世紀)以前に目撃したファラオの乗り物。彼が残した『フェニキア史』によれば、この「蛇」は「鷹」のよう

な声と「光り輝く」外観をもって「あらゆるものを照らし」、「何ものも越えられないスピード」で空を飛び、ひとたび上空に「螺旋」状の弧を描いて「息」を吐けば、「望みどおりの速度」を得ることができる飛行機械だったと記されている。この飛行機械は古代の中近東で、ナール(炎の柱)と呼ばれたファラオの宇宙船をさしている。それは図のような形をした潜水艦型の宇宙船で、頭部に二個の「眼」をもち、赤から青へと「色を変えて空に飛び立った。「偉大な鷹」とも呼ばれたホルスが地下基地から飛び立つさまは、エジプト第二〇王朝のファラオであったラムセス九世の墓の中の壁画に描かれている。当時の地下宇宙基地チュアトのようすは、第十九王朝のセティー世(前八世紀の初めころ在位)の墓室の内部にさらに詳しく描かれている。従って、エジプトの王墓に残された絵やピラミッド・テキストが古代に実際にあったことを記したものであるなら、前九世紀から前七世紀頃まで、エジプトには本物の宇宙船があったとみなさなければならない。前九世紀の終わり頃アメンホテプ四世とツタンカーメンに仕えた第十八王朝エジプトの太守フヤの墓に、カプセル型の司令船を搭載したロケットの壁画が残されていることは、当時の飛行機械が現代の宇宙船と同じものであったことを示している。前七世紀の初めにエジプトを支配したエチオピア王ピアンキ(第二五王朝のファラオ)は、ヘリオポリスの聖所にこの頃まで安置されていた太陽神アトンの宇宙船「セクテット」をその目で実際に見たとも記されている。ピアンキは、ヘト・

ベ



「空飛ぶ蛇」「龍」とよばれた葉巻型宇宙船



その内部構造

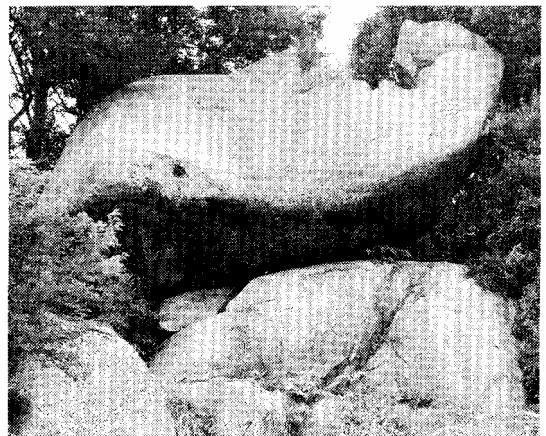
雲ノ平(富山県/伊藤誠一撮影)山海経に記された太古日本の国家葦獄山ピラミッド(広島県/西脇要撮影・有賀訓提供)ベンの聖所で父なるラーを見た。マアトを見た。セクテットを見た(ピアンキ王碑文)。「空飛ぶ蛇」「龍」とよばれた葉巻型宇宙船その内部構造

フリ鳥

ユーカラに登場するフリ・ハヨクペの別称。フリ鳥は、北海道の日高地方ばかりでなく網走や後志でもよく知られていた。網走のタンネシリとピツトカリの間にあるピシュイの"岩穴にはかつて""ヒウリ""という鳥が住んでいたと伝えられているが、その鳥はとがったくちばしと蛇のような目を持ち、二十数メートルもある翼をもって突風を巻き起こすかと思えば、胃袋を突き刺すようなカン高い金属音を発して空を飛んだともいわれる。この巨大な鳥は東北地方でも知られており、秋田県の尾去沢の奥にある大森山は、その昔、全身が金と銀の羽毛でおおわれ、蛇の頭と牛の胴、一三尋ひろ(二三・六メートル)の大きな翼をもった""火の鳥""が落ちてき"たところだと伝えられてい

ン

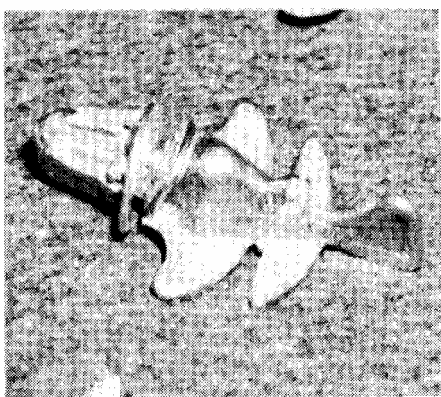
る。しかもそればかりではない。岐阜県中津川市の郊外にある苗木の丸山神社の境内には、伝説のフリ鳥を形どったとみられる巨岩さえある。地元で天然記念物に指定されているこの岩は高さと幅が約五メートル、全長がおよそ一五メートルほどあり、その形が魚のフナ"に似ているところから""フナ岩"と呼ばれている。それを注意深く観察すると、"この岩は""天の鳥船""を形"どった人工の船岩ふないわであることがわかるだけでなく、三角形の翼を補ってみるとその長さは二〇メートルくらいになり、実物大の模型だったと考えられる。そしてこれとほとんど同じ形をした純金の模型がボゴタの黄金博物館にあることはきわめて重大な意味もっている。つまり、東北の伝説や北海道の叙事詩に"現れる""火の鳥""フリ鳥""は、ペルーの大地に描かれ"た""ハチ鳥""や""シャチ""、""あるいはコロンビアの""魚""と同じ星間宇宙船であったことを意味・しているのである。コロンビアの宇宙船の多くが、日本の伝説に語られているとおりに、蛇のよう



太古のフリ鳥宇宙船を形どった岐阜県中津川のフナ岩(西脇要撮影・有賀訓提供)

太古のフリ鳥宇宙船を形どった岐阜県中津川のフナ岩

ナ岩(西脇要撮影・有賀訓提供)な頭と牛のような胴をもち、黄金の翼と羽毛をもった鳥として模型化されていることは、日本のアイヌ伝説にしばしば登場するレブン・カムイ(沖の神)、すなわち天から降りてきて海を守る"神となった""シャチ""がア"ンデスの宇宙船とその飛行士でもあったことを物語るものだ。"古代日本のアイヌが""フリ"と呼ばれる宇宙船以外にも""シンタ""(ゆりかこ)""や、""カムイ・マウ""(神風)""といった飛行機械や""ミン""タル""(楽園)ヶカマ""(扁盤)"と呼ばれる大小の円盤、"チランゲツンブ" (天から降りてきた家)と名づけられた宇宙ステーションなどをもっていたことは、数多くのアイヌ伝説や叙事詩にみえている。北海道の洞爺湖周辺には、マヤ語でククルカンと呼ばれアステカ語でケツァルコ"アトルと呼ばれた""羽のあ""る蛇""、オヤウ・カムイ(葉"卷型宇宙船とその乗組員)の話も伝えられている。



フリ鳥と呼ばれたヴィマナの黄金模型

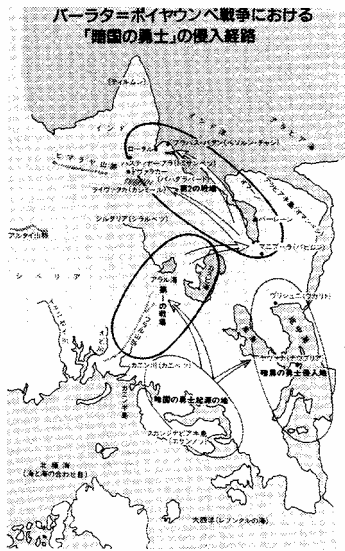
[フリ・ハヨクペ]

アイヌの叙事詩『ユーカラ』に「驚鎧わしよるい」として登場する次のような宇宙船。その時鳥の翼の音が聞こえてきたので頭をあ

げて大空を見るとよもやわれ(ポイヤウソペ)が見ることはあるまいと思っていたあの巨大な鳥が黄金の""フリ鳥""があらわれたその大きな鳥のくちばしは槍のように長くまた、くちばしの先にはルカネスルクが光り輝いて足の爪はまるでクマデの束のようであり爪の先にもスルクが光り輝いているそして、わが頭上にはば"たく黄金の""フリ鳥""からわれにむかって若い女の声が聞こえてきたのである

「私のコタンの名はペップトゥ……(私は兄の指令に従ってあなたを助けに参りました)兄が申しますにはアトウイヤ姫がシヌタプカの神の勇士を魔神の国へ連れていこうとしておりいかなる勇者といえども鎧なしに魔神の国へ連れていかれたら危険であるから"この""フリ鳥""という神"の鎧をあなたに授けてくるようにとのことですさ、早く、早く神の鎧を身につけてください」という女の声がしたかと思えばみるみるうちにフリ・カムイの神のふところが開いて朝日の輝きにも似た光を放つ可愛らしい乙女が姿をあらわしわれにむかって降りてきたのであったこれは何という喜び"さっそくわれは""フリ鳥""の鎧のふところに入りこみアトウイヤ姫なる魔女の

ユーカラ戦争地図（謎の新撰姓氏録 徳間書店刊）



あとを追って大空高く飛びたつたことをわれは思いだすここで物語られた"フリ鳥"はこれまでのアイヌ学者が考えてきたような鳥科の鷲ではなく、インドのハリユピア(ハラッパー)と同じ地名をもつハヨピラ(北海道日高支庁平取町の旧名/アイヌの英雄オキクルミの降臨地)の宇宙港にあった古代の戦闘用飛行機械である。それはインドのガルーダが超近代的な兵器を装備していたようにルカネスルク(水銀の毒)やスルク(毒)をくちばしと爪先に備え、ふだんはフリ・ポール(地下宇宙基地)に翼を休めて隠れているが、疾風が吹きだすとそこから風に乗って外の世界に舞いあがり、天をおおうまでに大きな翼を広げて太陽の光をさえぎったと"伝えられている"鳥である。この鳥のふとところにあたる胴部が開いて中から若い女性が現れたり、主人公がフリ鳥の鎧をまとって戦場に飛び立ったというユーカラの伝承は、明らかにフリ鳥が人間の手になる飛行機械であったことを示している。

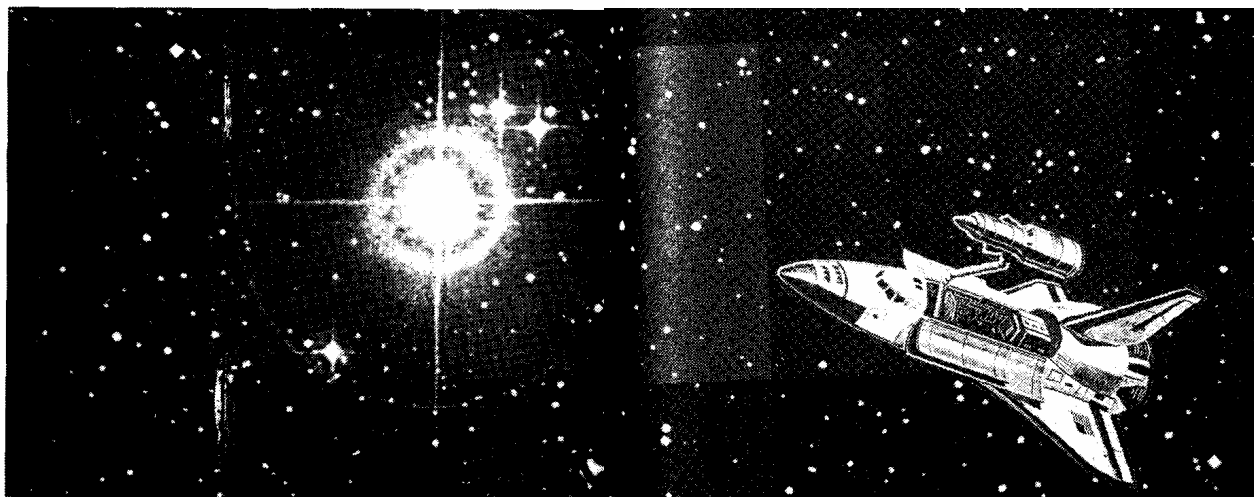


太古日本の宇宙船が着陸したナスカ宇宙港の地上絵

[ユーカラの宇宙船]

一九六九年にアポロー一号が月面着陸に成功して以来、NASAの科学者たちは月面にある人工建造物のいくつかが地球の古代文明とつながりをもっていることを発見した。『チャイナ・リコンストラクト』誌(一九六一年八月号)は、今から三千数百年前に中国の後葬が月に"大寒急宮"を建てたことや、常娥が月世界を訪問したことを王嘉の『拾遺記』(四世紀)その他から推測したが、NASAではすでにこのことを月で確認し、当時の中国の星間宇宙船"鵬"が中南米の宇宙船やインドのガルーダ"とどんな関係をもっていたか、具体的な調査を進めているはずである。インドの『ヴィマニカ・シャストラ』に記されたヴィシュヌの飛行機械ガルーダは、自らの意志(自動制御装置)をもって行動し、水中から空中に駆けあがることもできたばかりでなく、月まで飛んでいける"火の鳥"だった。そのガルーダはエジプト

でフェニックス(不死鳥)と呼ばれ、北欧でフレスヴエルグとして知られ、アイヌの叙事詩『ユーカラ』にフリ鳥として登場する宇宙船である。古代日本と中国のフリ(鵬)がシャチ(鯨・鯢)の形をした星間連絡船であったことは、この宇宙船がアンデスの飛行機械と同じものであることを示している。ナスカの地上絵で有名なペルーのパンパ・コロラダに日本のシャチと同じ形をした地上絵が描かれ、パンパ・コロラダから日本のフリ鳥と同じシャチの形をした容器が出土し、アンデス一帯に“空飛ぶ神々”や人間アイヌを乗せた鳥チリ、鳥人と“空飛ぶ島”の伝説が広くゆき渡っていることは、古代の人間が確実に空を飛び、コロンビア号以上のスペース・シャトルと宇宙ステーションをもっていたことを意味している。



再び故郷の星ブレアデスを目指すユーカラの宇宙船

〈参考文献〉

ムー大陸の子孫たちチャーチワード大陸書房
失われたムー大陸チャーチワード大陸書房
太古の宇宙人デニケン角川書店
NHK 大英博物館ーメソポタミア・文明の誕生 吉川守/NHK 取材班日本放送出版会
アフリカライフ人間世界史 ジェリー・ユーン(編集長)タイムライフブックス
アンデス文明-石器からインカ帝国まで L・G・ルンブレラス岩波書店
世界最後の謎ー失われた文明を求めて リーダーズ・ダイジェスト社
別冊歴史読本 1993年4月号 古代日本人の大航海と謎の未解読文字 新人物往来社
歴史 Eye1993年8月号ムー大陸はどこへ消えた?日本文芸社
歴史読本(1991年3月号) 異端の神々と謎の古代文字 新人物往来社
沈黙の世界エトルリア・ローマ・ポンペイ 野上素一/金倉英一新潮社
LE LIVRE DES MAITRES DUMONDE R CHARBOUXE Roberto Laffont
タッシリ遺跡ーサハラ砂漠の秘境アンリ・ロート毎日新聞社
洞窟の壁画 H・キューン旺文社
先史への発掘 H・D・カールケ大陸書房
古代人の遺言ウイリアム・フィクス白楊社
宇宙人伝説ビーター・コロジモー大陸書房
イースター島の謎 A.ユンドラトフ講談社現代新書
混沌時代(上) I・ヴェリコフスキー法政大学出版局
人類が神になる日 E・V・デニケン佑学社
OEDIPUS ANS AKHNATONZ ヴェリコフスキー
D&C INCOSVIKINGS NOBRASIL Jacques de mahien francisco alves L'ENIGME DES
ANDES Roberto Laffont
ギルガメシュ叙事詩矢島文夫山本書店
太古史の謎アンドルー・トマス角川文庫
幻のアトランティス伝説アンドルー・トマス 二見書房
失われた大陸 E・B・アンドレーエヴァ岩波書店
人類は核戦争で一度滅んだ デヴィッド・W・ダヴェンポート学研
第10番惑星に宇宙人がいたゼカリア・シッチン 二見書房
失われた惑星文明ジョン・A・キール大陸書房
インカ帝国 泉靖一岩波新書
謎の地底王国アガルタ 高橋良典 徳間書店
宇宙から来た遺跡 南山宏 講談社
太古日本の王は世界を治めた 高橋良典 徳間書店
太陽の息子たちー失われたアマゾン文明 マルセル・F・オメ大陸書房
歴史としての聖書ウエルネル・ケラー 山本書店

日本神代文字古代和字総覧吾郷清彦大陸書房
歴史 Eye(1992年8月号)～邪馬台国の謎日本文芸社
ギリシアの神話英雄の時代 K・ケレーニイ中央公論社
MU(1980年11月号、no7)大推理古代核戦争の謎学研
UFO事典 南山宏 徳間書店
中米古代文明の謎 B・グリヤエフ大陸書房
美術の始源 木村重信 新潮社

HISTOIRE INCONNUE DES HOMMES Roberto Charroux Roberto Laffont

LE LIVRE DU PASSE MYSTERIEUX Roberto Charroux Roberto Laffont

先史への宇宙船ピーター・コロジーモ大陸書房

謎のアガルタ宇宙文明高橋良典監修自由国民社

人類は核戦争で一度滅んだ 高橋良典監修 学研ムーブックス

謎の新撰姓氏録 高橋良典 徳間書店

日本とユダヤ謎の三千年史 高橋良典編著 自由国民社

世紀末の黙示録 高橋良典訳 自由国民社

大予言事典悪魔の黙示 666 高橋良典 学研ムーブックス

諸世紀の秘密 高橋良典 自由国民社

ムー大陸探検事典

監修者高橋良典 編著者日本探検協会

発行者櫻井道弘発行所廣濟堂出版

〒107 東京都港区赤坂 6-17-5 電話 03(3584)7610

(営業)03(3584)6123(編集)振替東京 8-164137 印刷所株式会社廣濟堂

<編集担当>新藤恵美子

Printed in Japan ©1993

高橋良典・日本探検協会

定価は、カバーに明示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-331-00624-7C0240